

の武蔵野は誠にゆかしくなつかしい趣がある。やがてみぞれが交り風寒うなりて粗木の梢が淡青の空をさし枯れた秋草の上に霜が置かれ小川の流れから霧たち昇る頃となり凜とした冬の月が上るが冬の眺は雪を頂いた針葉樹に及ぶものななく冬の景色は東北の山々平野に比肩すべきものが少い。秋風ぞ吹く白河の關を越えて北すれば既に重々しい灰鼠色の雲が押し被つて羽毛の如き雪を降らして居る。春梁山脈から吹嵐す風は雪を捲き立て蹴立て、大平洋に迄荒び去る。けれども山地に上れば景色は却つて凄味なく秋田のすぎ青森のひはは其常緑の葉に毬の如く雪を載せ肥大な幹が林立して其赤味を帯びた皮膚のまわりに雲の薄衣が飛來して居る。此等山林の冬景色の壯麗は平野にすむもの、想像も及ばぬ所である。さは言へ冬の大観は雪の國北海道の天地に如くものはない。熱帯の景色は濃艶熾烈であつて温帯のそれは優麗瀟洒であつた。しかし北海のそれは明澄壯嚴なるものである。攝氏零下十數度純白の雪萬物を蔽ふて皚々たる時に銀殿玉樓と輝く藻岩又手稻共に札幌に登れば一望宏濶なる石狩の大平原は朝霧に包まれて穩に眠り東方遙かに浮び出でたる夕張石狩の諸峰はほんのりと薄い董青色をなして

冬
の
景
色

冬
の
景
色
の
美
し
さ

居る。やがて其頂の紫の雲間が綻び初めて黄金の光まぶしく射出さるゝや沈靜し切つた朝霧は俄に動搖を來し次第に消散し去りて旭團堂々と登天する頃は銀の鏡の様な平野は燦々として輝き亘る。我國第一の長流石狩川は向ふの山の麓より淡墨の畫の様に流れ出て、蜿蜒として平野をうねり悠々として海に入つて行く。と、まつの林は黒く太い筆跡の様に所々に見へて居る。日中の景色は實に純麗燦爛たるものであるが夕暮の色彩は繪も筆も及ばない情調が漲る。緩かな大きい曲線を描いた幹と枝とが豊かな圓滿な樹形を作るにれの木の枝毎に小さな氷がついてチラ〜と光り幾千の小鈴を飾つた様に見える。其の背に夕方の太陽が大きく赤く沈んで行く。其赤色も橙色も少しの濁りも苦味もない。大空の半は華麗の色に映え、木と云ふ木、枝と云ふ枝は悉く小さく美しい燭をつける。些の混濁なく濃艶なく熾烈がない純粹な壯麗好調である。此色彩は靜かな夕暮に起るが吹雪の吹捲る北地の景色は又珍らしい壯觀である。天氣豫報の赤球が上り氣温下りて風凄冷の氣を帯びて吹くや何處ともなく灰の様な雪が飛び始める。それが漸く強くなつて一丈程に昂り野面一體に吹きすさび飛び去る。小高い丘に上つて見れば恰も朝

霧が非常な勢で飛行するが如く忽に濃い白色が出来岩をかむ怒濤の如く飛上る。木の枝は皆一方に吹きなびかされて悄悄として立ち吹休むひまには反抗する様に其鬣を振り戻す。此壯烈な吹風も濃密な一團のとゞまつ林には一吹も吹入る事が出来ない。此樹は寒帯の林相を形作る筈のものであるけれども石狩平地の本多博士の所謂温帯の北部に於て最もよく繁つて居る。今は平地のものは伐り絶されたが未だ數千町歩に亘つて残存して居るものもある。眞直に立つ白い横に裂目のある幹が幾萬となく密に立ち並んで規則正しく輪狀に枝を出し濃い緑の針葉を密着して緻密な樹冠の層を形成し雪は一帶に其上に積つて恰も屋根を葺いた様になる。林縁の木は下部から枝を出して居るが故に完全に風をよける。如何に烈しい嵐の日も此林の中に入れば其静寂なるに驚かざるを得ない。稀に葉間を洩れて落ちた雪片は下生のいちろの傘に積つて其赤い玉の實に映えて居る。此木の外に北海道にはえぞまつが繁つて山地の大森林を形成して居るが其幹は一層大きく高く其葉は一層黒く見える。其上に雪ふり積り旭日が之に輝く時の壯麗は又言語に絶せぬものである。第二十三圖は大正四年の十一月農科大學の天鹽演習林で



（鹽天）雪初の林つまぞえ 圖三十二第

初雪の降つた朝に撮つたものであるが此寫眞の如きも實景の美觀の十分の一をも表して居ない。

寒帯林美觀の特色は雪景色に於て最もよく照應せらるゝが此壯大偉麗の冬景色に次で温暖な春が急いで来る。雪がとけ始むるや木々の芽はふくらみやなぎはんのきはしはみの類は軟いねこから黄金の粉を撒き散らす。やがて舊の彌生雪が谷間に退く頃にはかつらきはだしなにれ、せんのきなら、さくら、いたやなど急速に芽を開き、紅、赤、黄、緑の色山を包み、谷間を罩める。やがてこぶしの大きな花は其上に白斑を點じ薄紅のえぞやまざくらが一齊に咲きどろやまならしの葉が黄緑を飾るや忽ちに草木悉く緑色の稜に包まれて郭公がしきりに鳴き、乙女も男の子も袖ふりはへて香ゆかしきす

すらんの花を摘みにゆく十月になれば既に萬山は黄葉に化し特にいたやかへでの橙色とめいげつかへでの眞紅とは殆んど景色の基調をなし秋の全道を支配して居る。北海道の景色は其變化實に目醒しく瞬くひまもなく推移し行く其所に新しい生命が活躍して居る様に見える。

併し我國民性の精華として國人も誇り外人も許す春の花は吉野の櫻に如くものはない其美はしさは一體に爛熳として人を酔す所にあるか又時候の影響に俟つものが極めて多い様に思はれる。久しく緊縮し沈壓せられた冬を経て吾々の心身は倦怠と疲労を生じ變化を望む事切なるに際し果然陽春の時は廻り來り雪はとけ光は和き温さは増し花芽は開く。されば人は温かく軟い外氣に觸れて身心を伸し疲勞を癒さうとするは自然の勢であつて此時に當りのどかな日の光に強きに過ぎず淡きに失せざる淡紅の櫻花がしかも野も山も溢るゝ計りに咲き揃ふて空氣を色付け人の身をも心をも包み酔はしめる。春の櫻が愛でらるゝ所以は生理上心理上當然であつて此花此刺戟を有せざる他の温帯國は實に氣の毒な事である。しかも其花たるやよく春の臙な空氣光線と共鳴し融和し境界を認めしめない。

誠に春の花の長所は爛熳たる所^一にあり陽和な所にあり伸々とした所にあるとしたならば其量其範圍亦限りなく廣く續いて居らなければならぬ。春霞曖昧として雲か花か其奥の知れざる所朝日又豊かな水蒸氣にむされてまどろむの光景に其精華が現はれて來る。あらゆる植物の景觀は時節天候と相應しなければ完全に其特徴を發揮するを得ないが櫻の如きは實に其要を得たものと言はねばならぬ。更に單調穩和は倦怠を來す基であるが櫻は又よく此消息を解するが如く週日ならずして一齊に散り花吹雪となりて一段の美觀を呈するのである。もし此花にして更に長く止つて居つたならば人心は既に倦きて更に濃厚な又は更に淡白なものに向ふであらう。元東京帝國大學の雇教師ホーフマン氏は我國民が貴賤老幼の別なく花を好み眺めるのを賞め稱へて居るが、それは氣候や心理生理状態のみならず幾百年となくかゝる習慣に養はれて來た爲に我國民の慣性となり無意識に花に趨ふに至つたのを賞するものである。即ち櫻と人心とは全く融和し共鳴してあるのである。さくらを以て心とするもの安んぞ單なる表徴と見做し得んや。かの富嶽の尊さを賞づるが如きも然り、高度に於て缺頂圓錐形に於て同等以上のものは世

界になくはないけれどもかく迄全國民が擧つて愛敬賞観するものはない。蓋し其理由は多く具はつて居るのである。甲駿二國の境上殆んど高山なき邊に聳立してよく三千八百米に達せんとし其形は方正な圓錐形をなし所謂白扇倒にかゝるの狀を呈するが故に東海中山兩道の地到る所均しく之を仰ぎ認むるを得るのである。其完全な相稱と快適な對數曲線とはよく美意識に合し其純白清楚な上部と優麗調和の中腹の森林と長く緩かに引いた裾野の穩にゆつたりとした綠色とは實に諸寶流下し音樂常に響く蓬萊の山の相がある。神州の瑞氣此處に鍾り天帝の寵兒茲に降つた觀がある。吾々は太平洋の波の上から武藏野から之を望み富士川の岸から甲斐の高原から之を仰ぎ鎮守のすぎの森の上羽衣のまつの梢の上、心に心に定めた雲の上に神々しく顯はれたる姿を見る。雲霧去來する時旭日登る時夕陽映ゆる時共に其美しさ尊さを賞せらるゝが故に一點の雲なき快晴の空に澄明な頂の白色と中腹以下の綠色とを示す時に最も神々しさを示顯して居る。天然の配色は往々にして色彩響和の法則を超越して居る。由來火山の噴出岩は植生を嘯む事稀であるけれども我邦火山の美は豐潤な綠色を以て鳴る。蓋し此山の如きは

溶岩の多孔質なると氣候の多濕多雨なるとによりて水分を吸入して流失せしむる事なく、少しく下れば混々湧出する泉あり樹林榮ゆべく、風化靈敗せる土壤あり花草培ふべし。されば我國山色の美は是等樹林花草に負ふ所尠少ではないのである。盛夏富士を攀づれば裾野一帯は上方の沃土流下し來り堆積せる處なれば千草の花咲き匂ひ處々に樹木を生ずる等他の野原と異なる所ないけれども特に紅色のはぎ紫の松蟲草黄色のをみなへし白色のし、うど其他青褐紫緑の花々は見渡す限り咲出で、妍を競ふて居るの美觀は平地に於て見る事が容易に出來ない。更に少しく上つて海拔三四千尺に達すれば次第に樹林と化し遂には全く喬木帯となる。ならぶなかつらかはかへて等の落葉闊葉樹は喬大十丈に達し枝極密生し鬱々蒼々天日を蔽ふて居る。其他ほうしななつつはきしほぢきはだあをだこ等を混生し樹下にはしだらびぜんまい等の隱花植物しもつけあづきなしかまつか等の灌木やまぶどうさるなしまたたびの如き蔓莖のあざみよぶすまさうかにかうもりなどの花草隙間もなく生ひ繁つて居る。かくして千五百米の邊より常緑の針葉樹帯となり細葉緻密に樹冠を作り林内陰鬱復天日を見ざるものがある。特に山の

北面に於ては之等青木は頗る優勢にして遠望既に暗緑の帯を中腹に繞らすを見る。是れつがたうひからまつばりもみじらべ等の密生するものであつて其下は草類の發生極めて微々僅かに地竹羊齒の類を存するに過ぎぬ。此密林をぬけて天空快裕の所に出づれば身は既に千三百米の高にあり風強く氣温低く樹木喬大をなす能はずして唯からまつの匍匐屈曲して綠葉を着け更に上れば皆矮生のやなぎな、かまどみやまはんのきの類に僅かのからまつを混する帯に達する。之等は灌木帯と呼ぶるゝ部分であつて其下にはまた種々の草花を生すれども美はしきは更に上部の草本帯には如かない。此邊は地高既に八九千尺空は青く日は強いけれども空氣は冷く風鋭い。富士はその岩石が新らしい爲に他山の如く豊富な草本を此帯に有せないけれども尙種々の小花岩石の間に集りて紅白紫黄様々の色を相映し其形も又世の常のものではない。頂上に近づけば之等の花も跡をたちたゞ地衣の類が岩の面に種々美麗な模様を畫いて居る。更に絶頂剣が峯に立てば四望豁達として太平洋の水脚下に湛え伊豆の島々駿河の海甲信の諸山富士の川武蔵の平野歷々指呼の間にありて炎々の旭團迎ふべく赫々の夕陽送るべきである。雲霧

脚下を蔽ひ電鳴其中に轟く、變幻出沒の雲靜寂不動の水相照應して妙である。

我國諸高山其形は妙にして其色美はしきもの殆んど皆是であるが其登山者をして最も壯快ならしめ奇絶妙絶を覺えしむるはたしかに此水的作用と言はなければならぬ。かの倒富士も火口湖も白糸の瀧も之によつて生成したのである。春霞の變態たるもよく夏の川霧の晴れゆくも美はしい。露も霜も自然を好む我國の人々には看過せらるゝ事がなかつたけれども吾々は初夏のあした萬頃のあやめを包んだ北の國の濕地の霧に一しほの趣を覺えるものである。然れども山地に於て出沒去來する雲霧の妙は亦決して忘れる事が出来ない。

渾圓球上風景の變化極まりなくして各々其特色を有する畢竟其要素の配合如何にありと言ひ得べく此處に住居するもの各々其故郷を慕ふ事些かも上下がなしい譬令一時的の珍奇の感は新風土に止まらしむるものあつても遂には生國の地に戀々たらざるを得ない。エスキモーも美はしき米國の地を逃れて氷雪閉せる北方の島に去り黒人も焦熱烈しき國土を憶ふて歸心矢の如きものがあると云ふ。されども風景の美我國の如きは稀に見る所であつて我國人の是に愛着する決して

單純なる慕郷の念ではない。古今東西を通じてかくの如き所なく實に極東の蓬萊國であつて亞細亞大陸の沿岸を飾る花彩列島である。其美其跌宕其瀟洒何處の地か是に如くものあらう。矧川志賀重昂氏筆を呵して日本風景論を著し日本風景の壯麗優美なるを説くや一世糾然として之に賛したのも故ありと謂ふべしである。氏によれば我邦風景の此の如き所以は

第一、日本には氣候海流の多變多様なる事

第二、日本には水蒸氣の多量なる事

第三、日本には火山岩の多々なる事

第四、日本には流水の浸蝕激烈なる事

にありと實に氣候海流の多様は此地の生物の無盡藏を作り熱温寒三帯に亘る動植物は北半球生物を糾合せるに似て居る。特に松杉の緑、櫻花の淡紅、紅葉の錦の潤澤なる禽鳥胡蝶の鮮麗なる豈英、獨佛、米の比あらんや。加ふるに水蒸氣の多量なる我邦の如きはなく其飛散掩映の變幻極りなき所雲霧霜雪の去來する所生育を助け光線を和げ艶麗壯美の美をなす。特に海濱に於る朝霧や迷景また山岳に起る御

光佛の如き又春雨驟雨の眺めとりどりなる、何れも絶好の畫圖をなさざるはない。火山岩の多數は山岳峻峯を起して全國無數の富岳を作り流水浸蝕して怪奇偉大を添ふ。耶馬溪や寢覺の床や、男鹿半島や神威古潭の如き全列島上に撒布せられて羈旅の客に備へて居る。

實に是世界の樂園であつて美景の瑞國であると謂ふべきである。此國に生を享けたるものの之を味ひ之を樂しみ之を保護し助長せんとするは夫が天職とも言ふべく之を悉く理解し得て始めて始めて意義ある生活と言はなければならぬのである。何人か洋書の教ゆる智慧の果を採り此樂園を去りて個人經濟の畑と化せんとするものぞ。もし所謂實用實利の爲に此美景樂園を破棄するならば追はれたるものゝ行くべき荒野は海外にあらず地下にあらずそは自分の作つた圃場である。衣食足り禮節を知るの時郷土は既に裸出せられて蔽ふものなかるべく、綴りて巻く木の葉もなく知慧を残すべき紙片も跡を絶ちたる時交通の便に藉口して正貨の流出を來し經濟の立場を失ふに到るであらう。

天恵多い我國風景の内地土上の裝飾をなし變化目も文なるもの國土の五割以上

を蔽へる樹林が其最たるものである。其美其偉千萬の言の葉も猶及ばないのである。實に日本は最美の國であるが同時にまつ國さくらの國もみちの國たけの國である。而して尙瑞穂の國たるを失はす八千矛の國たるに耻ぢないのである。前文士銀月氏が日本風景の要素は白素と綠素なりと言ひて新論であると自稱した素より自然了解の低級なるを自白するに過ぎないけれども綠を以て自然美の要素中最重しとしたのは又嘉すべき所である。

自然の美は宏大無邊であつてしかも精緻である。空間的にして又時間的である。自然美は萬であつて藝術美は一部である。自然風景の要素は土地を基として開展するが土地に培はれ水と光に哺まれてしかも土地を蔽ひ之を護り光風をして嬉戯せしむるもの最も膨大なる植物界である。植物界を通じて雄々しく壯んなるものは樹林に外ならぬ。地球上樹木の旺んなる我國の如きはまだないのである。さればチューリングデンの森を讀して

Denn das ist deutschen Waldes Kraft,
Dass er kein Siechtum leidet.

Und alles, was gebrechenhaft,
Aus Leib und Seele scheidet,
Wer einmal diesen Jungbrunn fand,
Der schöpf aus keinem andern;
Thüringer Wald, Thüringer Land,
Nur hier mag ich noch wandern.

と歌つたシェツフェルをして之を見せしめば金玉の句口を突て出づるもの如何に多きかと想像せらるゝのである。

第三節 森林の美

吾等は前に風景と其要素とを眺めて特に植物界の絢爛なるに驚いた。此華麗の植物界に於て王者の如く高く秀で、居るものは樹木であつて神秘中の神秘を藏するものは森林である。此森林は如何なる美を有するか。是今吾等の知らんと欲する所である。されど古來各民族が森林から如何なる美を見出でて居つたかと言ふ事即ち森林の人類に及ぼした影響の歴史的觀察と森林美觀照の歴史とに注意を

拂ふは極めて重要な事である。然れども其事たるや頗る廣汎深甚であつて短時日に叙述評定し得べき問題ではない。

バビロンやエジプトに於ては文明が石材の中に生育した。ギリシヤ、ローマは是に倣つた。されば古代鬱々たりし森林が悉く伐り盡されてその跡をとゞめず唯今に残れるは石材の構築物に過ぎない。然るに北方ゲルマン、チェートンの民族は移住と共に森林に接し其生活上の材料一として之から仰がないものはなかつた。かゝる所ではよし彼等に天地を動かし鬼神を泣かしむる詩才なかりしにもせよ森林の爲に心動かされ感泣せしめられたのは決して一再には止らなかつたであらう。かのユリセスは無人の島に上つて沼澤の邊草深き所に宿らんかまたは橄欖の木立疎らな所にせんかと思案して遂に後者を選んだ。しかし北方の森はかくの如きものではなかつた。奥深く地面を蔽ふた密林であつた。また中世騎士は功名に憧れ森林をその陰鬱なる妨害者と見て居つたが北方の森林は敵軍の侵入を防ぐ領界林であつた。ホメロスは森林を以て神の住所となしたが此觀念は北歐の地に於て始めて眞の榮を見る事が出来たのである。森林を燒盡して農地となしたのは彼

第二十四圖 いてうの老樹と姥神祠 (宮城原の町水野氏邸内)



ルド、トイフェルの一家を描いたベヨックリンがあり。

„Wenn nur die Wipfel noch von Sonne wissen,

Nur noch zuweilen eines Vogels Laut

Verhört in altnungsvollen Fingernissen,

Das Auge kann kein Tier des Waldes erkunden

第七章 天然美と風景

等の執りし行爲なるべきも此は其全部ではなかつた。彼等が狩獵の樂は此處に得られ彼等が尊崇の念は此の内に結ばれたのである。我國には至る處神木として注連を張られ尊崇せられて居る巨樹大木がある(第二十四圖)獨逸人民の一部には「森の静けさ」ワ

Ein Eichhorn nur erblickt ich in den Zweigen;
Es kam behend und still und ist verschwunden,
Die Einsamkeit des Waldes uns zu zeigen,
Und doch hier lebt des Lebens welche Fülle!
Ein stummes Rätsel, das sich nie verraten,
Die Pflanze ist sein Bild und sein Hülle,
Und allwärts grühen seine stillen Taten,
Die Wurzel holt aus selbst gegrabenen Schachten
Das Mass des Stammes und treibt es Himmelwärts,
Ein raslos Drängen, Schaffen, Schwellen, Trachten,
In allen Adern; doch wo bleibst das Herz?"

と歌つたレナウがあつたのである。

又西歐海中の一王國廣い緑の牧場、蔭豊かなる老樹の生せる所人は森を楽しみ
之を識る事深かつた。

Where'er you walk, cool gales shall fan the glade;
Trees, where you sit shall cloud into a shade.
Your praise the bird shall chant in every grove

And winds shall waft it to the powers above,
But would you sing, and rival Orpheus' strain,
The wandering forests soon should dance again;
The moving mountains hear the powerful call
And hear long streams lang, hissing, to their fall. (Pope)

の快げなる有様はよく之を語り其詩歌神話又童話の森林に關するもの多く其繪
畫建築の樹林を背景として其美を發揮せざるなきは亦故なきではない。

東洋に於ても支那は森林豊富であつた。其發達せる木材工藝は之を證明して居
るけれども斧斤以時入山林、材木不可勝用也と戒められた亞聖の言杞憂に終らず
して四百餘州は草原と化した。されば西風吹老洞庭波、一夜湘君白髮多、醉後不知天
在水、滿船清夢壓星河(唐溫如)の景には猶接する事が出来やう。けれども遠上寒山石
徑斜、白雲生處有人家、停車坐愛楓林晚、霜葉紅於二月花の如きは畢竟昔時の夢に過
ぎず。今は只石徑のみ残つて居るであらう。我國に於ては如何と云ふに二神此島に
天降りまして天の御柱を建て、八尋殿を見立て給ひてより山々木々の神々に賞
でられて仕へまつりし事絶えなかつた。實に豊葦原瑞穗國は倭は國の眞秀疊付く

青垣山こゝろ隠れる倭し美はしの國であつたのである。彌遠き神代より今に到る迄家屋船舶什器一として木に仰がざるものなかつた我國の人々の心には樹木に對する嘆美の深く根を下せるものがあつたであらう。けれども後世に到り歌人詩人は奈良や平安の都に籠居して大なる自然を味ふ事なく居ながらにして名勝を知る積りであつた。彼等は只一つまつ、さくらもみぢを詠むことにのみ心をこめて神秘崇麗なる森林の美を辨へざるものゝ如く却て都離れし鄙に神の社神木の崇めらるゝものあるを見るに至つたのである。されば行脚詩人西行の如きが新古今の撰歌を聞きて京に歸るを思ひ止つたのも無理はなかつたであらう。彼の心に映せる森林は、飛鳥川紅葉流るゝ葛城の山の秋風吹きぞしぬらし人麿の如き單純のものではなく、また雪とのみ降るだにあるを櫻花いかに散れとか風の吹くらむ躬恒の如き月並のものではなく、彌彦の己神さび青雲のたなびく日すら小雨そぼふる、讀人しらすのものたるべく、何事のおはしますかはしらねどもかたじけなさに涙こぼるゝ程の深刻なものであつたらう。實に嵐外がよめる、山風や檜も檜も天の川の句は所謂歌人の夢想だも及ばざる所であらう。又、おもしろいぞや木曾路の旅は笠へ

木の葉が舞ひかゝるの誇は竟に彼等の味ふ能はざる所であらう。實に獨人ヤンソン氏が日本神社佛閣のよく森林と融合一致して離るべからざるものあるを知り伊勢の大廟を拜して曰く、此神殿は大なる森林の中にあり材料は常にこの森林中より供給せらる。若し周圍の森林なくしてかゝる建築を想像すれば誰か其神聖なるを思はんや。實に此の如き古朴の神殿が神聖化せらるゝは全く周圍太古の森林に基く。これ歐洲の建築と大に趣を異にする所蓋し希臘の神殿又は中世紀の殿堂は常に獨立し周圍と何等の關聯なし。日本古代神聖の建築は全く自然と密接の關係を有す。小島氏譯と此の如き室内歌人の覺る所ではない。櫻かざして今日も暮しつと見らるゝ大宮人には、吹く風を勿來の關と思ひしを道もせに散る山櫻花の眞味を味ひ得たりし筈はなく、願はくば花の下にて春死なむその如月の望月の頃の意を解せなかつたであらう。如何に春秋の戦に憂身を糞すとも、木の下に旅寢をすればよしの山花のふすまを着する春風の經驗は得られなかつたであらう。されば太古懐しみ親しみたりし森林は後世孤獨可憐のまつ、さくらとなりて人々に映じ其神嚴壯大の觀は唯鄙人の特權となり終つたのである。

かくの如くして森林美の眞諦たる偉麗壯大と極致精妙とは遂に詩人を棄てたのである。されば森林の大部を占め且に夕に之に接せる我國人に是に關する神話の稀少なりしは正に其然るべき所以のあるのであつて三十三間堂棟木の由來の如き僅かに靈化されしものあるを見るけれども尙かのダンテの神曲に出でたる解脱の森林の如き深き思想の現はるゝものなきは亦理と云ふべきである。

更に又地方人にもありても森林は農業の妨害又は薪炭の供給場として見らるるのみに止まり、其精神的美的効果は全く人心を去り近世林業に志すもの亦其美を感じつゝも經濟的價値に眩するが爲に虐伐の斧を止めず動もすれば時を得ずして山に入らんとする。されば今にして暫らく森林の美的効果を考へるのは決して無意義ではなからう。

素より森林は植物界の一部なるが故に植物全般の具ふる美性の外に出でざるは勿論である。吾々が植物界を見ると云ふ時に二つの區別さるべきものがある。それは即ち植物及び吾心である。吾心は吾生活の核心であつて其核心は全過去經驗の集擢である事は屢々述べた通りである。故に今は此方面の論議を除きて植物の美

的性質と人心に與ふる刺戟及び其美的表出如何を考へなければならぬのである。プライトラネツク氏は植物の人心に與ふる影響を表はすものは各國民の童話と詩歌とであると言つて多數の例を擧げて居る。吾々も然思ふ、此事は極度迄簡畧して先に述べたれば茲に贅しない。

抑々植物が有機物として無機物に優る點は只生命ありと云ふのみではない。其色其形の變化進展して止まざるにある。色彩は光線の作用によりて生ずるものなれば萬物は光體ならざる限り一定せる色を有せざる理である。何となれば光線は常に變化するが故である。形に於ても無機體亦變化を受ける(風化浸蝕等により)されども色彩形態の變化は有機物にありては内容であつて其進展は急速である。無機物は全然外的であつて多くは遲緩である。而して有機物の變化は自己生存の目的に向つて向上發展し行くが故に變化は直ちに進行を意味する。無機物にありては則ち然らず。されば此點より植物が風景の要素として如何なる務をなすかを知らるべきである。即ち植物の風景に與ふるものは多様、變化、活氣である。其効果は單調を破り清新の氣を漲らしむるにある。更に今其形に就て考ふるに植物界は一般に

曲線を以て圍まる。是れ其幹葉、花果其他凡ての部分に於て見る所であつて絶體の直線は遂に全植物界を通じて皆無なりと言ふも過言ではない。されば此點より植物界が風景に與ふる所は柔さであり滑さである。其結果は調和を導き快感を生ぜしむるのである。是れ岩石、山嶺と異なる所である。

次に其色を見るに植物界を通じて一貫せる色彩は綠色である。葉の綠色は植物體表面の大部分で又最長期を占める。花の如きは普通人の多く喜ぶ所であるけれども之は植物色彩の一小部分であつて其期間極めて短小である。故に全植物體より見れば風景に及ぼす主要の度は綠葉に比肩すべきではない。而して綠色の性質如何は第五章に於ても論じたる如く寒色暖色の中間にあり興奮沈靜の中間にある。されば綠色は安靜調和幸福の感と與ふ。尙人間の趣味の進化の上より見るも赤、黄、青の如き單色強烈の刺激を好みし野蠻蒙昧の時代より進んで複雑溫和の時代に入るものである。されば勿論灰色の單調を好まず莖色の不安を愛せざる人類の傾向は必ずや此綠色に向はなければならぬ。かくして綠色は生命の色であり安息平和幸福の表徴であり高尚典雅の表示たるに到つた。實に火星に綠色ありとは

天文學者をして生物ありと思はしめ人類ありと考へしむるに至つた。植物は平和繁榮、幸福の情調を與ふるのである。更に綠色は春より秋にかけて徐變をなして美觀を添へ特に潤葉樹は冬の眠に入らんとして最後の華麗を現する點に於て全風景の色調をして益々光輝變化あらしむ。春夏秋冬野邊を飾る種々の花果は特に多數の綠色中に補色を嵌入して美觀を添ふ。

以上は視覺に訴ふる刺激なれども葉末にそよぐ風の音は一種の階調をなして無聲の風景に美趣を加へ梢に霧立て、降る雨の音が集ひ來る百舌の聲無機界に於ては思ひも及ばぬ所である。また植物界にありて獨特なるもの、一は健康に適する爽快なる香氣である。此は芝生をふみ森林に逍遙いしもの、何人も經驗せし所であらう。

かく變化多き内にありて其統一性は一貫する。其葉序に於て花序に於て規則正しき葉芽花果の方正なる形態さては莖幹分枝の法則は天地と共に搖ぎなく只其法則の範圍内に於て些少の變化をなすのみである。四季に伴ふ色彩形態の變化も亦おのかじ、其法則の下に統一せられて決して逆行する事なく横走する事がな

い實に植物界に顯はるゝ宇宙の法則、神の御業には讚嘆の聲を擧げざるを得ないのである。かくして美の根本法則たる多様變化裏の統一は植物界にありては極めて完全なる實顯を見るを得る。されば其以下形式の如き備はらざるは寧ろ奇とすべき程である。反復整形の法則、相稱均勢の法則、比例、調和、對比の法則の如き敢て吾等の例證を要しないのである。只人工數學的法則なる黄金率が精密なる適用を此中に示現するの果して可能なりや否やは吾等敢て調査するの愚をなさんと欲しない所である。

美の表出に於ても植物界は多種多様である。Soll ich zum Welken gebrochen sein? と詩人に問ひかけし小花もあるべく Ein raslos Drängen, Schaffen, Schwellen, Trachten, in allen Adern と歌はれしものもあるであらう。

森林の樹木は一般の植物界に屬するが故に上述の特性を有すべきは論を俟たぬ。而して草本に比して外觀上異なる所は一般に形の高大なる事多年生なる事である。ためにかの花の如きも數年に配布して咲き一時に全力を盡す事をなさざるが故に普通草本の如き綠色調を壓倒する事なく又よく風を利用するを得るが故に

敢て昆蟲類の應援を求めず多くは華美でない。

樹木はかゝる點よりして多くの特性がある。即ち草本の風景を平面的ならしむるに反し樹木は之を立體的ならしむる。草本の地平線を隠し得ざるに反し樹木は時々大規模に之を破り又は隠して大なる變化を與ふ。日光を遮りて大なる陰影を作り土地と空氣の乾燥を防ぎ焦熱を柔げ又風雪を阻止して安樂の情を生せしむる。其形態は多年に及びて生長し其恒久性によりてかの草本の如くはかなさを感せしむる事が少い。

樹木は一般に以上の如く形の雄大と年齢の恒久とによりて草本に見る能はざる崇高偉大の風格を具へて風景に特色を附するものである。今少しく秩序を立てゝ森林美の精髓を記述して見よう。

① 外部より見たる森林美

是即ち普通に森林が風景に及ぼす美的効果と言ふものである。森林は實に土地を飾る裝飾であつて風景の單調を破り變化を與へ多種多様ならしむること他に是に及ぶもの少ない。素より農地、牧場、草原及び葡萄園の如き風景に綠色を與へ穩

和を加ふるものありと雖其状態單調にして變化に乏しく景色が平面的たるを免れない。樹林に到りては其多様な立體的集合と遠近凹凸せる葉簇の光線と嬉戲する點に於て近くは鮮なる綠色を含み遠きは溫き青紫の色を顯はして土地に遠近變化を加ふるのである。況んや春秋夏冬其葉色の變化目も文なるものあるに於てをや。森林の風景の單調を破る効果の偉大なるは森林ある地より之を取去るによりて知るを得やう。三保の松原、舞子の濱、松島又嚴島より緑の木陰を取去らば其荒寥寂莫又如何であらうぞ。

實に森林なき風景の無味單調なる事大陸内部の砂漠或は草原地の旅行者之を語りて餘りある。其島と呼ぶる、林の見え初むる時隊商等の胸は如何に波打ちしぞや。由來人が單調を忌み變化を好む事古今東西變る所がない。かくてアルプスを訪れ觀光を試み、日曜を待明して郊外に出づる。外人の瀬戸内海を一目して、世界の公園也と叫ぶものは蓋し海水の藍碧に樹林の翠綠滴らんとする變化極りなく美觀を呈するに外ならぬのである。曾て鮮人日光に來遊して金碧燦爛たる樓閣と調和せる壯嚴幽邃なる森林美に撃たれて嗟嘆止む所を知らず、植樹の必要を説く事

切なりしと聞く。蓋し彼等の故郷の山骨露出せる殺風景の状態と比して我國森林の如何に變化ある美はしき風光を呈せるかを感じたものと言へる。

森林の風景に活氣を添へ人心を感動せしむる事かくの如くである。しかもよく水分を保留し清泉を湧出せしめ絶へざる溪流の淵源をなすに於て森林は實に風景に生命を與ふるものと言ふ事が出来る。更に進んでは生物に食料を供し人類に木材を給する點に於て森林は生物育成の重要物件の一たりと言ふべく森林存する所生物ありと言ふも過言ではないであらう。

以上は變化を與へ活氣を生ずる點であつたけれども森林には更に風景を調和するの作用がある。かの平和繁榮の表徴たる綠色は溢る、計りの笑を湛えて日光を迎へ枝と枝とを交して微吹く風に懐しき古歌を口誦む。遠くの森は精妙の天鷲絨の如く近くの林は高貴の絹をかくるが如し葉群は凹凸進退して色相を變じ空氣は間を隔て、濃淡遠近を分つ。小變化の美や徐變の美一として顯はされざるなく滑なる曲線を畫ける樹冠の緑は快き眼の運動を促して美感を催さしむる。其風を防ぎ雪を止むるや益々調和を進める。忽にして鳥禽美しく飛び胡蝶麗

はしく舞ふ。水は生氣を呼び小魚跳り風は紅葉を醸して鹿月に鳴く、人は此處に栗果を拾ふべく菌蕈を狩るべし、佐保姫は霞引くべく龍田姫は錦をかくるであらう。又朦朧の月夜には吐鵲啼くであらうし晴朗の星夜天河横る所月人男の船漕ぐを見るであらう。又誰家玉笛暗飛聲散入春風滿洛城、此夜曲中聞折柳、何人不起故園情の如きあるべし。此景皆樹木森林あるによりて趣を深むるのである。實に森林は風景に調和を與へ更に保安の効果を具へて人をして安樂靜觀を得せしむるのである。

②(二)内部を見たる森林美 (人心に及ぼす影響)

森林は其美の極致を林内に於て示すものと言ふ事が出来る。其多種多様な形態色彩と多量なる水分及び外界と異なる温度と特殊の大氣と靜寂とは人心に何物をか與へずして止まないものである。旅行家バックレル、ムスコウが故郷のまつを慕ふて、かのまつの下緑草の上に臥し仰て天を観るの如何に崇美なりしよ、只恍惚として神の懷にあるの思あらしめきと言ふたのも理である。實に林内にあつては光線は其葉末より分散し來りて得も言はれぬ美觀を呈し反射透過せる日光は變化

極りなく特に梢を亘る微風に動きて陰を搖がす時其趣竟に森林に於て知る能はざる所である。

Wer hat dich, du schöner Wald

Aufgebaut so hoch da droben;

Wohl den Meister will ich loben,

So lang' noch mein Stimm' erschallt.

と叫ばんが如きは未だ林内の美に酔ひたるものと言ふを得ないのである。反射して眼に入る緑は其力淡い透射し來りて全身を包む綠色に至りては其刺戟人を酔はしめ興奮せしめずして止まないのである。かくして吾等は恍惚として大自然の裡に同化するを覺ゆるのである。されば詩人が

Zur Zierde pflanzte Gottes Hand,

Zum Segen Büum' in jedes Land,

In welchem Menschen wohnen.

Wie könnt' ich denn je einen Baum

Aus Frevelmüt zerstören,

Nein, auch in seinen Schattenraum

Will ich den Schöpfer ehren.
Wenn mich in seiner Blütenpracht
Der Baum erfüllt mit Wonne,
Wenn er zur Kühlung Schatten macht,
Bei schwüler Glut der Sonne;
Wenn er mir goldne Früchte leut;
Wenn Hain und Garten mich erfreut,
Will ich den Schöpfer danken,
Kein guter Mensch, der böse nur
Kann seine Würde schänden
Und die Geschenke der Natur
Mit rohem Sinn verschwenden;
Aus Schadenfreude sie entweihn
Und strafbar ihr Zerstörer sein.

と歌つた冗長の句も擲すべき詩情のあるを見るのである。

「吾人日中に緑陰を歩む時感ずる爽快なる心地は是森の壯美なる觀念と連結して離るべからず。此際清冽なる一種の感覺は森に於て起る所の美觀全體の缺くべ

からざる要素なり」とは實に智性論者たるベルグマン氏の洩せし所である。其光の更に少き密林にありては暗色の幹と葉陰の暗さとは神秘崇嚴の感あらしむるものさへあるに絶大なる巨柱朦々として天に上り行く偉大の有様は吾人をして其下にひれ伏し神々しさに頭垂るゝを禁ずる能はざらしむるのがある。森林の美は遂に崇美に於て其極致に達する。

幽なる上天の風と身に迫る冷氣と奇すしき香とは此威嚴崇高を加ふるを覺ゆ。時に落下し來る小枝葉屑は猿か栗鼠の業なるべく奥深く洩るゝ底廣き聲は梟か山鳩であらう。あゝ是神殿仙境であると思はしむる事が多い。しかも其作用は動的ならず些も害悪作用を含まず、吾等の靜觀同感を喚起し得る點に於て崇美の要素は備りて缺くる所がない。されば

Heiliger Tempel ist der Wald,
Wo der Odem Gottes schwebet,
Wenn sein Odem sich erhebet,
Wenn sich leis' die Lüfte schwingen,
Lieder mannigfach erklingen,

Oder wenn das Heiligthum

Sturm erfüllt mit Preis und Ruhm.

Waldraum wird zur Tempelhalle

Und die Vögelin kommen alle,

Wenn der Glocke süßes Klang,

Rufet mild den Wald entlang.

と稱へらるゝも故なきではない。

森林が神さび神々しと感ぜらるゝは東西源を異にし古今時を隔つとも敢て變る事がない。豈獨り獨逸のみに限つた事であらうか。

年經たる老林の中彼等の物語る歴史や果して如何に轟々として向上するもの枝を張るもの傾くもの倒るゝもの幼樹の群るもの凡て無言沈黙の中に生く春に芽綻び花開きし事幾千度であらう。氷河上を蔽ひし事もあるべく可憐の美花下に微笑せし事もあつたであらう。

林内の興趣や人に與ふる偉力は實に筆に盡すを得ないのである。

(三) 森林内部より外部を見たる美觀

此美觀は最近に至る迄論議するもの稀であつた。林内より外部を見るは恰も室内より外景に對ぶが如く特種の快感を人に與ふるものであつてしかも前の場合は後の場合よりも其趣が極めて深く大きい。是森林美の特種なる方面と言ふべく其快は蓋し外に見ない所であらう。而して公園行道樹、綠陰樹は此種の美觀が其大部を占むるものと謂ふべく此種快感は何人も味ひし處であらう。今少しく其理由を探つて見ようか。

(i) 光線明暗の對照 林内のほの暗き綠の木陰より光漲る外界を眺むるは恰も夜の帷を出で、旭日に對するが如く眼眩せん計り強き明暗の對比は著しく人心を刺戟するものである。被壓せらるゝ如き感じより直ちに開放せる外界に出で、突然光明に接するも明所適應の起るを妨ぐる範圍ではない。是此種快感の特色であらう。

(ii) 色彩の變化 吾等が森林に於て見るものは多く暗綠の葉色にあらずんば暗褐の幹膚である。此單純暗鬱なる色に比し諸色燦然たる外界の色彩に接するは其色彩の上に於て急激破階の變化であつて崇高神嚴の神の懷より直ちに五彩陸離

たる人世に出づるが如し。是れ何人も快とする所である。

(は) 形の變化 太く逞しき幹枝、多角頑強なる葉簇のみを見たる眼が直ちに柔き曲線を以て包まれたる外界の遠景に接するは齊然たる式場より出で、溫和なる家庭に入りたる感あるもの蓋し此種快樂の一因でなければならぬ。

(に) 心理状態の變換 吾人は單調被壓の下に久しく堪へ得るものではない。此林内に久しくあるや之が調和を期待する事極めて大きい。されば豁然外界に接して期待の満足せらるゝや、茲に快感を生ずるは理の然らしむる所是亦此種快感の一因でなければならぬ。

以上要するに林内より林外を見たる時爽快の感を生ずる原因の主なるものであつて其効果は畢竟對比によるものと言ふべく其他溫度濕氣風の變化によりて生ずる生理的、心理的原因多々あるべしと雖今は細述しない。只外界の状況如何に就きて一言しやうと思ふ。

(a) 田畑を見る場合 宏濶なる平原田畑は林内との對比最も好適なるもの其作物の柔き配色は特に快感と離るべからざるものである。況んや趣多き人家、風車、家

畜、農民の蠢動する所人にとりて懐しき表徴たらざるはない。

(b) 池又は湖沼を見る時 鏡の如く平かなる水面はよく光を反射して白色に輝き其藍碧は綠陰を湛へて照應し短舸人を載せて浮ぶが如きは林内の暗鬱と比し實に快き對照と言ふべきである。湖面に倒影する山岳建築の如き亦此快を増すものと言ふべきである。

(c) 河川を見る場合 木陰より傳はる水流の音は既に人の心を唆るものがある。吾人は強き好奇と期待とを以て是に赴く。而して其銀白の面漣を起し時に白帛を懸くる瀑布あり魚跳り鳥舞ひ人はこゝに釣を垂るゝ。林内單調無人の境は此光景によりて對照せらるゝこと決して鮮少ではないのである。

(d) 海洋を見渡す場合 海岸の美觀は人よく之を知る。其青綠の水に白帆を點じ夕陽の橙色空を焼き東天旭日の登るに茜さすが如き日夕四時の變化壯觀林樹を透して得も云はれぬものがある。海邊くろまつ林より之を眺むるの爽快は蓋し吾人の喋々を俟たざる所である。

(e) 都市人家を見る場合 是亦快よき對比を與ふるもの人是によりて沈める心

を喚醒さる亦自知の境に委すべきか。

之等諸種の景は誠に林内より見て始めて効果を完ふするものと言ふべく詩人墨客の屢々筆にする所彼等が外界の美景を畫くに際し往々樹木を前景に用ふるは此効果を齎す爲である。吾等は詩歌に繪畫に無數の此種作品に接する事が出来る。

各地種の齎す影響は形色のみに止らず諸種の聯想と記憶とを伴ふによりて益々興趣あらしむるのである。

以上に於て吾等は森林を一團として論述し樹種の區別には及ばなかつた。此等の關係は各樹種各地方に於て同一であるかと言ふに決して左様ではない。森林樹木の多種多様な樹種の影響の如く甚しきはない。各地に諸種の樹木の生ずるは氣候風土の作用と言ふべし。されば各地方各樹種夫々特色ありて或ものは壯大崇高の觀を呈し或ものは優美典麗の美をなして居る。之等種々の變化は到底簡單に盡すことは出来ない。人の是に應ずる審美心も種々であつて觸るれども見ざるものあるべく見れども識らざるものあるべく識れども感ぜざるものもあるであらう。

吾等は見識り且つ感ずるものこそ眞に是れ完全なる人と言ひ詳しく識り深く感じて樂しむ人こそ最も圓滿の人なれと信じて憚らないのである。されば市井の人よ眼を開け知るは樂しむの第一歩である。學者よ感ぜよ同感は美的觀照の第一面である。美的觀照の完からん日森林の盡くるを憂ふるの要なく經營誤らるゝの杞なからう。此事は本書を讀むに従つて領かるゝであらう。森林は竟に生物である。無限の時と精力とを以て之を破碎し分析し坪量測定するとも止るなき生の連續は遂に盡す事が出来ないであらう。吾等はマイヤー博士が森林氣象測定は人間のなし得る業にあらずと嘆せられたのに同情を禁じ得ない者であるが人間のなし得ると信じつゝある人には猶一層憐愍の情を催すのである。

我國に於ては千有餘種の樹種を有し國土の半以上は森林にて蔽はれて居る。實に世界の森林國と言ふ事が出来る。之を一々説き明すは吾々の能事でない。されば吾等は章を改めて主要なる樹種に就て其特性と美的價値を言はうと思ふ。

第八章 樹木の美的價值

第一節 樹木の美性一般

今迄一般に美と言ふものと植物の現はす美と森林特有の美とを廣く言て來たが此森林美はそれを形成する樹種を異にすれば自づと異つて來るものなるは何人と雖も直ちに理解することが出来る。蓋々として雲際に聳ゆるもみやひはの山岳林と漣波嘯く池邊のやなぎとは其間には似もつかぬ情調の差異があつて空の光や水の色と相俟つて一種の空氣を樹木が醸成して居る様に思はれる。吾等は之等の樹木の美性の差異が何う言ふ所から出て來るのであらうかと考へて見た。個體は各々異なるものなりと言へばそれ迄である。樹種は各異なるべき素質を有すと言へば何も面倒はない。けれどもそれ丈で吾々は満足が出来ない。個體が一つ一つ異り一つの木の枝も幹も處によりて全く違つて居るのに何故やなぎはやなぎらしくもみはもみらしいだらうか。言ひ換へれば樹種は夫れ夫れ外の樹種では真似の

出來ない特徴を持つて居り其特徴は其特種の何れの個體又は一個體の各部にも共通なものであるのは何によつて起るのであらうか。吾等は先づ此事を美學的に考へて見たい。

樹木の美性として第一に吾々の頭に浮ぶのは形の美と色彩の美と夫等の變化して行く美と統一の仕方即ち典型タイプの美より外にない。周圍形象との照合の美は是に隨つて起る。それで今一層之を調べて行くならば次の如く整理する事が出來やう。

第一階、空間的の美

其一、形の美

- 一、全體の樹形及外圍線アウトライン。
- 二、幹の分岐及び曲り方。
- 三、樹冠の位置の上下。
- 四、分岐の角度枝の曲り様。
- 五、葉の圍り方。即樹幹の中にボツ／＼と明いてる空間。冬ならば小枝の曲り方と集團の仕方。
- 六、幹の樹皮龜裂の仕方。
- 七、根の張り工合。

八、葉、芽、苞、花、果の形。
其二、色彩の美

九、樹冠の色

十、葉の裏の色と葉柄の色。

十一、幹の色と枝の色。

十二、芽、苞、花、果の色。

第二階、量的及び時間的の美

其一、風、雨、雪、雹等天候による變化の美、

十三、樹木枝條の振動と其色彩の動搖、

十四、樹葉樹梢の發する音響、

其二、季節による變化の美

十五、各部の形の進展、

十六、各部色彩の運轉、

其三、年齢による變化の美

十七、各部形態の進展及び凋落、

十八、各部色彩の變遷、

其三、量及力の關係

第三階、統一性の美

十九、形態の統一性。

二十、色彩の統一性。

二十一、運動の統一性。

かく順次高級な美性に進んで行く。草本の如きは第一階段の美性に就ては實に目覺しいものがあるけれども第二階のものに至つては極めて微々たるもので(其一)をしかもかすかに有するに過ぎぬ。況んや量的力的關係に於てをやである。第三階に至つては全然之を缺くのである。樹木の美性は是に反し第一階特に色彩の鮮美と言ふ事は著しく劣つて居るけれども第二、第三の高級なるものに至つては最も其特色を發揮するのである。吾々は森林の美は、庭園の美でないと言ふ。如何に巧妙を極めても庭園はやはり玩具である。自然の足許にもよれるものではない。他要素と照合するの美は種々に分つ事が出来る。即ち左の如くである。

一、他樹種との照合。

二、他植物との照合。

三、他動物との照合。

四、地形、地勢との照合。

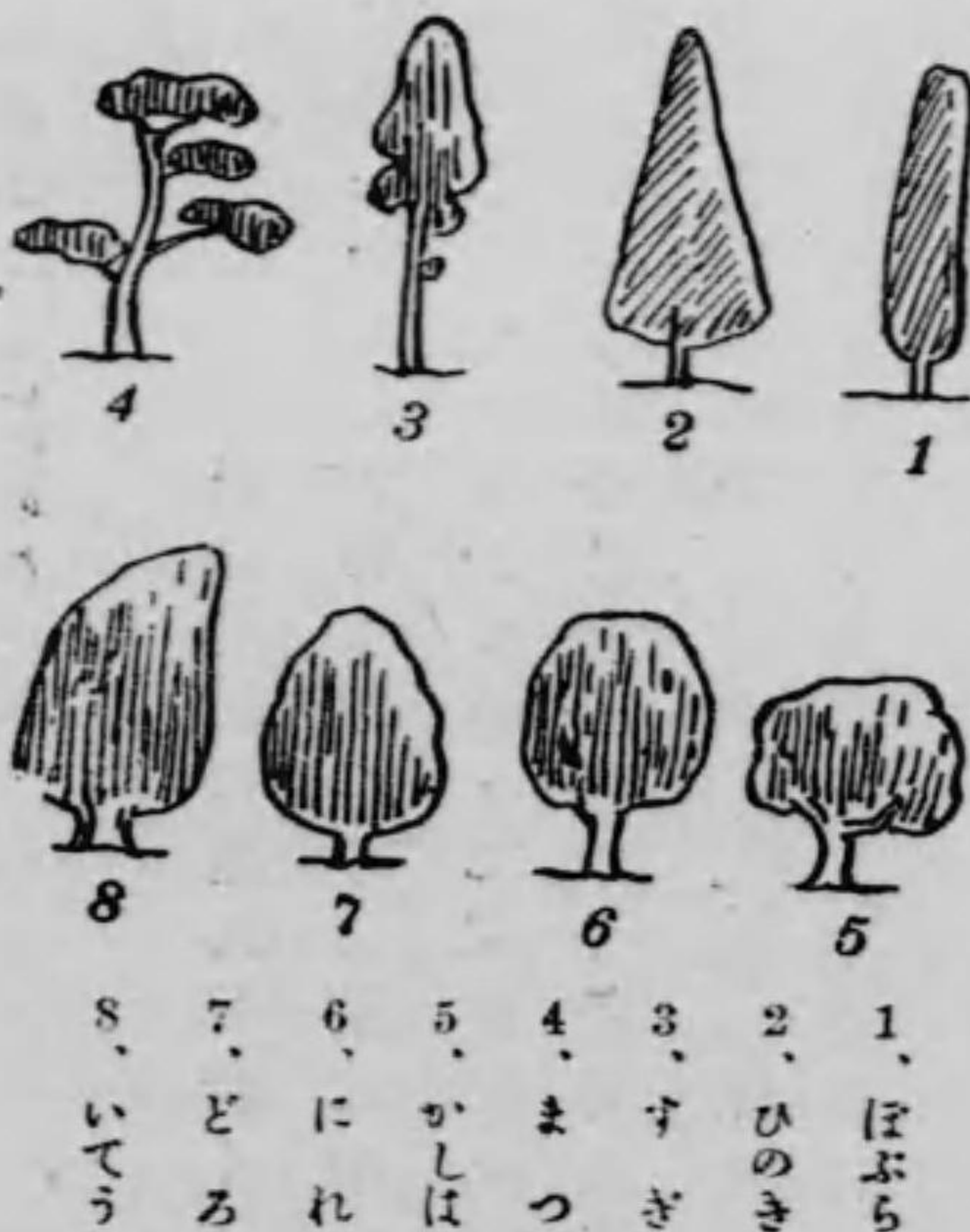
五、水及空氣との照合。

六、氣象上の照合。

- 1. 雲霧、霏霜との照合。
- 2. 氷、雪、雨、霰との照合。
- 3. 風との照合。
- 4. 光線及塵埃(日光、月光、薄暮)との照合。

以上は悉く美の材料たる感覺の方面であるが他の内容即ち知的内容感情内容を除外する事は出来ない。特に聯想の如きは然りである。

第二十五圖 樹木の外形



1. ぼぶら
2. ひのき
3. すぎ
4. まつ
5. かしは
6. くれ
7. どんろ
8. いてう

(一) さて樹木の外形が遠くから見て既に特徴のある事は明である。例へばぼぶらは多く圓筒形をなしもみ、たうひが圓錐形に近くどんろ、はんのきが鐘形に似、なら、かしはが拳の形をなしにれが直線を以て圍まれまつの老樹は危げな釣合をとる(第二十五圖参照)各々特徴を有する事は丁度人間の

恰好又は頭部の形によりて遠くから略某であるか、判定出来る様なものである。

第二十六圖



略筆にて現はしたる動物

- 1. さき
- 2. きぢ

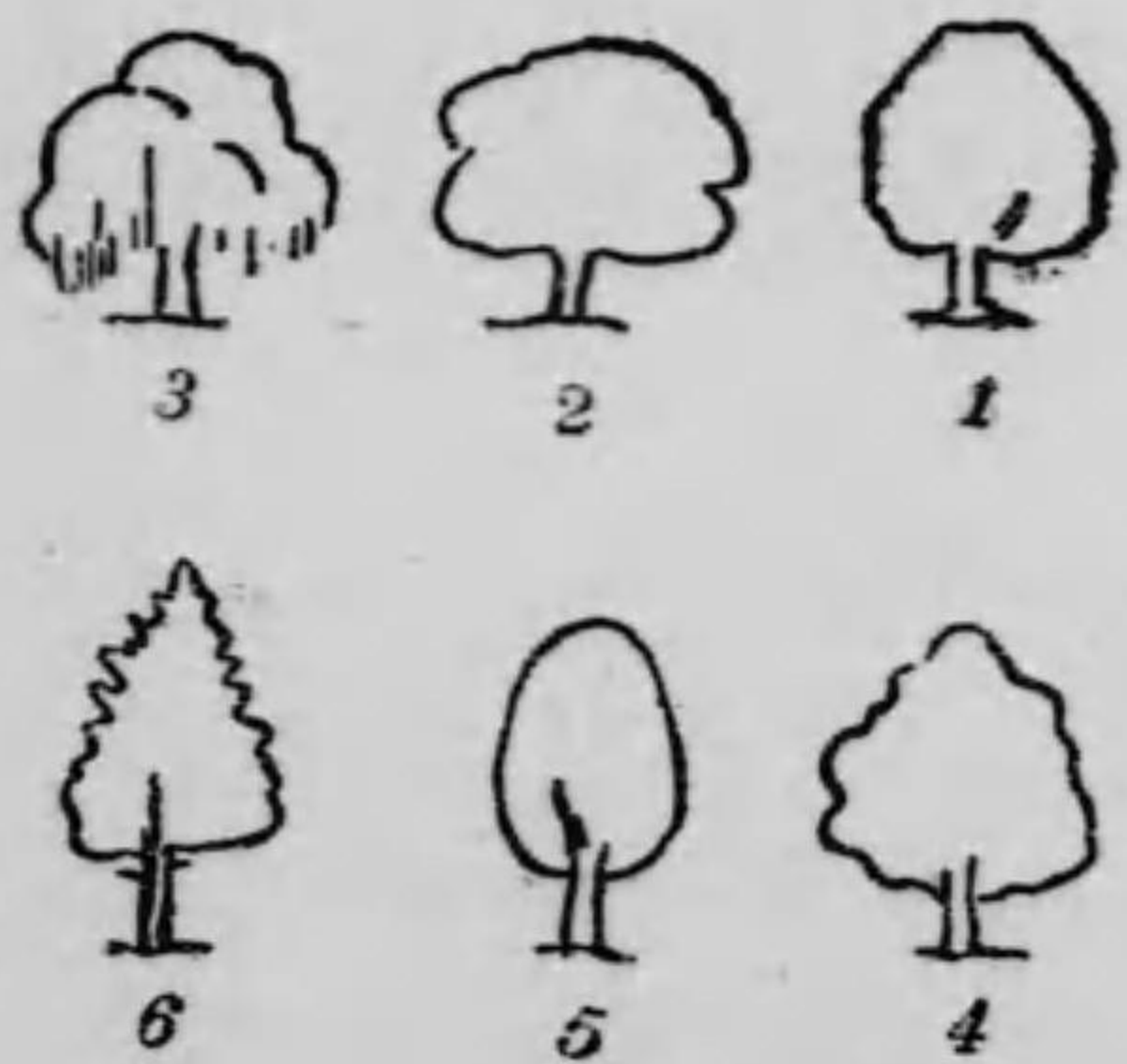
かくの如く形許りでなく形を圍む線詳しく言へば形の周圍をめぐる線の曲り方如何にも樹種によつて特徴あるを認めらるゝのである。第二十六圖の二つは鷺と雉鶏との線を描いたものでよく我國の畫工の執る筆法であるが此簡單な線の中にもよく其動物の種の體軀の構成を顯はして居るのを見る事が出来る。但し此處で言ふ外圍線と言ふのは暗箱のする様に精密な器械的描寫から得るものを言ふのではない。其

現はるゝ情調を主とした大まかな線を言ふのである。此線は周圍構成の主潮を示すものであつて些細な空隙凹凸の如きは飛び越えてゆく事恰もタンクの如く之によつて地勢又は傾向の大觀をよくし得るのである。例せば限りなき

第二十七圖 外圍線の省略効果



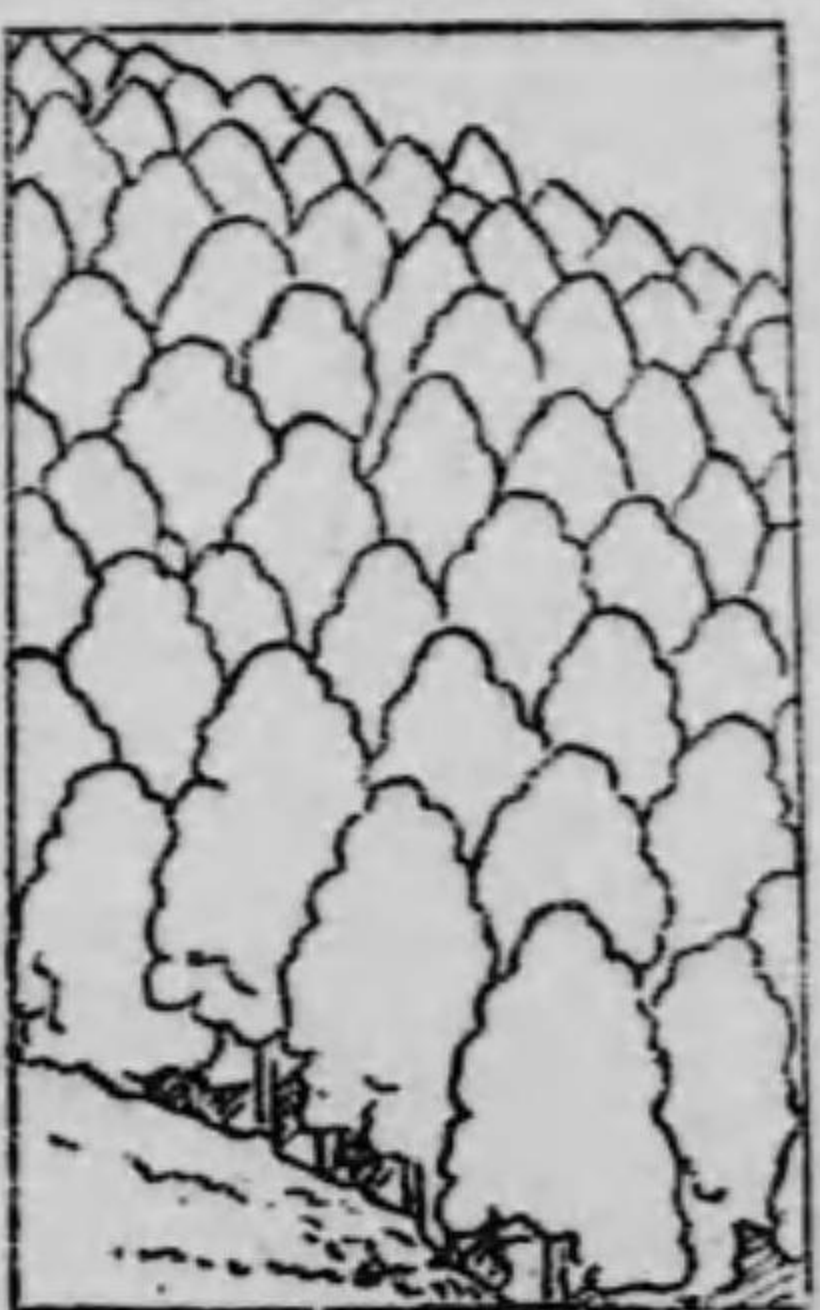
ギザ／＼の線はいくら精密に書き寫しても半島の形は充分實物と一致せしむる能はざるは言ふ迄もなく且つ到底其形の印象を與ふる事が出来ない(第二十七圖の一)けれども極粗末な省略した筆致ではよく之が可能である(同圖の二)吾々が今樹木に就て言ふ外圍線も此後者の類の意味である。樹木の外圍線は種々の型がある。數の少い比較的長い直線で圍まれたにれの様なものがある。一層數の少い僅か許りカーブした線よりなるかしはがある。ふつくりとした曲線からなるやなぎがあり。また大きな波を打たしたどろぼんのきがある。じなのきは優しい滑かな線をなし。さはらは厭なギザ／＼した線で圍まれる。其他いたやきはださくら、すぎなどそれぞれ特有の線がある(第三十一圖参照)之等の樹木の線は風景に特別な効果を與へる。川岸、墓地、斜面各々特種の情調を有するのはある一様の線が多數に繰返されるが爲な



第二十八圖 樹木の圍線

- 1. きれ
- 2. かしは
- 3. したれやなぎ
- 4. どろ
- 5. じな
- 6. さわら

り。また大きな波を打たしたどろぼんのきがある。じなのきは優しい滑かな線をなし。さはらは厭なギザ／＼した線で圍まれる。其他いたやきはださくら、すぎなどそれぞれ特有の線がある(第三十一圖参照)之等の樹木の線は風景に特別な効果を與へる。川岸、墓地、斜面各々特種の情調を有するのはある一様の線が多數に繰返されるが爲な



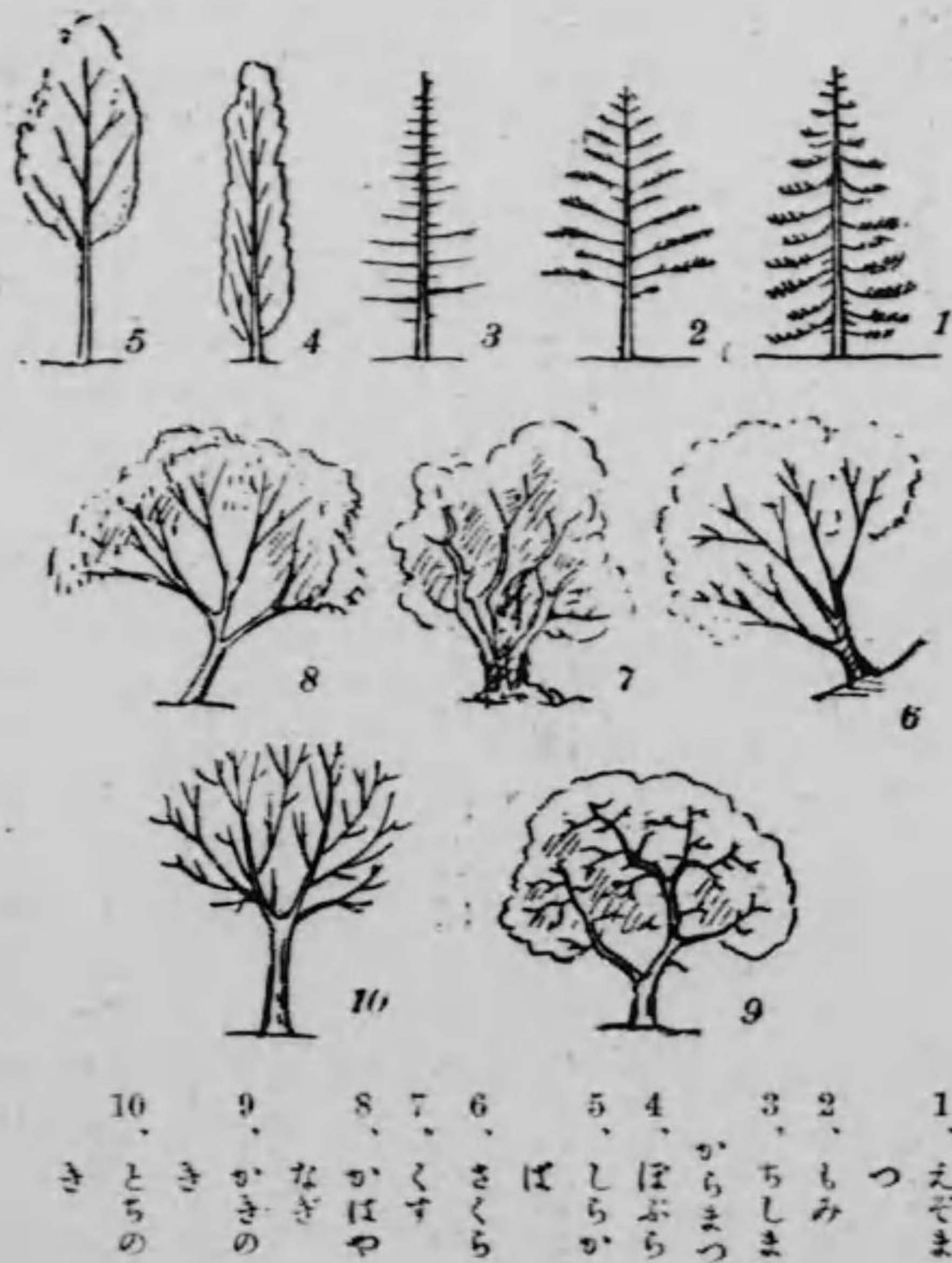
第二十九圖 すぎの林(重なれる外圍線)

のが多い(第二十九圖)風致保存改良や天然公園の設計の事に當る人は大に考ふべき點であらう。徒にさくらを植る許りが能ではない。

(二)樹木の外形を大體に就て考へて見れば縦に長いものと横に擴つたものとに分つ事が出来る。前者は左右比較的相稱を保ち、後者は不規則で、しかも均勢を得て居る。前者は單調で後者は興味に富む。此等は主に主軸即ち幹が分れずに眞直に頂部迄ゆくか又は地面に近く或はある中途で分れ且つ彎曲するかによりて起るのである。針葉樹の殆んど全部ほぶらの類かは、しほち等は前者に屬し、いたや、さくら、かしは、くす、とち、やなぎ、むめ、かき、さるすべり等多くの濶葉樹及びかや、いちろ、まつ、びやくしん等の針葉樹は後者に入る。勿論老年の木は多く不規則になつて所謂畫の^{アレクシユ}様になるがそれでも尙たうひもみ、ひのき、えぞまつ、と、まつ等は形を崩さない。幹が一貫して直立するのは壯大峻嚴の感があるが其變化極まりなき曲線を示し處々に大枝に分れて横に斜に匂ひ行くのは人の感興を誘ふ事が

多い。此幹の岐れ方と曲り方も各樹種によりて差異がある。そして各樹種夫々ある一定した範圍の變化しか示さない。是は芽と嫩條の構造とからかくならなければならぬのである。

第三十圖 樹木の主軸と枝條

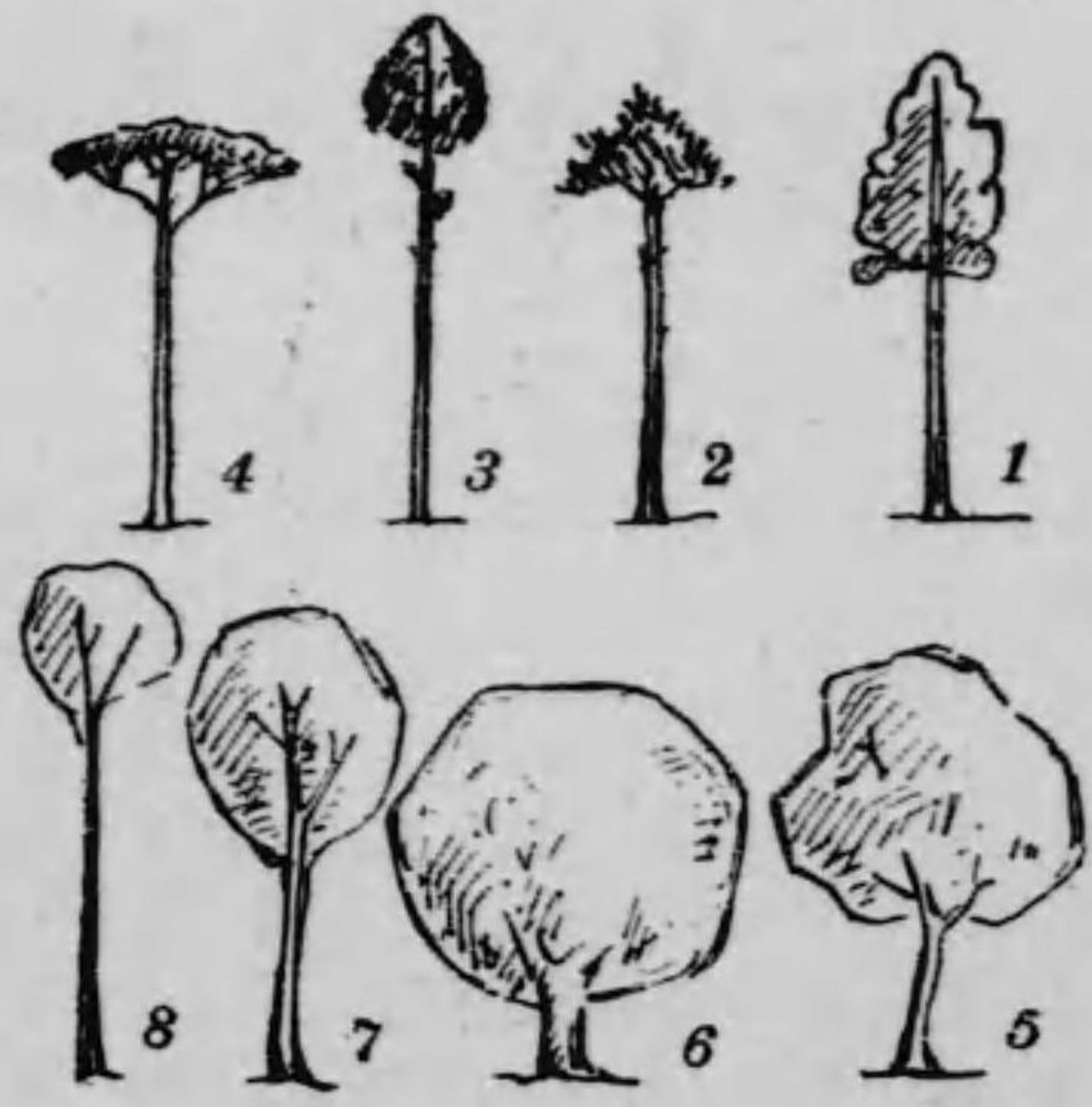


第三十圖は極概要ではあるがそれでも少しは樹種に由る主軸と枝條の差を示して居やう。
此の主軸が直狀をなすものは文句がないけれども曲る方のもものでは更に色々に分つ事が出来る。長いしなやかな曲りをするもの、短い半徑の曲線と同じ方向に繰返すもの、同様

の曲線を反對の方向に交互に繰返すもの、屈伸狀をなして上り行くもの等主な種類である。何れ此等の原因は芽の構造と幼條の發達とを説く際に述べよう。

(三)斯くして伸び行き乍ら大枝を分ち小條を出し葉をつける。木の梢部即ち枝葉の纏つて一塊をなせる部分を林學者は樹冠と名けて居る。既に幹の岐れ方に上下

第三十一圖 森林の粗密による樹木の外形

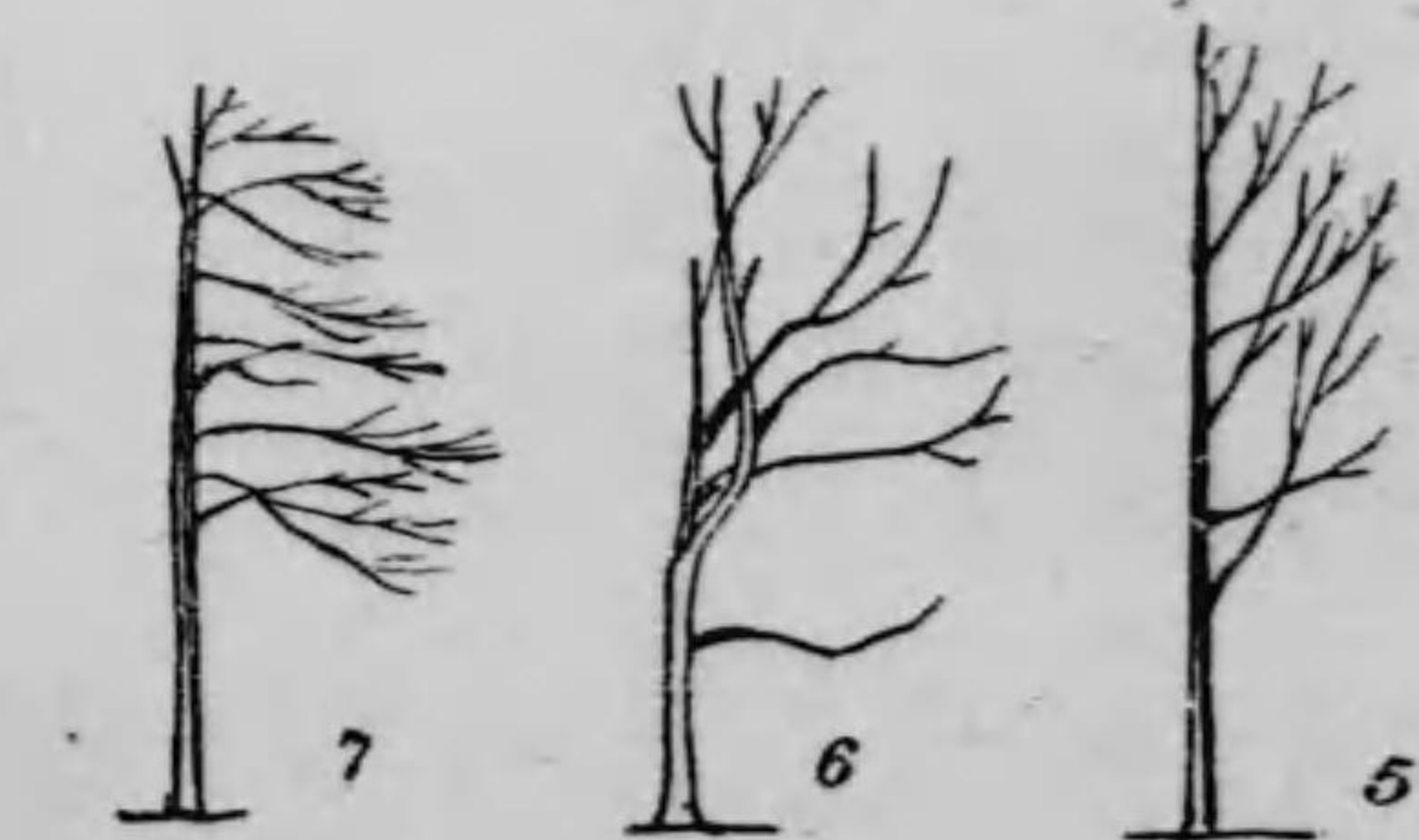
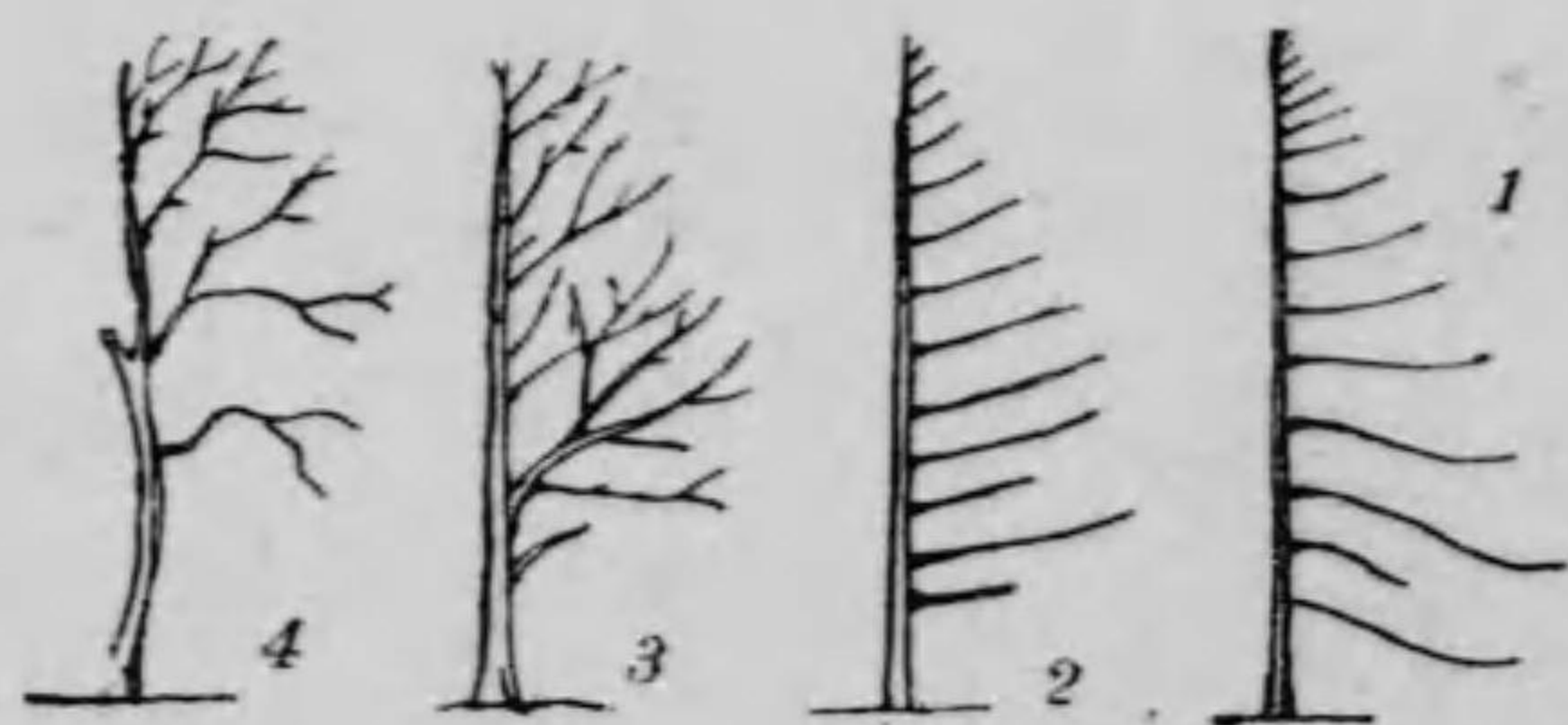


- 1、枝下したるひば
- 2、密林のまつ
- 3、密林のすぎ
- 4、すとうんばいん
- 5、開放地のぶな
- 6、開放地のほるにれ
- 7、密林中のほるにれ
- 8、密林中のぶな

あり大枝の出方に遅速ある以上樹冠が樹木により上下の差あるは止むを得ない。加ふるに天然又は人工取扱の如何によりては下枝の存否に非常な差異を生せしめる。一體に密林中に育ち又は屢屢枝下しを行はれたものは樹冠が極めて上部に附着する。之は光線を求めて競ひ伸びるが爲である。開放地に氣儘に育つたものは

不規則に横に擴がり樹冠は下部より形成されて居る(第三十一圖参照)開放主義が必ずしも素直な材を生ずるものでない。細いすらりとした密林中の木は輕妙にして快く太く膨らんだ形の開放地の木はどつしりした壯重の感を與へる。是は吾々が知らず知らずの間に安定の觀念を混じて眺めるからである。しかし密林中のものでも長大の年度を経て仁王の如き巨幹が立上る時は重大なる威力を覺える。是蓋し物質量の巨大より受くる感である。何れも特種の美的價值がある。よく適材を適所に用うる心掛がなければならぬ。

(四) 吾々が樹幹の形に見た直曲兩線の變化は枝條に於て更によく之を見る事が出来る。如何なる直立の木も其枝に於ては曲線を取らないわけには行かぬ。是れ枝は其着ける位置によりて光線に遭ふ爲に伸び行くべき途が同じくないからである。彼等は光線のある方へと廻り路をしても出て行く。故に幼年の中は多くは眞直に出づる枝も中年となり其數量増加し樹の附近に空間少くなるや種々の彎曲した形をなして來る。尤も之は光線の不足又は他の障害によりて枝の一方の芽枝又は其頂芽が枯れた爲に曲つて行くのもある。何れにしても枝條の彎曲は逸すべからざるもので各樹種夫々特別の相をとる。或は緩い波線を描いて出るもあり、或は低く蛇行するものもある。又始め上りて後に下り或は始め下りて後に上るものもある。屈曲した線をなして出づるもあり始め緩かに出て、後に屈状をなすものもある。もみ屬たうひ屬のもの、如きは下枝は緩かな曲線より成り上部に行くに従ひて直線に變つて行く。



第三十二圖
樹木分枝の状態

1. えぞまつ
2. とままつ
3. いてう
4. はんのき
5. しらかんば
6. くるみ
7. かつら

分枝の角度にも色々ある事は容易に見らるる所で、ほぶらの様に極めて狭いものからかじはの様に頗る廣く殆んど直角をなすに至るも

の迄あるいたやの如き丁度四十五度に分るゝものもある。かはやなぎ、ひは、うめ、きり、さくら等は狭い方でぐひまつ、えぞまつ、かしは、なし、こぶし、かつら等は其大なるものに屬する(第三十二圖參照)。前者は偏狹に、またつゝましやかに見え、後者は剛健に潤達に見える。

所謂木振り、枝振りなどは以上を總稱したものである。

第三十三圖 きはだの樹形



(五) 樹冠は樹によつて緊密になり又は疎になる。緊密なものは一様な緑色の團りをなし時に大枝の間に空間を見る丈である。此類のものは重くるしく夏の最中には惱ましひ程である。暖帯の常緑潤葉樹の多くは實に之に屬する。疎なものは樹冠の中に多くの小空隙を有し明快で鬱陶しさが無い。温帯北部及寒帯の落葉樹は殆んど皆之に入り針葉樹にもかゝるものが多い。温帯の落葉潤葉樹でもい

たや、かしは、なら等はかなり密であるが其間に有する空間の數は割合に多い。はんのき、な、かまど等は随分と疎い方である。是等の差は主に小枝の茂り様に基くものである。第三十三圖は空間の多い一例とすべききはだの樹形を寫眞したものである。

落葉樹等は秋末から冬季にかけて明に之を觀取するを得る。即ちいたや、なら、けやき等は小枝が密に組入つて居るがとちほゝのき等は太い小枝がバラ／＼に付いて居る。かゝる關係によつても美的の價値は著しく異つて來る。

(六) 更に一段と木に近づいて見るならば其差異は益々多く愈々明になつて來る。第一に目に付くのは其の樹皮の龜裂の仕方である。幼い木は凡て滑かであるが少しく年老りたものは樹幹の生長の爲に生長力なき外皮は裂ける。其裂け方は樹皮の組織の異なるに従つて等しくない。あるものは縦に、あるものは横に、あるものは正方形の小片に、あるものは矩形に、そしてあるものは老年迄直滑なものがある。しかし滑かなのも幼樹の滑なのとは全く異なる。是等は本章の各論に詳しく寫眞を入れて述べる筈であるが、要するにかゝる裂け方は恰も人間の衣服に對する縞模様

如き作用を及ぼすものである。

(七) 根の張り工合によつて木の趣は著しく變つて來る。若し之がなかつたら木は頗る無氣味なものとなる(第三十四圖参照)。老樹が著しく美的價值に富むのも其幹の基部の有様即ち根張りが預つて大に力あるものである。甚しく傾いて伸びた木でも倒れかゝつた建築と違つて却つて面白く雅致がある様に見えるのは根の張り吾々が内心に之に頼つて危懼の念を生じない結果であると言はるゝ。勿論急激なる方向の轉換による眼筋の痛苦を避くるのも一の理由であらうが其隆々と



第三十四圖
樹木の根張り
1、根張り
なき樹幹
2、根張りの強さ
樹幹

高まつた筋肉の張り工合は見るからに愉快なものである。此處に挿入した寫眞第三十五圖及び三十六圖は一つは函館附近のぶなの根元で他は札幌の植物園内にあるはるにれの夫である。前者は艶麗な張り方をして居るが後者は如何にも力強い粗剛な怒號を示して居る。然し何れも上部にある重く大きい樹冠を支へて風に抗ふ爲にはかくなければなるまいと肯かるゝ相が現はれて居る。



根張りの木のなぶ 圖五十三第

根張りの木のれに 圖六十三第

(八) 更に仔細に樹木を検するときには其葉や花や實に著しい差異があるのみならず冬季落葉樹が之等を脱落した後も尙その部分の卵なる各芽の内にも形にもよく特性を現はして居る。花の構造は植物記載的分類學者の最も重要視し之を唯一標準として分類をなし行くのである。又葉は林業家特に暖帶熱帶の人の據るを便とし之を以て樹木の識別點として居る。冬芽には温帶及び寒帶に住む者が特徴をその組織に認めて便とする。そして枝振や樹形は一般に美術家風景好愛者、伐木者、森林美學者の實際に翫賞し以て樹種の區別をする點である。記載

的分類學は最も進歩して居るが然し普通には最も無味乾燥の者である。直接に生ける自然に接觸せずとも實驗室室内にて乾き切つた古い雌雄葉又は子房の分解をしても足りるのである。森林美學者の行り方は最も後れて居る。しかも密に自然に接しなければならぬ性質を有する。之は後章悠りと述べることにして今は少しく葉、芽、花果の形を見やう。

芽は其小さき形の中に来む年の新條苞葉果實等凡てのものを含む。否樹木の生命の續く限り發展し行く所の全植物體を包藏してうたゝ寢をして居る如きものである。春の光と温さとが訪れると小さい貝細工の蔽をはね除けて可愛い緑のリボンを付けた幼植物は丁度雛の卵を破つて出る様に飛び出てくる。吾々は陽春柔い草を踏んで樹園を遊歩する時此幼き植物の戸を推し開く響と悦ばしく巢立する聲とを聞くであらう。

第三十七圖 葉の開張様式

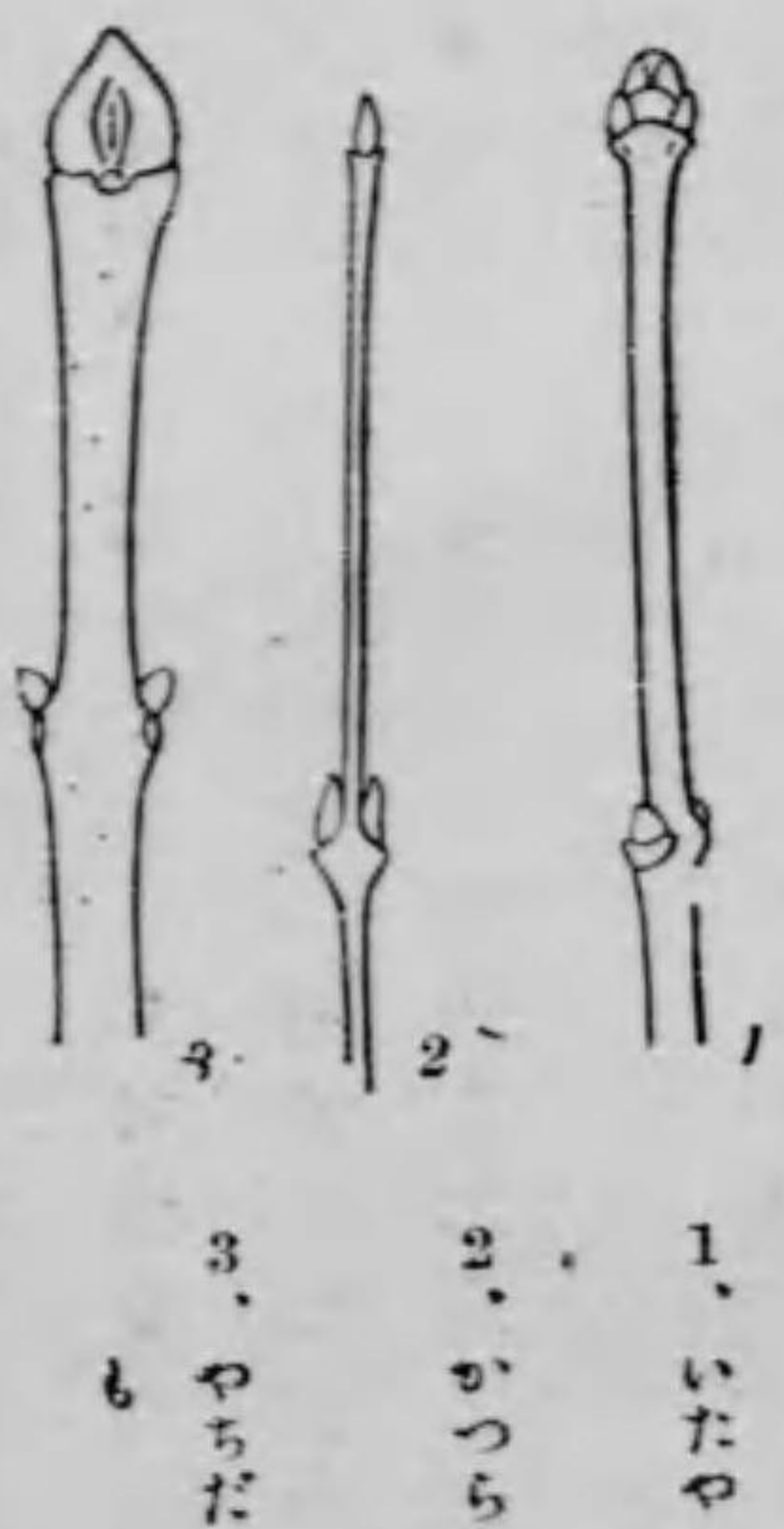


かく芽から巢立する若葉の翅の擴げ方は決して

て一様でない。芽の中に入つて居る時の疊まれ方によつて或は組合した折紙を擴げる様に、或は小さい扇を開く様に又小さな巻物を解く様に種々様々である(第三十七圖)。

七項迄に述べたものは全然形態的に物理的に觀察し得たが芽に入つては既に一層進んで現象的化學的活動が目醒しい。即ち著しい色彩の活動が加はつて来る。如何に春のうつとりした柔な空氣にあどけない此幼兒が美はしき袖ふりはえて嬉戯して居るか。かうした樂が早春の林の散策に於て得らるゝのである。黄金色の

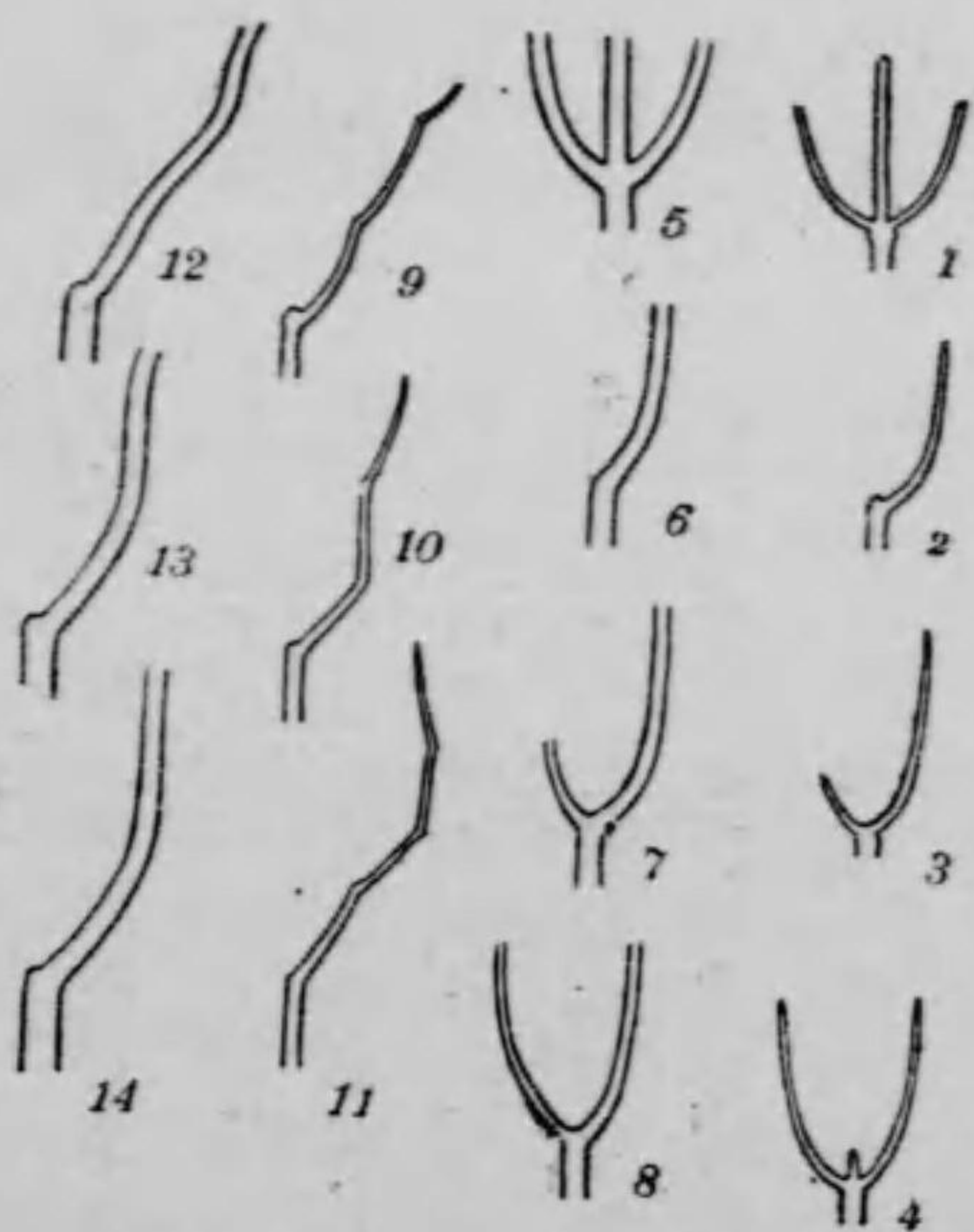
第三十八圖 對生芽



福壽草が足もとに咲く。若い葉と莖はかくしてすん／＼生ひ立つて行くが今一度冬の木々を心して見るならば先づ誰の眼にもうつるのは芽の枝に着く工合が夫々異つて居る事である。之には人も知る如く四通りある。對生と互生と螺旋と輪生とである。此着き方と節間の

長さが主に樹の分枝従つて又樹形を作る基になつて行く。かへで、とち等は其芽が必ず一雙をなして對立してつく。しほち、かつら等も之に入る(第三十八圖参照)。此種類のもものは小枝の先は何時も屈狀をなして行く。一方の芽が枯れたり枝が折れたりすれば暫らくの間屈曲した形をして居る。

第三十九圖 枝振の變化



第三十九圖は此の關係を示したもので(1)は完全な肉叉狀をした幼條であるが(2)は一方の芽が枯れ(3)は一方の條がすぐに弱り(4)は可なり伸びてから一方がなくなつたもので之れが伸長するとき(5)(6)(7)(8)の如くなる。天然には種々の障害があつて老年迄完全に分枝を揃へて行く譯にはゆかぬ。かくして其結果は(9)(10)の如き屈曲した線となるが次第に肥大し行きて最後には何れも曲線狀

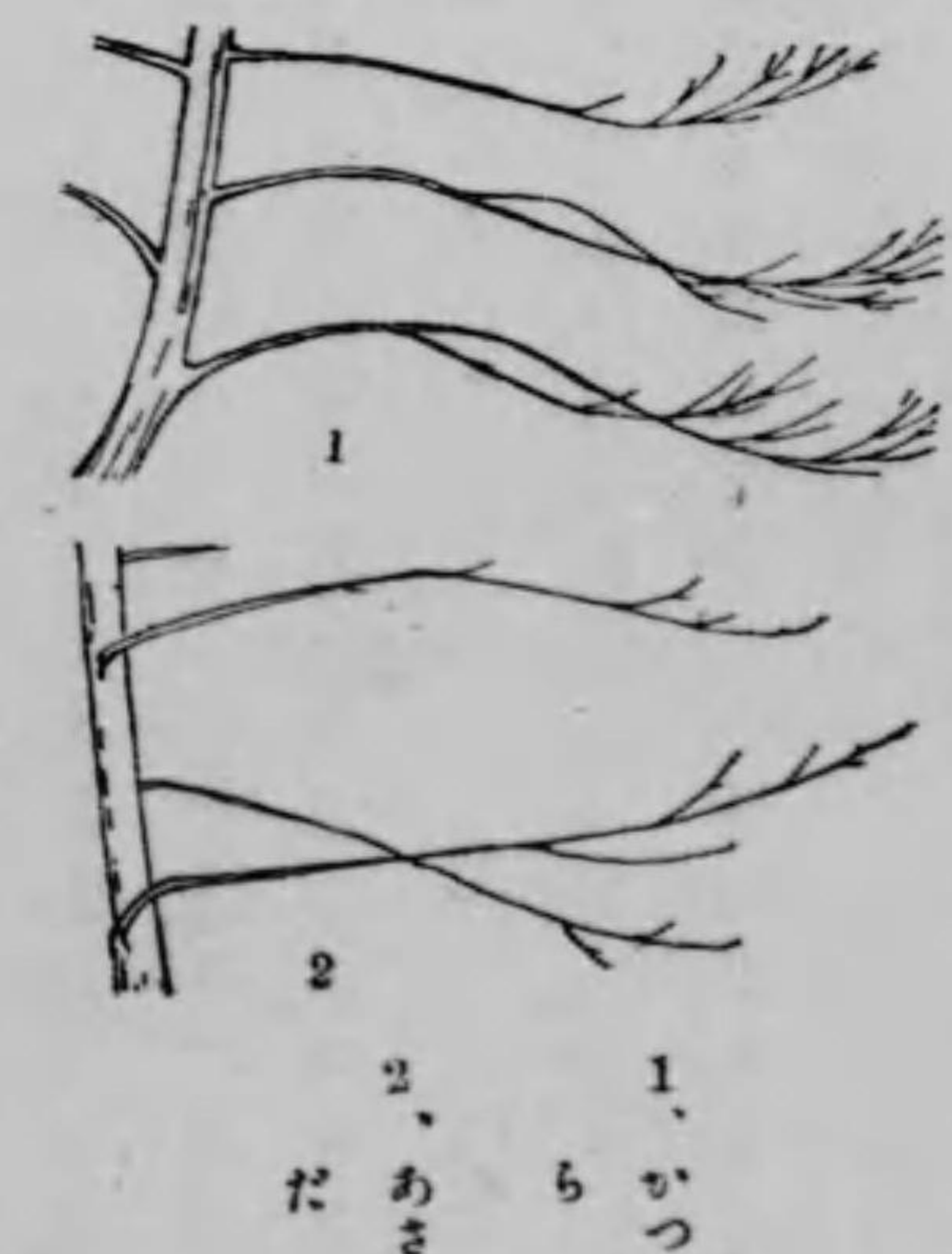
第四十圖 互生芽



1. ぶな
2. しの木
3. はるに

となり(12)(13)(14)の如く或は同じ方向に小曲線を繰返し或は反對の曲線をくり返し
或は大きな曲線をなす
第二と第三とは理論的に考へれば結局均しく何れも螺旋狀につく

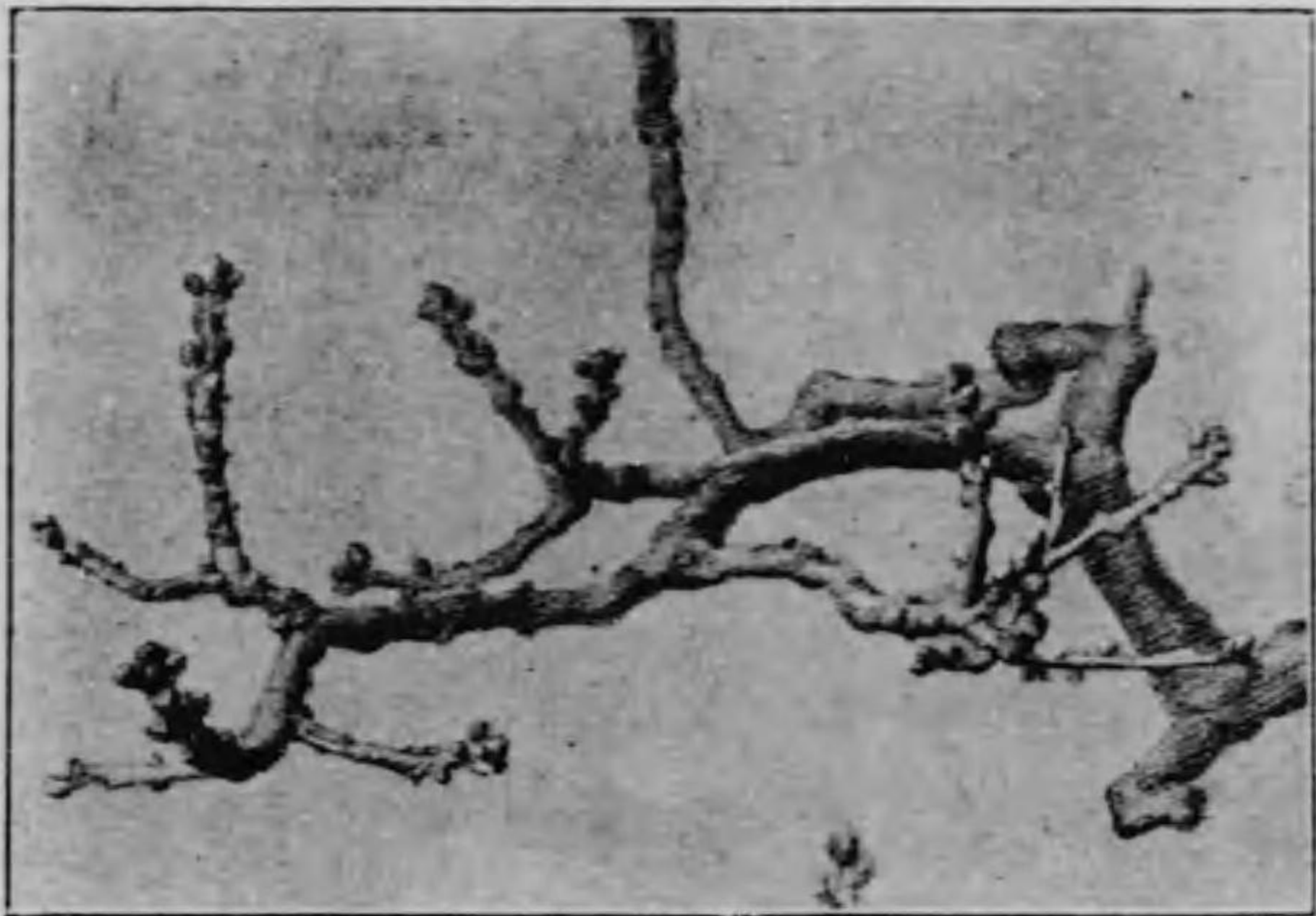
第四十一圖 おだやかな枝ぶり



1. かつら
2. あさだ

ものと云ふべきである。依つて此類は三つに大別する事が出来る。即ち、(i)互生のもの。(ii)一廻りに三つの芽あるもの。(iii)一廻りに四つ又は以上あるもの。
(i)互生の芽 之に屬するものにはにれ、あさだ、しな、い、ふ、な、け、や、き、む、く、の、き、等、である(第四十圖)。此類のものは新條が既に一芽毎に曲つて居る。

是等の發達して出來た枝振りには前のものに比して一層やさしく角張る事が少い。是は一つの芽を失ふも其伸び行く方向に大なる變化を來さない(第四十一圖)。



(四十一圖) 振枝のらな 圖二十四第

(ろ) 軸の三つの側に芽が着くもの 四つ目の芽が初めの芽の上にくるものであつて一層複雑に一層優しくなつて行く。

(は) 五乃至八より成るもの 是は前より尙一層の複雑を加へる。

此の(ろ)に屬するものははんのきくるみ、ねむぼ、のきこぶし、かきぬるで、やなぎ類、かは類、はりぎり、な、かまど、やまならし、むめ、さくら、なら類、かきうるし等頗る多い。針葉樹ではからまつは此類である。此等の樹木にありては枝の曲り方非常に混雜して著しく屈曲旋廻する。ならかき、はりぎり、はんのきこぶし、むめ等は最も代

表的なものである(第四十二圖参照)。

第四は中軸を取圍んで輪狀に芽を着けるものであつて、濶葉樹には其事例少く、きり、あをぎり、あぶらぎり、りやうぶみづきの類及なら、かしは類の枝の端の芽などに過ぎないけれども針葉樹は殆んど全部是に屬しまつ、もみ、たうひ、えぞまつ、と、まつ皆此類である。此類の木は幼齡から壯年にかけて樹形甚だしく正しい圓錐形をなし其幹も整形の階段狀をなし彎曲する事が無い。

是等の配列は幹の形、枝の曲り、工合を作る基であつて樹形の上からは決して見逃す事が出來ないものであるが更に直接に美的價值に影響を及ぼすものは其太さと色とである。總じて大きな葉を包む芽は大きく而して其を支へて居る枝も大きい。故に鈍く重々しく見える。芽の色は芽其者の色もあるけれども表面の性質の方が却つて著しく影響する。即ち芽には幼葉が裸出されてるものがある。くるみ、はぜ、あさがら等であつて又毛にて蔽はれて居るものが多い。或は固い被覆物で包まれて居るものもある。其被覆には滑かなものもあり毛が生たものもある。何れにしても滑かなものは光を反射して輝き、毛のあるものは鈍く見える。然し又柔い細長い毛

の生じたものなどは美はしく光つて小猫の前足の如く見える鱗片の數や形等も樹種を區別する重要な點であるが美的に見る時には餘り大きな價值を保つて居ない。

春の光が訪れると固く鎖した小さな口は俄に開かれて純粹な緑や赤の葉が吐き出される。夢の様な姿がゆら／＼と出で、伸び繁り榮え肥りて枝と同じ大さになり、小さな唇は拂ひ落されて跡には二三條の線が残る丈である。魔術の様に立ち出でたものは今や確固たる現實となり葉をかざし花を飾り實を結び最後に芽をつける。

芽に比べて葉は一層特色がある。葉の形は實に巧妙なる線及び面の排列である。其形や縁に付ては記載的植物學では種々の名稱を附して居る。しかし最も風景的に關係あるものは其大さ厚さ表裏の色、葉柄及集團の仕方である。一體に複葉のものには大きく重々しく集り方も鬱陶しい。ほゞのききりいちぢく、はせを、やし等は單葉でありながら大きな形をなし景色を重々しくする。又かしくす、ゆすりは、しひ等厚く固く密な葉はやはり濃厚な惱ましい繁みを作る。ならば等は比較的大き

な薄い葉を有し特に一所に簇生するによつて重く鬱々とする。之に引かへてかんは、やなぎ、いてふもみぢ、けやし等、は小さく薄く少しの風にも輕妙に動く。又葉柄に就て言ふならば其太く又短いものは自然密に着き動く事少く沈重に見えるが細く長いものは軽く賑かに見える。針葉樹が細い葉を有するに拘らず崇重の感あるのは其暗緑な色調による事が主であるけれども其密集し且つ葉柄殆んど見得ざる位な状態も大なる原因と云はねばならぬ。又一つ一つの葉をとつて見ればその形も葉縁の出入も至大の美的價值がある。披針形のもの、鋭く横の廣いものは鈍い、三角形のものは輕妙に心臟形のもの、は快き調子を現はし、橢圓、廣橢圓形のもの、は落付いた趣あり掌状のものは懐しく星形のもの、は楽しい感がある。羽状のものは物憂い。吾々は河岸の柳の銀鱗を翫すのを鮎の飛ぶかともがひ思ふ事がある。

第四十三圖は主な日本の樹木の葉の形を示したものである。又以て如何に多趣多様であるかを知る事が出来る。

尚波状の葉縁には悠長な變化があり鋸齒状のものには犀利鋭感な趣がある。全縁のものにも特種の情調が流れて居る。



第四十三圖 各種の葉形

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| とち | ぬ | た | く | け | か | せ | ひ | す | あ | い | な | く | く | し | ば | お | お | ざ | な | ほ |
| ち | る | や | る | や | し | ん | の | い | か | ち | ぎ | す | ぬ | な | ら | な | ひ | ま | な | の |
| で | び | き | は | は | き | き | う | う | ま | ぬ | ぬ | き | き | な | か | な | や | が | ぎ | の |
| | い | | | | | | | | つ | ぬ | ぬ | き | き | な | か | な | ひ | ま | な | の |

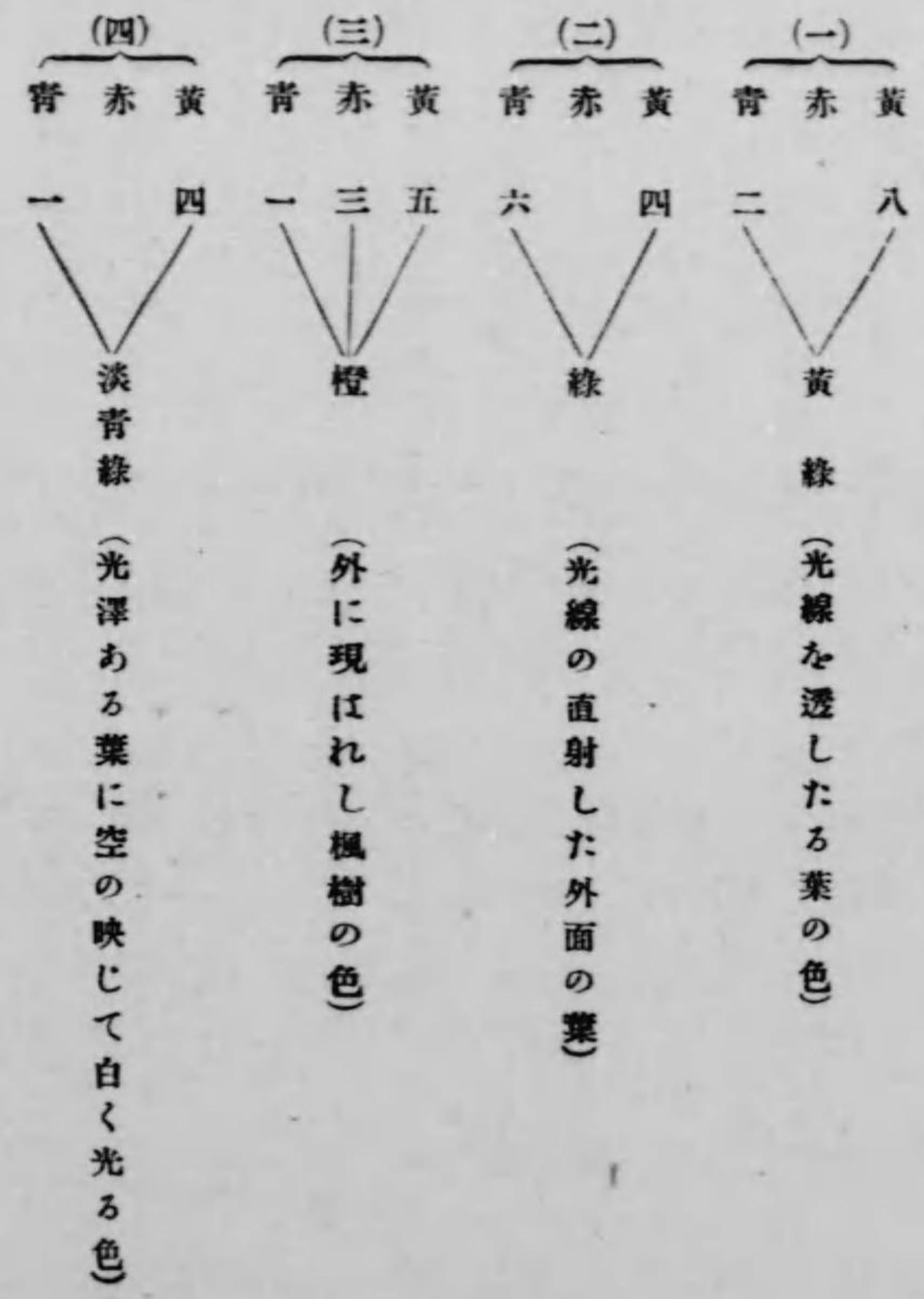
花芽が目立つのは蕾としての色が出てからである。蕾の色は開花の少し前になつて出る。蕾は樹種によりて種々の特徴があるけれども左程事々しく述べるには及ぶまい。

一つ一つの花としては樹木には草本の如く全植物體に比して大なる形をなすものなく其色も熱帯地方のものを除いては著しく艶美濃厚なのがなない。併し森林樹木として花が目立つものがないではない。さくら、こぶし、ほのき、あかしや、やなぎ、いたや、かつら、まつ等其花時には林野に特種の景觀を顯するけれども之等は形としてよりは寧ろ色の方から注目を惹くものである。

吾々は漸次色彩の方面に及ばなければならなくなつた。

(九) 樹木森林の全體としての色彩を支配するものは何うしても樹冠である。落葉樹は冬季に枝及小枝の色彩が特色を表はすものであるが一年の大部分は緑葉の蔽ふ所であつて植物としての面目を最も發揮するのは此期間である。即ち年の大部分の間樹冠の色は葉によつて支配せられる。しかし樹冠としては一つ一つの葉を手にとりて見た時の色とは異つて居る。吾々の眼と樹冠との間には多くの空氣

がある。又樹冠には凹凸遠近があつて陰影濃淡を作り特別に情調を帯びるのみならず地方の風色自づと泌込んで居つて之に近接し、蟲眼鏡で覗いたとても見定め得べきでない。畫家丸山晚霞は樹林の緑色を作るに次の如く色を混合したと言つて居る。



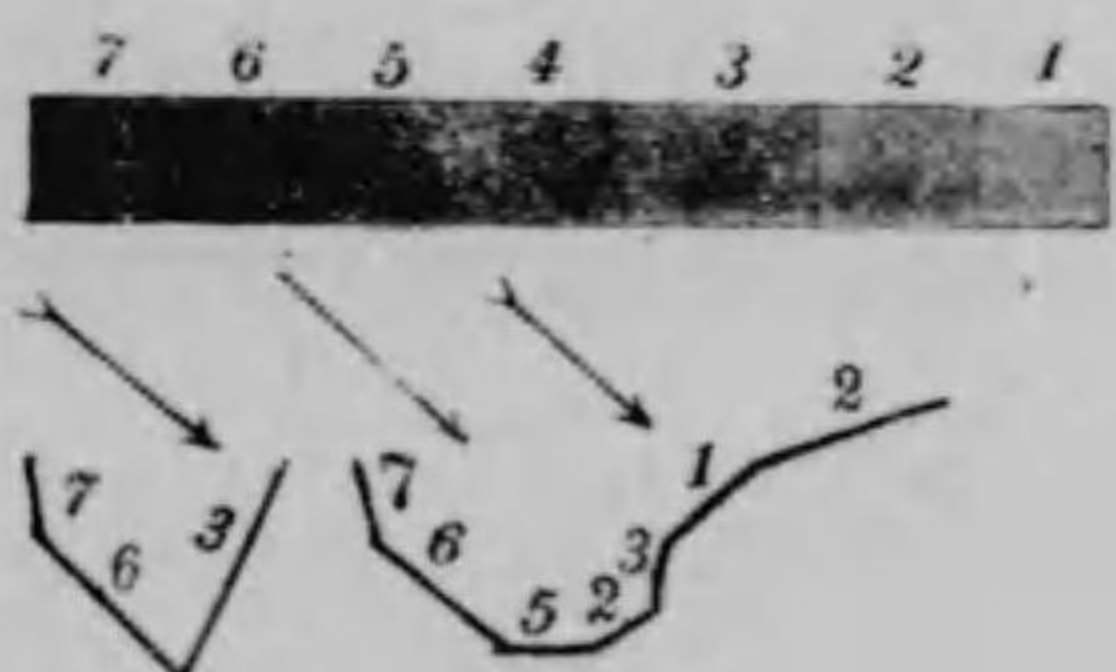
之は極めて粗な観察であるが少しく近よつて見た樹冠には樹種によりて特色があつて争ひ難いものがある。葉色のもとには葉緑素であり、其性質の外に粒子配列の状態、柵状細胞の形状、表面の構造及状態、毛の有無、葉の厚さ、反り方によつて變化を受けるであらうが更に葉の集り方、動き方によつても著しい差異を生ずる。素と

葉は發光體にあらずして注ぎ來れる光線を反射分析して色を生ずるが爲である。そして純粹に色と名くるものゝ外に光線の量によつて明暗及中位なる灰色を加へる。故に葉其物の有する色の外に樹冠の色には他に多くの影響するものを有する。今樹冠が窪みのない「ドーム」であるとすれば一方より注ぎ來る光線に對して直

第四十四圖 陰影の度



角に向いた面の部分は最も輝き、之と反對の側の面は最も暗く、其間には多くの中間部を有する。即ち第四十四圖の如く縦にも横にも1 2 3 4 5の順に濃くなつて行く。但し實際の場合に於ては丁度光と裏向に直角になつて居る面は附近よりの反射によりて幾分か薄く照さるゝが故に最も暗くなるのは光線と平行な面である。然るに今此表面に凹があるとすれば此凹の部分に於て光線は更に一度變化を示し第四十五圖の如き濃淡面を現はす。小凸面に於ては樹冠全體の時に述べた様



第四十五圖 凹所の陰影

な變化がある。樹冠は決して滑なものでない。樹種によつて分枝芽座の異り、葉の形集りの差異があり、特種の大小凹凸を構成するが故に光線の之に來るや透入し反撥せられ固有の葉色と相映つて到底他種の模倣を許さない色彩を顯現する。風景畫家がよく緑色は最も六ヶしいと言ふがそれは正確に言はゞ樹冠の緑色は最も複雑にして摸寫する事最も困難なるの謂である。吾等は是等の人に樹冠の色の美的解剖を薦めたい。樹冠の色は立地によりて特に著しく影響せらる。之によりて來る色彩の良否は常に紅葉の時にのみ現はるゝものではなく春の若葉夏の深緑に於て既に明なのである。

(二) 樹冠の色は樹葉の色が素となつて居るから之とは著しい變化を受けて居る事は今述べた通りであるが、尙見逃し得ないのは葉の裏面と葉柄との色である。裏面の色は表面に比して多くは淡色であるが夫にも種々の程度があるのみならず、どろ、うらじろかし、やなぎの如く裏面の色を呈するものがある。是が樹冠の色に著しい特色を與へる。即ちどろの樹冠の鈍い黄綠色の如きである。また葉柄のある樹葉では其色が多く葉の表面より淡く軟い爲に葉柄なきものに比し穩かな色調を

示して居る。又中には赤や橙赤色を呈したものもある。くすの如きゆづりはの如きさくらの如き之である。樹冠は之が爲に一層温い賑かな色彩を帯びて来る。吾等には在來の日本畫家が樹木を描くに形と趣とをのみ主とし西洋畫家の多くが色彩のみを主として居つた様なのは何れにも重大なる缺陷がある如く思はれる。

(二) 幼い幹は緑色を呈するが如く時に小豆色等を帯ぶるものがあるけれども少しく生長し樹皮剥落し龜裂を見る頃になれば何れも濫い多少灰色に近い者となる。樹皮の灰色は實に變化が多くまつ如く褐色が極めて多いものもありえんじゆの如く殆んど濃緑を呈するものもある。ならの如く茶褐に近いものもありはんの如く黒褐色のものもある。さるすべりの滑澤ある茶灰色もあればしらかんはの如く灰白色もある。すぎの黒みがちの赤褐色、ひはの暗い黄褐、とまつの白灰色、えぞまつの黒灰色、いてふの淡灰褐色到底之を掲げ盡す事は出来ないし又表示する語が不足して居る。之等の色は夏季緑葉の繁つて居る間は其蔭の暗色と透入し来る緑光とによりて緑が、つた暗色を呈して居るが秋末落葉するや直ちに固有の色彩を發揮し其龜裂と共にまがふ方なき特色を示顯する。之等に對する感情は後節述ぶる

所である。けれども色彩の灰褐に近く不鮮明にして龜裂屹屈鱗片狀に剥落するものは男性的である。平滑なる種類のもは一般に優美である。是れ其光線の反射前者の如く亂雜ならずよく調和し色彩多くは穩であつて高尚典雅なるによる。じらかはは輕佻の感を生ずるけれども周圍の狀況によりては著しく美感を生せしむる。針葉樹の幹は一般に濃厚であつて莊重の感がある(但し茲に述べた色は人家を離るゝ事遠き山林に於ての觀察であつて市中の植物園や公園内の黒すんだ樹幹を意味して居ない)。

(三) 落葉によつて尙一層鮮になつて来るのは梢枝先端の色である。長い間の蔽を徹して現はれた骨格には特種の組立と色彩とがある。落葉樹の林が趣に富むのは此に基因する所が多い。灰色な空、碧い空、また朝夕の陽光に映えて細い、粗い枝に眞に美はしき色彩の配合を示して居る。にがき、みづき、やなぎ、またこぶしの眞白な花などは誠に美はしい。谷間々々に咲くやまざくらの花は格別である。緑葉の中にありて大きな桃色の花をさくほ、のきは屢々見る所であつて其大きな薄い葉を透して來る黄緑とよい調和をなして居る。はしどいは有名なものであるが特にほ、

のきと共に其香氣が好い。かきの白花が五月雨に散りきりの紫色が風に落るのも趣がある。しかし森林として花の壯觀なのはまつたうひ等の針葉樹である。之等は風媒花なるが爲に無數の花をつけ夥だしい花粉を散して黄金の風を作る。量に於ての壯觀である。又果實に就ても左様である。余等が初秋天鹽のえぞまつ林を見た時著しく林の色が變つてゐるのに氣が付いたがよく見ると恰も豊富なる毬果がえぞまつに實り其色が葉の緑調を壓倒して居るが爲なるを知つた。ほ、のきの實は熟する前に大きく紅色を點する。

尙くりくるみの花は香氣と色彩とに於て著しく引立つが其大きな實の落ちて來るは色彩のみならず葉をくゞり水に入る音は格別である。

しかし要するに森林樹木色彩の美觀は樹冠にありと言はねばならぬ。而して色彩の美は固定して居ない。時々刻々に變化し年齢により量によりて變遷するものである。されば色彩は形に比して一層時間的要素を含んで居る。普通美學では時間的要素の事を云へば音響即ち聽覺を材料とする美的内容を意味せしむる様であるが吾等はかゝる心理學上の嚴格な意義に解せず、に物の時間と共に進んで行く

徑路に對する美を謂つて居る。即ち形態色彩は生命ある物にとりては決して固定せるものにあらずして時と共に進化發展して行くものである。此徑路を辿るによりて得る美感は決して死物を見るが如きものではなく、興味津津たるものである。吾々は樹木の繪を見て眞に實物の様だと思ふ事がある。是れ其中に生命が動いて居る様に見えるからである。實物通りであつたら美的價值が殺滅せらるゝであらうと言ふのは動物に付て言ふべきであらう。樹木森林の美は之と同一でない。吾々は春季樹液の旺に上昇して行く聲をきく。冬季糖分や澱粉を根幹に貯へて寢つて居る唸をきく。しかも吾々は靜觀の態度を失しないのである。生命の動きは時間に見はれる。吾々は繪畫標本に見ざる美性を茲に認める。

時間的の美は一層高級なものである。吾々は一步進んで觀照をしなければならぬ。形色快美の説に迷ふ者宜しく來り見るべきである。

(三)時間的の美は一日中の變化に於て既に現はれる。朝の新らしく潤ひある空氣の中にあつては樹木は活々とした色彩と態度とをとり日中の暑氣には凋れた首を垂れ、夕方の沈靜には些の動搖もなく落付く。四時の異なる天と空氣の色に魅せら

れて樹冠の色も時々うつろひ行く。しかしかゝる實例の變化の外に外物によりて動搖せられたる時樹木の動搖は特種のものであつて各樹種の美的價值は此際に又著しく現はれる。風にそよぐほぶらの葉は其顯著なものである。しなやかに曲るやなぎの糸、穩に行き回るかんはの搖ぎ、頑強なまつ、かしの抵抗、素知らぬ顔のもみ、たうひ、樹木内部の特性はかくしてよく表顯さるゝのである。葉丈動かすものもあり、小條を振ふものあり、相當の大きさの枝を動かすものもある。一寸した風に幹を搖かすものもある。たけの如き之である。雨や雪等の降下する爲にまた樹木の運動を來し其状態は夫々異なる。風は主に水平動を強ゆるが之等降下物は垂直動を惹起すものである。竹林の雪、樅林の驟雨など其趣捨て難い。

かく樹態の運動とともに其色彩は著しく動搖する。やまならし、やなぎは回轉して其裏面の白色を顯し、かほは搖れて光を散亂する。紅葉の散るもよく黄葉の舞ふも美はしい。其動搖は樹種の特性を失はない。

(二)之と同時にまた特有の音響を發する。まつの梢を渡る風の音、くぬぎの葉を捲く風、きりの葉を叩く雨、ならの林にそよぐ霞の聲、雪に折るゝたけの響、ほぶらのザ

ワ、する音、何れ劣らぬ趣がある。

(三)一年と云ふ長い時間には更に以上の變化がある。小さな芽が開いてより營々として葉を作り枝を伸し花を開き果を結ぶ。小さな橢圓形の芽が長い枝と多くの葉と美はしき花と多數の實となる迄の變化の進路は盡きぬ興味があるととも、其中に誤りなく樹種別々の道を歩むで行くを見る。特に葉の開き方と實に行く有様とは最も感興が多い。其外落葉樹には一年間の形の變遷は最も著しい。裸の木が鬱々たる樹冠を作り秋末再び脱ぎ棄てる。特に寒冷の氣候に育つものは其活動が目醒しい。是れ生育期間が短かき爲である。

(四)此變化は色彩に於て最も鮮かである。春季、黄、綠、赤、橙、様々の色彩の衣をつけて出で立つた葉は夏に至つて其眞盛りに達し均しく綠の類に屬する色彩となり秋末には悉く變色して最後の壯觀を呈する。其華美を極むるは春の花に劣らぬ。花の美觀は少數の樹種に限らるゝが紅葉は總ての樹種に行はれる(但からまつ、いてふの針葉樹と常綠潤葉樹とは別である)。此色彩は次の四種類に區別する事が出来る。

一、赤色又は之に近きもの。

やまのみぢ、めいげつかへて、からこぎかへて等のみぢ類、なゝかまど、しろり、やまざくら、
ならの類、やまぶたう、つたうるし類、まゆみ、つりばな類。

二、黄色又は黄橙色をなすもの。

かつら、さしは、あさだ、やちだも、くは、しなのき、はりぎり、きはだ、やなぎ、はくろんほく、おひ
よう、ほゝのき、くるみ、いたや類、ぶな、いてふ、からまつ等。

三、褐色又は赤褐色。

なら類、かしは、みづき、くぬぎ等。

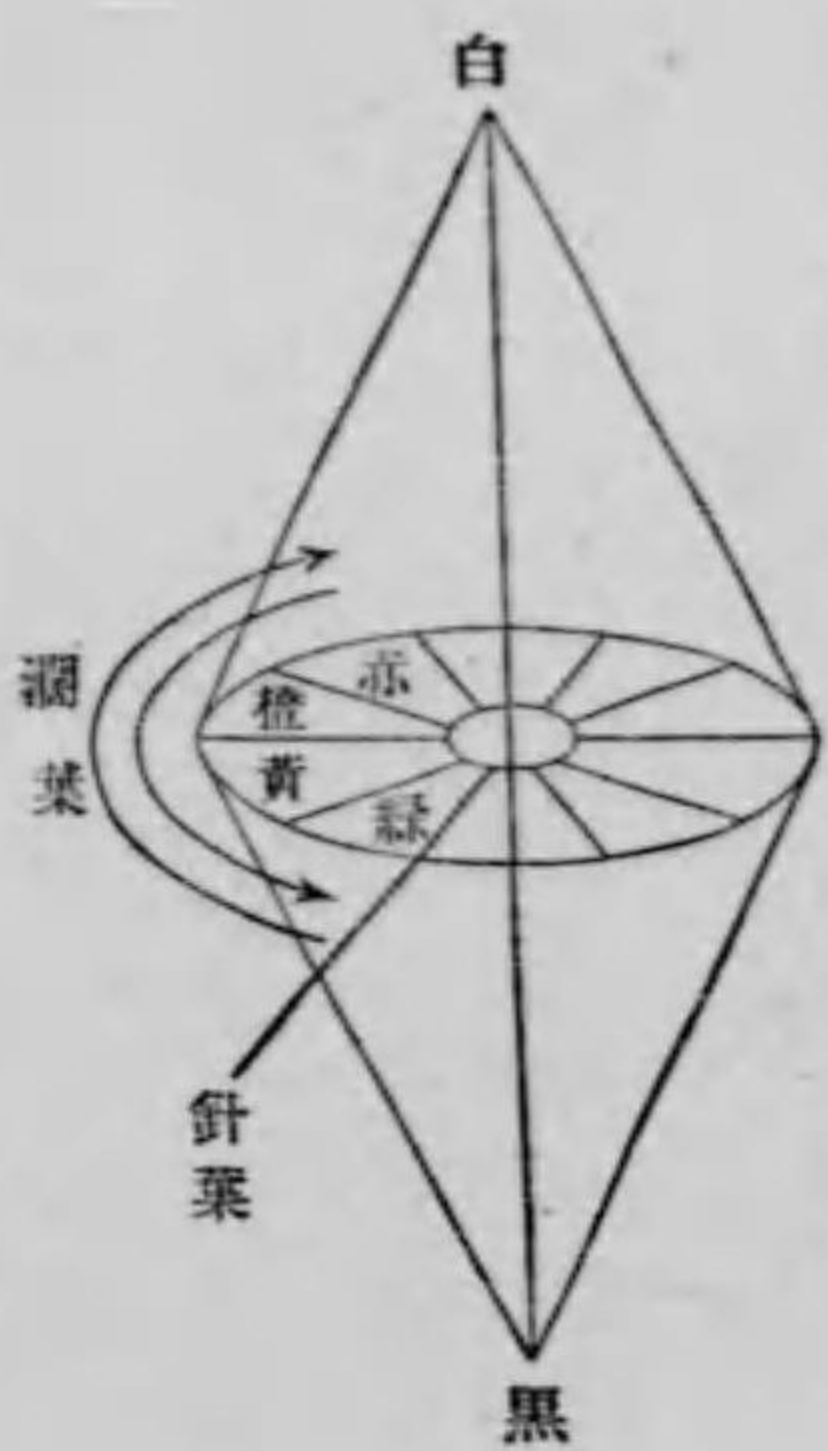
四、白色を呈するもの。

あぶらこ。

是によつて之を見れば樹葉は開芽より落葉に至る間色彩環の半を往復する事
一回であつて、其廣狭は樹種によりて異なる。さくらの如きは最も廣く赤に出で、緑
に至り再び赤に歸る。やなぎ、やまならしの類は最も小さい。常緑樹は殆んど零であ
る。此變化する色彩の濃淡はグント氏の色彩圓錐體の上部に近きか底部に偏する
かによるのであつて之を中央の環上に投射すれば同じ事となる。かくして冬季に
至りて最後に樹幹を止めて灰褐色となるは恰も此色彩界より全く蟬脱して再び

中軸に歸り來るものと見る事が出来る。針葉樹の如きは遂に動搖の烈しきを見ず
かく中央の褐色と常住の濃緑とを把持して動かざる所に眞面目あり崇嚴がある。
されば動蕩變化に富む潤葉樹と不動眞摯の針葉樹とを配するは最もよく美の法
則に適ふものと謂ふべし。是れ對比均勢の如き小問題と異なるのである。之等關係は
次圖を見れば明にならう。

第四十六圖 針潤兩葉樹の色相



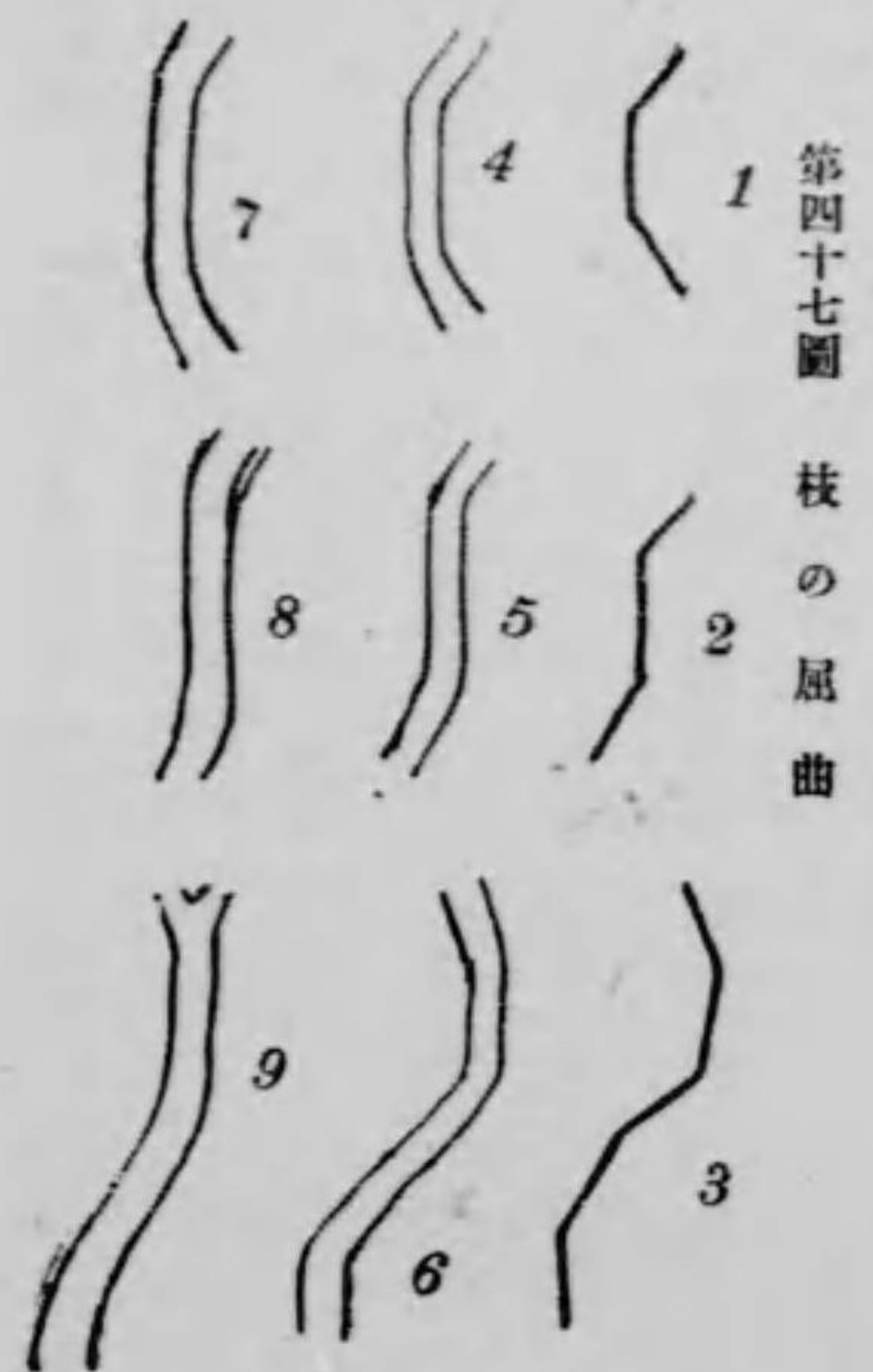
色に至るものもあり、赤より出で、赤褐になるものもある。

四季色相の變化は形態の向上發展と共に自然的に植物樹木界にありて其精髓
とも言ふべく人工の美、藝術美の無變化又は褪色破損し行くものも到底企て及ぶ

所でない。之を考へたら自然美が劣等であると言ふのは少しく遠慮しなければならぬまい。

樹木は多年生植物であるが其彩色の變化は一年を以て終らす同一樹木に於て年々に之を繰返して行くが夫と同時に年齢のかはるに従つて一つの大きな變化をして行く。そして益々美的價値を増加し來るのである。

(一)先づ之を形に於て見る。前にも述べた通り形を造る基は芽の位置構造であるが。凡ての芽が完全に多年に亘りて存續して行く事は困難である。内部の生力不充分の爲に、光線の不足の爲に、日光風雪の障害の爲に、また動物の加害の爲に屢々芽は斃死して殘存するものは僅かである。残つた芽は他のものに代る事もあり、自分の方向を改めない事もある。かくして當初は屈曲した線を形成するが年齢を加ふるに従つて角は



第四十七圖 枝の屈曲

とれて曲線となつて行く。第四十七圖は枝の屈曲を示したものでその(1)は同じ方

向の芽が枯れ行きたるもの(2)は反對の側の芽が交互に枯れたるもの(3)は始めて(4)より(6)の如き形態となる。是は幹にきたるもの之等は夫々(4)(5)(6)の形を経て(7)(8)(9)となる。



第四十八圖 芽の位置に依る枝の形状

第四十八圖の(1)は互生のものであつて結局(3)(5)の如き優しき形となる。(2)の方の多くの列をなして芽のつくものは其枯れ様によりては美しく彎曲をくり返し(4)より(6)の如き形態となる。是は幹には少いけれどもならの枝等にはよく見る所である。

第四十九圖の場合には多く針葉樹に見る所であつて頂芽缺くも側芽は直ちに之に代り終には主軸に何等の故障なかりしが如くに見ゆるを常とする。又側芽の内一二個を缺くも著しき不整形となる事はない。しかし海岸に生せる松の如き脆

第四十九圖 缺損せる頂芽
による樹型の變化



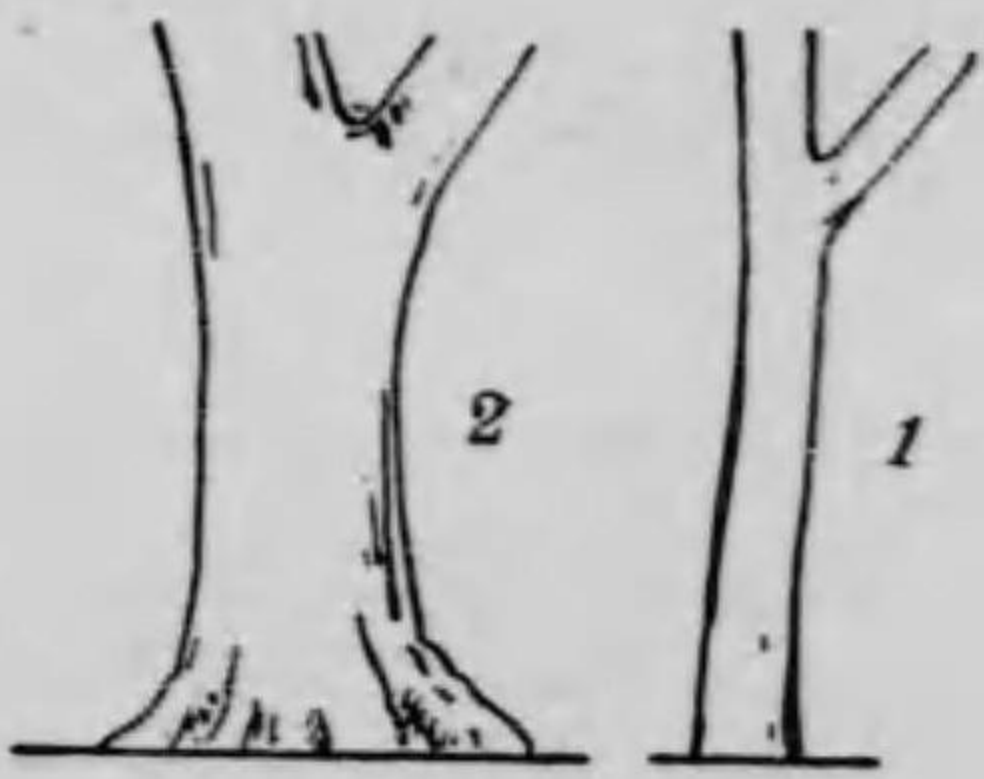
くして可なり。の大きな枝が折損を受け又は特種の方向から来る光線を撰ぶが爲に甚しく畸形を呈して来るものもある。一體樹木は何れも幼少の時には圓錐形をなす。然し長するに従つて諸種の變化を表はし曲線狀をなすが著しく老年となれば折傷を回復する事が出来なく屈狀のまゝになる事が多い。やなぎはしなやかなかの代表の如く思はれて居るけれども老柳は幹折れ空洞生じ所々より鞭狀の新條出でて屹屈巍峩の形をとる。更にならの古木の如きは其甚しきもので木と思はれない程畫的興味を帯び折れ曲つた幹は長年の生活の苦闘を現はし瘦せ高まつた骨格は想像を惹起さしむ。夕暮の暗さに包まれた寂寥を破りて梟の鳴く時一層の神祕を加ふる様に思はれる。

幹の變化は唯かゝる線の關係許りに止らない。今迄直狀を呈した幹の垂直線は年を経るに従ひ根の張りが現はれ枝の所には筋肉が隆ま

るを見る。幼時に素直な稚なさの美があれば老樹には力強い重々しきがある。之に

よつて樹木特有の美的價值を加へて来るが其程度は樹種によつて各々異つて居る。

幹の形のみならず枝に於ても此種の變化がある。枝は葉を負ふて光線のある方へ進んで行くが正則に伸びて行く時は充分に其責を果し得ず又かく眞直に進むを許されない。樹冠の内部には陽光の不足がある。其方へ向いた芽は發展せず。又伸びても甚だ



第五十圖
樹幹老幼の
變化
1. 幼樹
2. 老樹

勢力なき枝となり遂には枯れて行く。又枝は其量を増すに従つて垂れ下らんとし

第五十一圖 枝の伸張による形狀

芽は上方に向つて出やうとする。されば撓みなく曲線を作つて行かなければならぬ筈のものである。又一本のものを引伸し曲線を作つたものは趣が少いが其先端が止つて傍より新に伸



1, 3. 一度止
りて後伸長
せる枝
2, 4. 止らず
して伸びた
る枝

びて出来た曲線の變化は趣に富むものである。側枝では其芽が上側か下側かによつて趣が異なる。

第五十一圖の(2)(4)は一本が伸びた曲線(1)(3)は一度止つて新に伸びた曲線である。又既に伸びて居つた枝及其小枝の中小枝丈生残つた爲に得らるゝ特別の曲線は之に似て一層良好な結果を生ずる。



第五十二圖 枝の伸張による變化

1, 2, 3, 上の枝が伸びたる變化

4, 5, 6, 下の枝が伸びたる變化

第五十二圖の(1)(4)は夫々(2)(5)を経て(3)(6)の曲線に到達する。是等變化の仕方は芽の排列、樹種の異なるに従つて同じくない。而して老年になるとともに此効果は益々多きを加ふるのである。

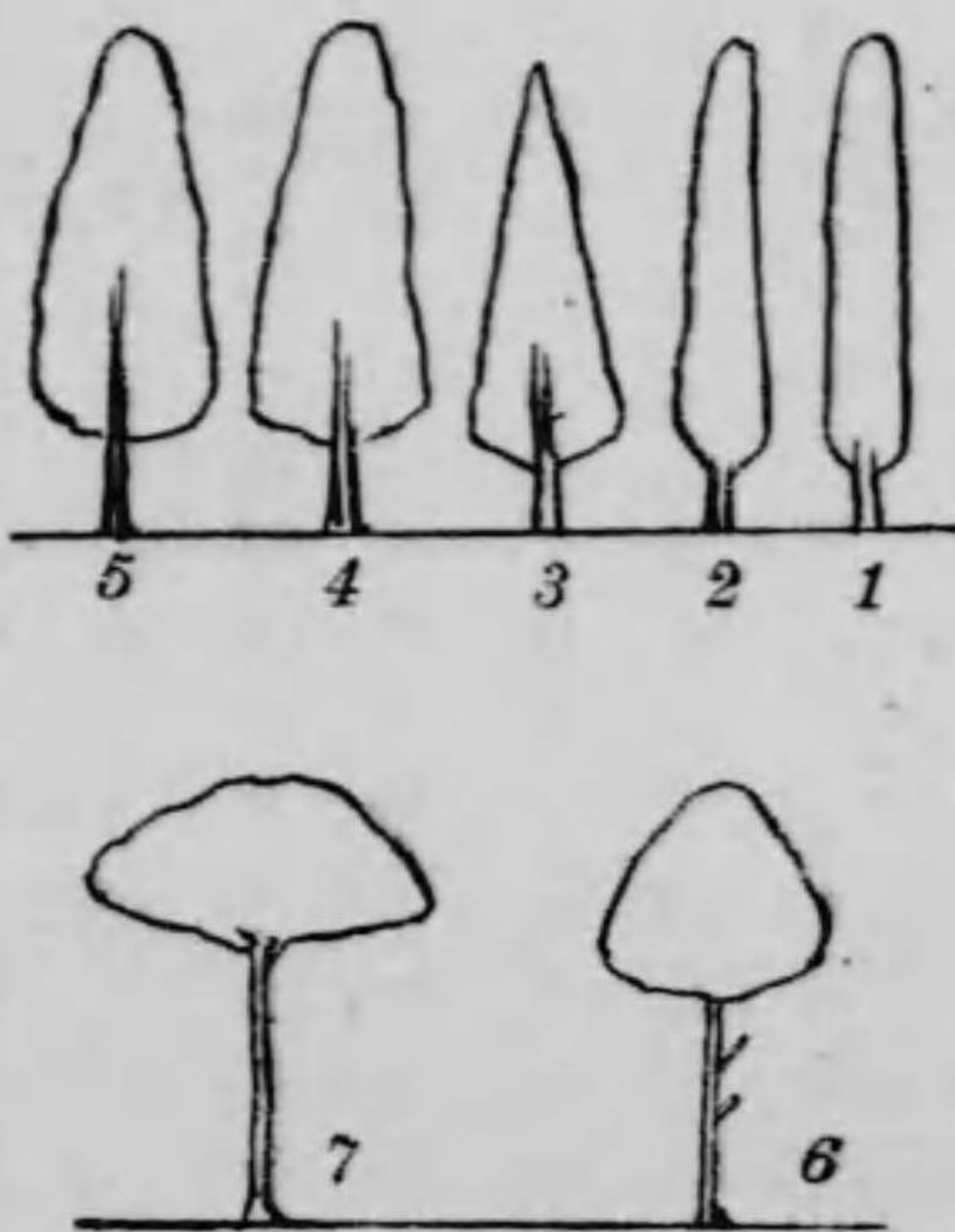
葉の大小も年齢と共に變る。幼樹では其葉は大きく薄く軟いが老年の木の葉は小さく厚く堅い、色も濃厚である。

之等一局部の變化の外に全體としての形が進展して行くのは重要な事實である。即ち始めの單純な圓錐形の幼樹が漸次複雑

な形となり樹種の特性を表はして行く。眞に樹種固有の形は殆んど頂部の生長をなさなくなつた頃に現はれて来る。そして之を過ぎれば次第に崩れて行く。されば樹形に於ても一つの極頂點がある。

樹木の形を大きく分ちて、しだれのものとならざるに於て、枝垂のものとはしだれやなぎ及び培養變種に限られて森林樹木にはない。

第五十三圖 樹形の種類



喬木の内目立つて高く見えるものには其幅狭い圓柱形をなすものと多少上部に細まり下枝は漸次擴張して圓柱狀オベリスクをなすものがある。びらみつどやまならしは前者の例であつてにぐらやまならしは後者の例である。(第五十三圖1及2)まつ及たうひも此後者の形に似て居るが上部に削減して行く事が一層甚しく長い圓錐形となる(同圖3)さはらひのきどいつたうひとまつ、えぞ

まつのあるものは是に屬する。是等は幼時から其樹形を改めないものである。此型のほふらと針葉樹との差はほふらの方は其枝が小さな角度をなして出て主軸とともに一つの葉束の如き有様をなすが針葉樹の方は一層角度が大きく殆んど水平に出で其長さが年齢の順に残つて居る爲に圓錐形となるのである。上部急削して居るのは全く主軸の生長尙旺盛なるを示すによる。更に老齡となつて上長生育止れば其所の枝條は擴張して順次其下位のものと同しくなり全體の形は稍尖り目のある橢圓筒狀となる。老齡のたうひもみに之を見る(第五十三圖4)。

尙一層高齡となりては下枝は漸次に枯衰脱落して樹冠は上方に移り其全形は多少卵狀長橢圓形又は橢圓形をなす。之はすぎまつ等に見る所である(第五十三圖5及6)。

されども是が主幹が生長を止る前に起り枝に尙生長力ある時は維然鋭尖せる形を繼續して底幅廣い圓錐形を作り長年間此形を保存する。まつは此形を經過した故に更に諸種の變形を生ずる。最下部の枝の脱落する頃はい上長生育は止り側枝は尙生長を續ける爲に多少扁平にして稍圓味を帯び菌形又は傘狀となる。イタ

リヤ産のストロインバインの如きは此著例である(第五十三圖7)。

以上の如き經過は單一主軸を有する樹木に於て見らるゝ所であるが其他のもの特に多數濶葉樹にては一層複雑なる發展をする。

みづきすゞかけのきりんご等は主軸を上部迄明に見る事が出来る。故に全形は垂直の方向をとる。大枝は直角に出で下部のもの長く上長部に行くに従ひ長さが



第五十四圖

りんごの木

の樹型

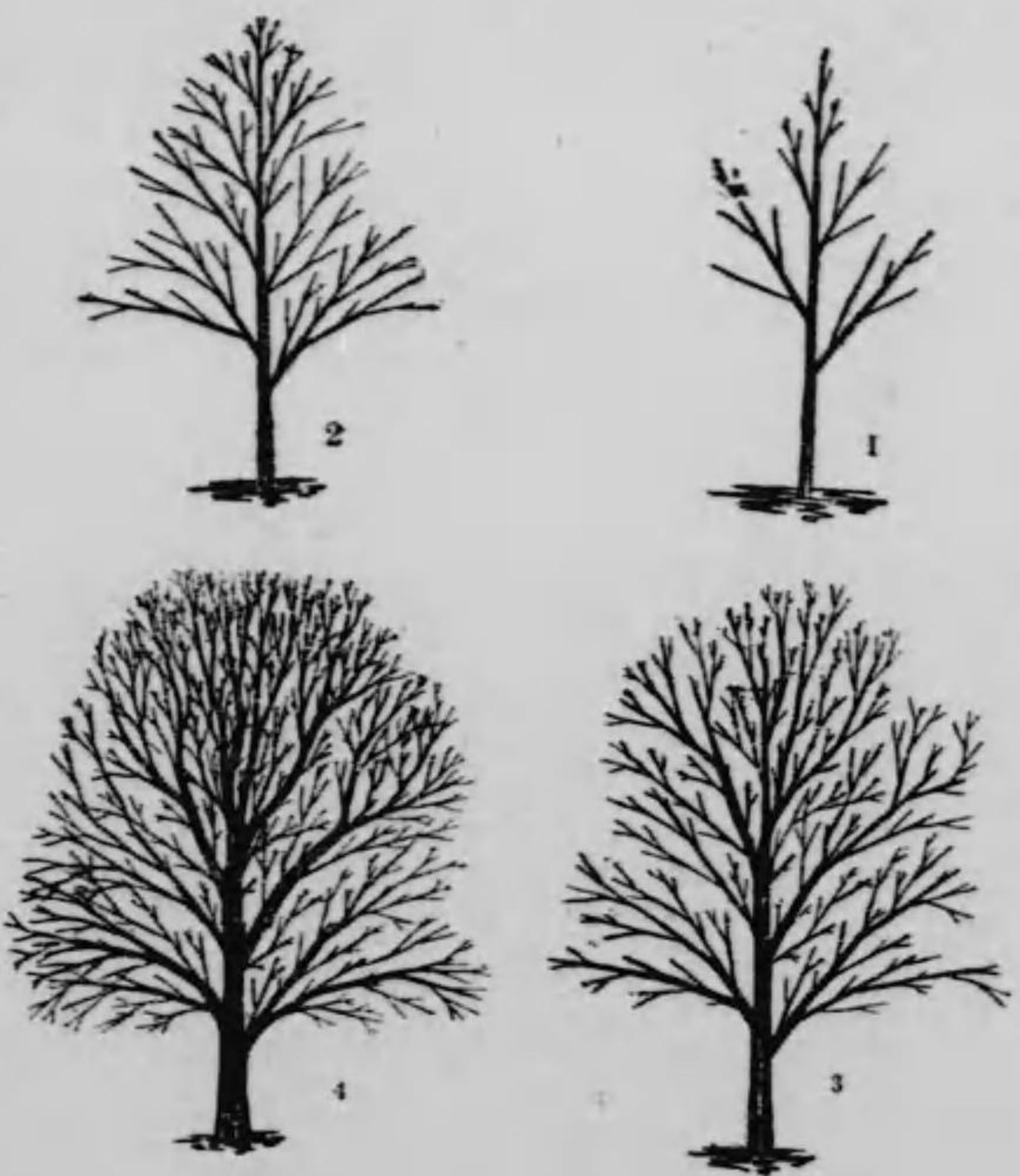


(ラ-フ) 樹型

減じて行く。此點はまつと同じけれども其幅廣く、枝は決して對生又は輪生する事がない。主軸と側枝との生長の比は全くまつと異なる。此型は一般にピラミッド又は幅の廣い圓錐形をなし遂には扁圓形となる。老樹になれば主軸と枝とは區別し難くなり樹冠中に消滅する故に圓頭を有するピラミッド型又は圓頂閣の形をとる。尙此類の分枝は頗る規則正しい(第五十四圖)。

やなぎ、じなのき類は鋭角をなして分枝し、幹は頂上に至る迄小さな角度を以て枝を分ち行く。故に全形は

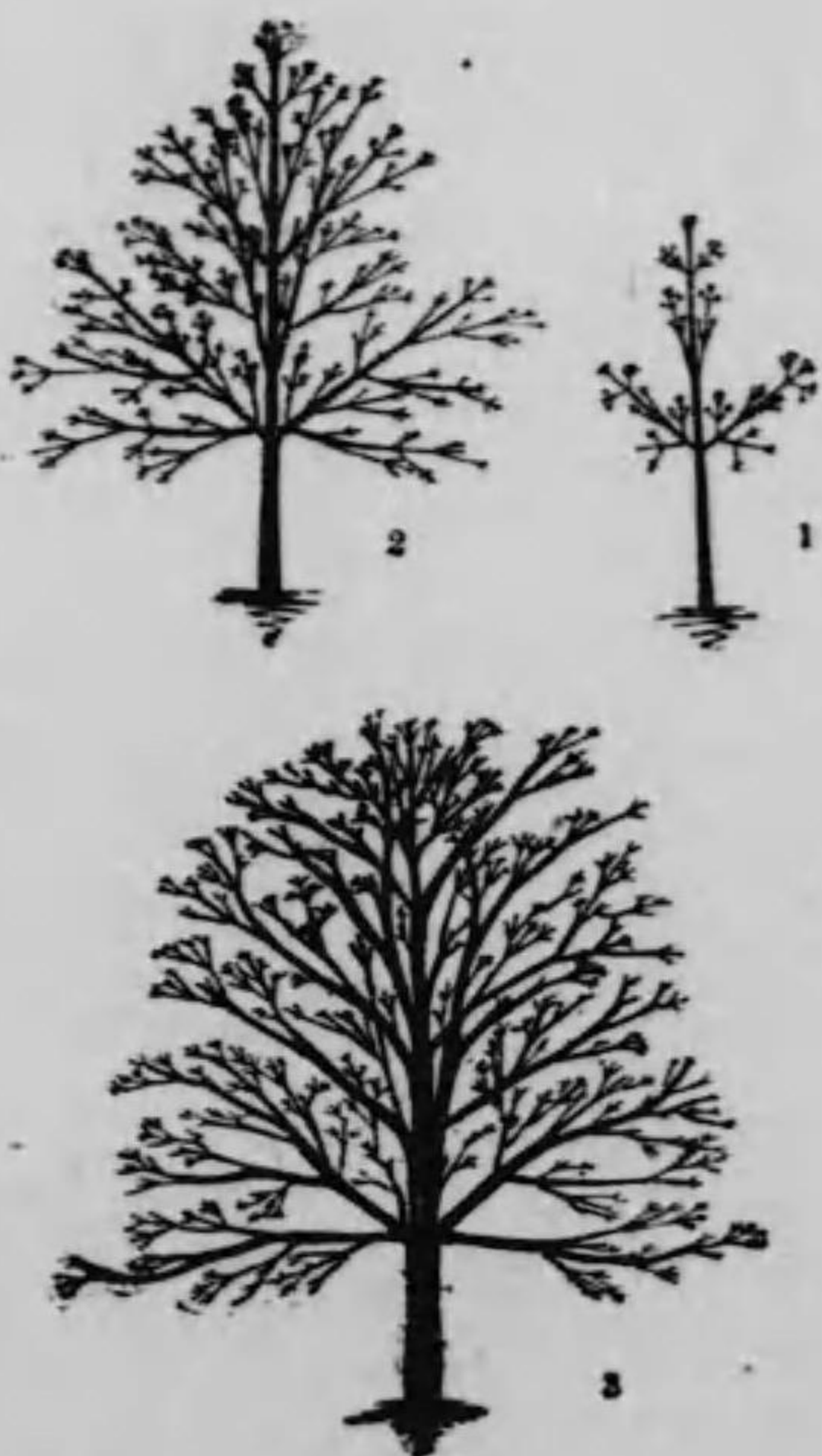
第五十五圖 しのきの樹型 (ワイド展開)



て最も著しい影響を及ぼすものは自然的又は人工的枝下し及切込である。而して
いたや、やまもみぢの類は枝は對生であつて可なり大きい鋭角をなして第五十

六圖1の如くに出づる。幼時は勿論ピラミッド型である。其芽は整正の生長をなし

第五十六圖 いたやの樹型 (ワイド展開)



極めて相稱なる發展をする。けれども年を経るに従ひて外方の枝は優勢となり爲に一種のピラミッド型をなすものである(同圖2)。中年のともぢに之を見る。かくして此相稱の型が發達して主軸の上長生育を止むれば同圖3の如き鐘形となる。

はしどいは前者に似たピラミッドの形であつて其主軸又は大枝が長く伸び然る後其等の頂芽の發達が停止する時は全く叉狀の分枝となる。かくして其全形が廣卵圓形に變ずるのみならず其主軸も樹冠中に消失ししかも尙始めの主軸に對する相稱の形式を失はない。第五十七圖は一より三に此變化を示したものである。とちのきも之に似て居る。しかしとちのきのもは幼樹の一部分の枝が他を犠牲にして伸長し樹冠内部に多くの空

隙を有する。且つ外部下方への發達は更に著しくなつて其枝の先端皆上方に向ふ。されば其全形は横に擴がつた圓頂閣又は球の形となる。開放地にありて充分發育せるものに此形を見る。くるみ、きはだも此類のものである。



第五十七圖

はしどいの樹型

(GIAE 54)

はつこやなぎ、かんは、やまならしは芽が螺旋狀に主軸を取まき枝は銳角をなして出で、側枝は單純に同比を以て生長し全形帯を擴げたる如くなる(第五十八圖)。中年のにればしほみ及びしなのきのあるものは前者の主軸が生長を止め其側枝稍、外方に發生した形である。此型の中枝條更に外方に彎曲し先端環狀をなした

ものは往々に見る所である。(第五十九圖)

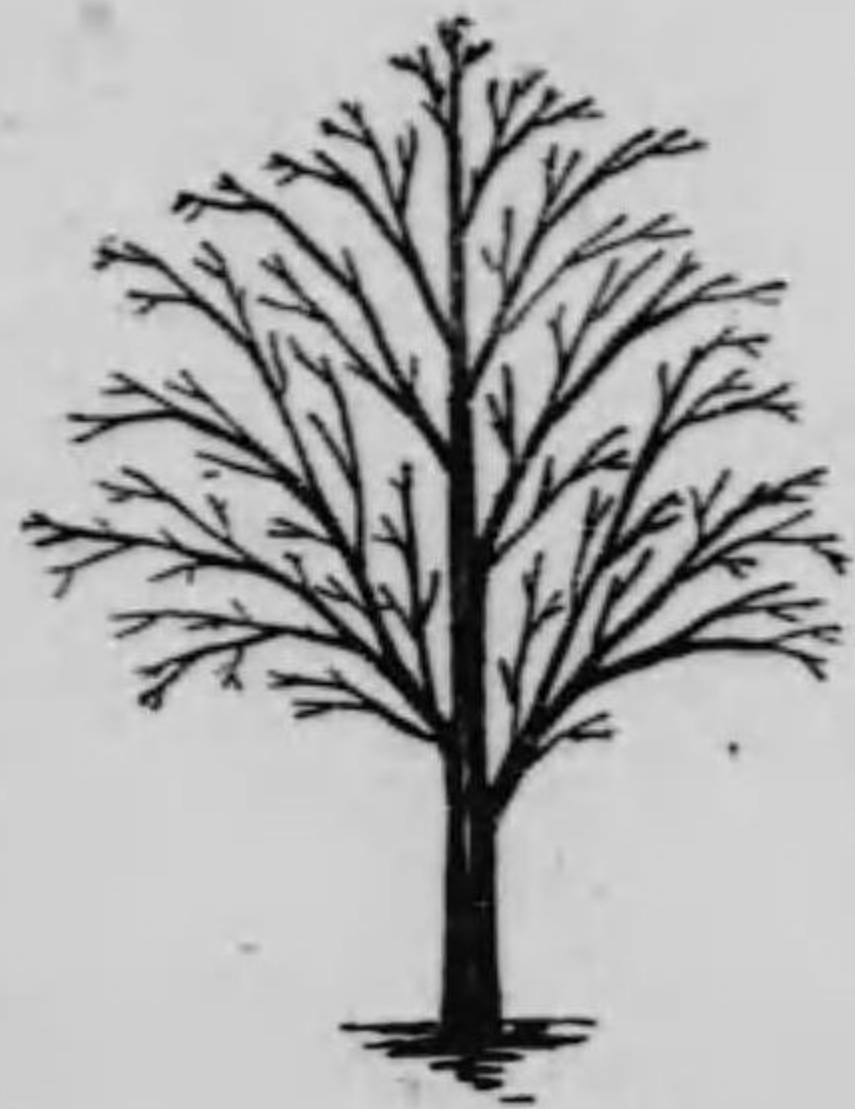


第五十八圖

かんばの樹型

(WILF 54)

第五十九圖 にれの樹型



かしはず、かけのきは特種の型をなし、始め圓錐形なる事は同じけれども枝は互生螺旋狀に出で其角度も亦甚だ大きく水平の位置をとる。側枝は直ちに主軸を壓倒して生長し頂芽は早く生長を止むるに反し著しく側方に擴張する。加之側枝の内にあるものは他を犠牲となして強大なる發育を遂げ著しく屈曲擴張する

(第六十圖)此の型はすゞかけのき、にせあかしやくるみ、くりかし類等に見る所である。



第六十圖
かしはの樹型
(スズガケ型)

此外かつら、やちだもほ、のき、こぶし、ふしのき、けやき、さくら類は夫々獨特の型をなし決して一律に言ふ事は出来ない。

かく年齢の進むに従ひて樹形は特別の型に向つて進み行くものであるけれども密林内に育ち又は人工的取扱を受くる時は甚だ不正な變形を來すものであ

る。特に矮林作業を施された木等は非常な畸形を呈し餘程の年數の間放置して置かなければ美的價値は出て來ない。

樹形の發展する内に一部分の枝に枯損や折損がある時には樹冠は複雑な變化を現はし來る。其外圍線には缺込み突出が出來、ドームの面には凹凸を生じ光線に明暗、色彩に濃淡を來さしめる。

樹皮のさけ方も年齢の賜であつてとゞまつ、しらかしの如き平滑なものも老年となればコルクの片の如き鱗片を生じて來る。

相稱均勢の如き下級形式美は年ととも消え失せて多様の變化が現はれて來る。其物質量は増加して來る。其神祕は加はつて來る。吾々は幼樹に生々とした精力と多幸なる前途とを期待するが老樹には其幾久しき苦闘から得た創痕と沈着な容姿とを見る。無言の内に哲學觀を説いてる様に思はれる。

(一)是はひとり形態のみではない色彩に於ても亦大なる變遷を見る事が出来る。此變遷は四季によるものゝ如く目立たない。長期間に亘つて徐々に來る爲であらう。又樹冠に於ては割合に著しからずして主に幹枝に於て起る故でもあらう。

樹葉の色は幼時のものは淡くして柔く特に柔毛を以て蔽はるゝ古いものは形が小さくなり堅く厚くなるともに其色も濃く堅くなつて来る。そして滑澤あるか又は短剛毛を生ずる事が多い。されば古き枝のみ多き老樹の樹冠は何うしても深緑であつて堅重の趣が出て来る。其外圍線の凹凸と相俟て益々其趣を深める。かじは、はるにれ等によく此例を見る。

枝の色が若木のものゝ老樹のものと甚しい差異あるは何人も心付く處であらう。若木の美はしい賑な色は年を経るに従つて失はれ澁い灰褐色が是に代るものが多い。尤も中には綠色、紅灰色になるものもあるが其にしても幼時のもの程鮮かな色は出ない。そして大きな幹に至つては龜裂を生じて淡い凸面の側には濃い黒ずんだ褐色が配せられて益々澁味勝となる。更に壯木には常に多くの芽と蕾と花と實との何れかを飾るが故に豊かに旺な成熟の相を呈する。老木に於ては枯れ残つた太い枝に堅さうに見える之等の枝條を装ふが故に尙一層の興趣を添へて来るものである。

かくの如き色彩の變化は心を止めて見れば明に認むる事が出来るが更に一層

高級なる且つ樹木固有の變化の美は其量及力の増加である。

吾々が物質量の大及力の強に對して靜觀同感をなす時には一の高等なる美感即ち壯大崇高の感を得るものなる事は曩に述べた。樹木は驚くべき年代を経て生長を経験する。英國のかしはは五百年乃至千年以上に及びいちるは平均最高五千年と稱されて居る。北亞米利加の世界蓋のあるものは四千年以上直徑三十五呎高さ二百二十二呎に達して居る。我國に於ても古來老樹名木が無數にあつて其年齢千年以上のもの珍らしくない。但し本邦のものは傳説や推測によるもの多く正確な測定が少いのは外國の例に對して遜色がある。すぎいてふまつ、えのき、けやき、もみ、かしは、じひ、くす等此種大木が多い。年齢の高大となると共に其材積量も増加して行く。かくの如きは無機有機界を通じて獨り樹木丈である。されば自然の生物にしてよく壯大崇高の觀に達し得るものは樹木を措て外になく。樹木は他生物の企及すべからざる高級の美に達し得るものである。故に樹木の美的價值は年齢と共に加はつて行くものである。此價值は再び人力によつて作る事は出来ない。

此關係は單一樹木よりも多數が集團をなした森林に於て著しく有利である。何

となれば其物質量は更に驚くべき多量を示すからである。初めて世界益の森林を見た獵夫は只茫然として眺仰ぎ自分の現實を怪んだと言ふがさもあるべきことである。蠱々天に冲する巨木が己を取巻き見る限りの範圍に聳立して居る處に入つては何人も驚き怪しむの外はない。單一樹木に於ては此状態に至る事が六ヶしい。

老樹なるものはかく絶大の威力崇高を保つものであるが我々が之を觀照する際に受る感じは眞の美的價值の外に珍奇を好むの感を挿む。老齡に過ぎて珍奇な樹木の中には全く破損缺潰して樹種の特性を何處にも認める事の出来ないものがある。吾々はかゝるものを捕へて樹種の美的價值を見る事は出来ない。健全にして高大な發育を遂げたものに於て始めて談ずるを得るのである。されば吾々は其樹種としての特色を失はない範圍に於て即ち健全法正なる状態に於ての美的價值を見度いと思ふ。此範圍に於ては樹木は未だ經濟的價值をも有し得る。樹木は十分なる物質を供給し得る状態にあるのである。樹木は美學的成熟エッセチツプに於てあるのである。

美學的成熟の前後には美學的に如何なる差異があるか、何によつて之を認むるか、是れ統一性の存否如何にある。

(一)形態に就て述べた處の各部の線や形は決して似もつかぬものゝ集合ではない。大枝小條悉くある一定の方式に於て纏められて木振りを作り葉花實又定められた形と位置とを保つ。樹木に於ける各部は決して烏合の集りにあらずして纏つた一體をなして居る。此大多數の樹梢葉簇が整然として居り終りなきの變化が完く統一せられて居る所に於て一層の高い美性が現はるのである。もし夫々の樹葉が全く各自勝手な形と位置とを取つたら樹木の全體は醜ウツクシき一塊と化し去るであらう。蟲の食つた葉や折れ裂けた枝、秩序もなく統一もなく匍カマひまわつた幹の如何に醜ウツクシいか。又竹に木を接いだ畫や、白花の木の枝に紅花の枝をついだ梅は珍らしいと思はるゝかも知れないが美意識には適ふ事なく寧ろ笑ふべき企である。倒れ朽ちて原形なき材料は多くの聯想と同情とを誘ふかも知れぬけれども決して快く美しいと思ふ事は出来ず何等の崇高をも見出し得るものでない。無秩序の状態は國家存亡の承認を許さぬ如く統一なき枝葉の集合には樹木美を認める事が出

來ない。如何に巧妙の曲線を集むるとも如何に珍奇の花を集ふともそれは決して美

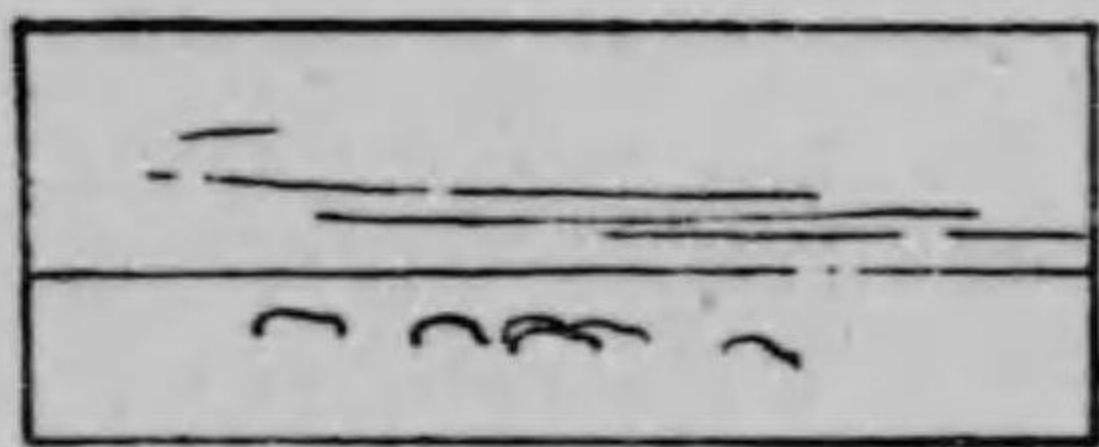


第六十一圖 亂雜なる枝振を有する木 (コイル原圖)

的の價値を有するものでない種々雜多の線を集めた樹木は第六十一圖に示すが如く何等の美なく其特徴とも認むべきものは只醜と不快とである。吾々は幸にして健全なる風景又は林内に於て之を見る事が少い。之に反して自然に於ては多く美はしき

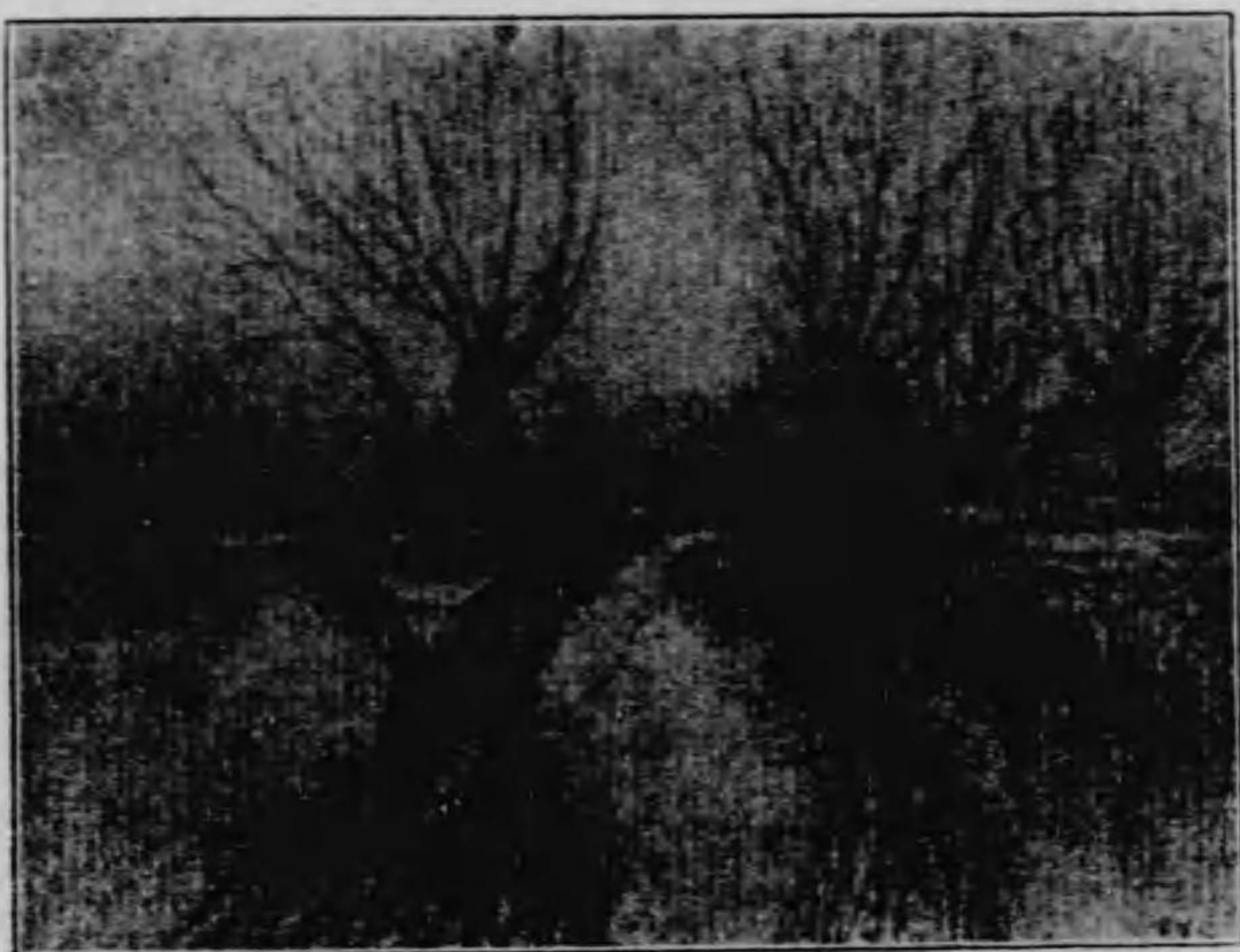
統一が行はれて居る。

しかし統一は同一でない。統ぶるとは多くのもの變つたものを統ぶるのである。同一物には統一がない。されば定規で引いた平行線には趣なくコンパスで行つた圓には興が少い。而してはんのきの林満ちた月に一段の興趣が存する。均しく線にしても些かづゝ方向の違つたものゝ集合は一種の情調を帯びて見ゆるものである。僅か十本



第六十二圖 統一せる編群 (コイル原圖)

第六十三圖 水邊の柳 (コイル原圖)



足らずの曲線の集合も整へ様によつては牧場に戸迷ふ羊の群を現はし得るのである(第六十二圖)。水邊に生せる杞柳の新條の同じ向の軽い線を繰返しつゝ如何にわびしくたゞづむで居るか郊外に聳ゆるにれの木の如何に同じ様な曲線の枝を擴げ大小よく整へて居るか。

之等變化統一の美は成熟期を過ぐる事大にして枯稿に頻し餘命旦夕に迫れるものにおいてには到底認むる事が出來ない。不正にして不健全なる木は決して森林美を構成するものではない。

(三) 獨り幹や枝の形のみならず其色彩に於ても亦此關係を認めなければならぬ。健全な樹木は如何に變化すると其色彩には統一がある。雜多な色彩を現はす事は一株の

木に於て之を見る事殆んどないのである。いたやかへてには一つの樹冠の中に大

第六十四圖 冬枯れのこれ



きく薄い淡緑の葉と小さく固い濃緑の葉とがある。其中間のものもある。しかし無秩序に入り混る事はなく突飛な色彩を呈した樹葉は害虫か菌類に襲はれたものである。嘗てにれの緑葉の上に眞紅の耳形の突起が多く附着したものがあつた。單純な色彩の相合から言ふ時は美しき對照を示すものである。然るに是に對しては何等の美感を生じ得ない。其赤點は病的の附加物たる蟲癭に過ぎない。是に反して淡褐の翅をつけた小種子が葉間を飾り風に散り敷くのは甚だ

快く眺めらるゝ之等は植物學の知識あるが爲に得らるゝのみと主張する事は出來ない。吾々は不法正なる統一なき形色に同感をなすを得ざるものである。とゞまつ葉が上部に至るに従ひて軽い色となり下部に行く程漸次濃い色彩を呈するが其中に一貫した綠調は此漸變の美を完ふせしむるものである。もし中部より上又は下半部が褐色黄色又は紅色を呈して居るか點々として之等の色を葉縁に混じたら如何であらう。無秩序は曾に建築物や室内の飾付にのみ限られた事ではない。余は嘗て都會の公園内にあるもみの木の煤けた黒緑の葉から新らしい黄緑の芽の開いて居るのを見た時に甚しい不快の感を覺えた事がある。

紅葉に黒褐色の點々が出来た爲に著しく美觀を殺いだのは近來の問題となつて居る。咲くべからざる時に花がさき時ならぬに葉が繁るのは只珍らしいと言はんより外に何等の價值がない。

(二)樹の統一性は其形態の仕方及び色彩運動の模様にも現はれて居る。是ありて始めて吾々の期待は満足せられ美的觀照をなし得るのである。又風に吹かれても均しく靡き同じ様な揺れ動き方をする。其有様に各樹種固有の美的價值が現はれ

る。年齢の増加による樹木の變化運動も亦左様である。其階段を踏まざるに至つたものは既に成熟期を過ぎたものである。年と共に缺潰崩落して行く樹木には何の美的價値をも認める事が出来ない。

以上各種の美性は決して個々別離して存するのではない。事實に於ては一致融和して始めて全體の美を構成して居る。此全體の融和の上にも統一性が働いて居る。

統一性の美は吾々の心内の作用に埃つ事益々多い。かくして單なる感覺上の作用のみが美の内容を作り得ない事が明になる。美は高尚になる程神秘になると言はるゝが高尚になる程單純なる感覺から律し得なくなる。

樹木の美性が其立地により日時により天候により他のものとの對照によりて著しく影響を受けるのは無制限に認めなければならぬ。しかし夫等の爲に樹種本來の美的特性が全然奪ひ去られるものではない。奪ひ去られた時は恐らく破滅を意味した時であらう。かの刈込術 (Topiary art) は樹木美を利用せずして寧ろ破壊し以て只綠色丈を役立たしめたものであるまいか。諸種の照應は樹木本來の美性

に従隨して起り之を美化し時に悪化する。其管々しき舉例と説明とは今は避けるであらう。是は前章に於て廣く亘つて摘載したと思ふ。但し月の光は輪廓を不判明にし個體の差別を和げる點に於て特種の美感を與へる。朽ち倒れた樹木は前述の如く樹種としての美的價値がないけれども聯想を惹起すべき暗示をなし特に月の薄光り夜鳥の鳴聲遠くの灯火の是に添ふものある時には珍らしくも高き美感を生せしめらるゝがしかし之は樹なるが故にかゝる状態に導き得たのではない。吾等は今樹木美性の長き一般的觀察を止めて一つ一つの樹種に就て其美性を眺めやうと思ふ。

第二節 有要なる森林樹種

本節に於ては吾々が取扱ふとする樹木の種類を大體に於て定めて置きたいと考へる。

樹木の美性は頗る複合せるものであつて其要素によつて各樹種は夫々特別の美的價値を有する。しかし今針濶全體に就て各別々に之を見て行く事は到底不可

能である。特に我國の如き熱暖溫寒の各帯に亘りて著しく多數の樹種を有して居る所にて其全體を見盡し又記載しやうとするのは穩當でない。多數の樹種の内には唯木質であると言ふ許なのがある。又林業上更に價值を有しないもの即ち林學で言ふ「森林」を構成しないものがある。又性質相似て居つて僅かに分類學者の解剖又は大工の考へによつて分ち得る位のものがある。之等は美學上一所に見る事が出事。それで極常識的に考へて見て有要な森林樹木として今美的價值を觀照して見度いと思ふ者を數へれば次の如くである。

針葉樹種

すぎ、ひのき、さはら、ひば、あかまつ、くろまつ、はひまつ、からまつ、ぐひまつ、えぞまつ、あかえぞまつ、とまつ、しらべ、もみ、つが、こめつが、いちみ、なぎ、いてふ。

竹類

澗葉樹種

くぬぎ、こなら、かしは、みづなら、くり、常緑かし類、そろ、して類、はんのき類、かは類、どろ、やまならし類、やなぎ類、にれ類、けやき、榕樹類、くす類、附肉桂類、えんじゆ類、豆科の樹木、きり、はぜ、ぬるて類、はりぎり、やちだも、しほぢ、とねりこの類、はしどい、ほゝのき、こぶし、なゝかまど類、さくら類、きはだ、もみぢ類、とちのき、しなのき類。

灌木類

蔓木類

灌木蔓木類は素より森林として扱はるゝものではないが其特種の美觀を呈するが故に概略記載して見様と思ふ。

以下吾等は針葉樹及び澗葉樹の兩節を設けて上掲各樹種の美的性質を論究しやう。

第三節 針葉樹

針葉樹喬木は普通に其主軸は通直に頂上迄貫き枝條は整然階段をなして之につき全形は幅狭く縦に長い、云はゞ太い棒の様で其先が尖つたものである。而して其色は黒ずんだ暗綠色であつて常緑の細葉密攢する爲に光線の樹冠内に侵入するものが少い。形態の上から言へば端正、色彩の上から云へば眞摯、印象の上から云へば神嚴の趣がある。是は第六章の形や色彩の論から自づと導かるる結果である。材の解剖的構造が示す様に澗葉樹に比して全く單純であつて外形は相稱均勢の

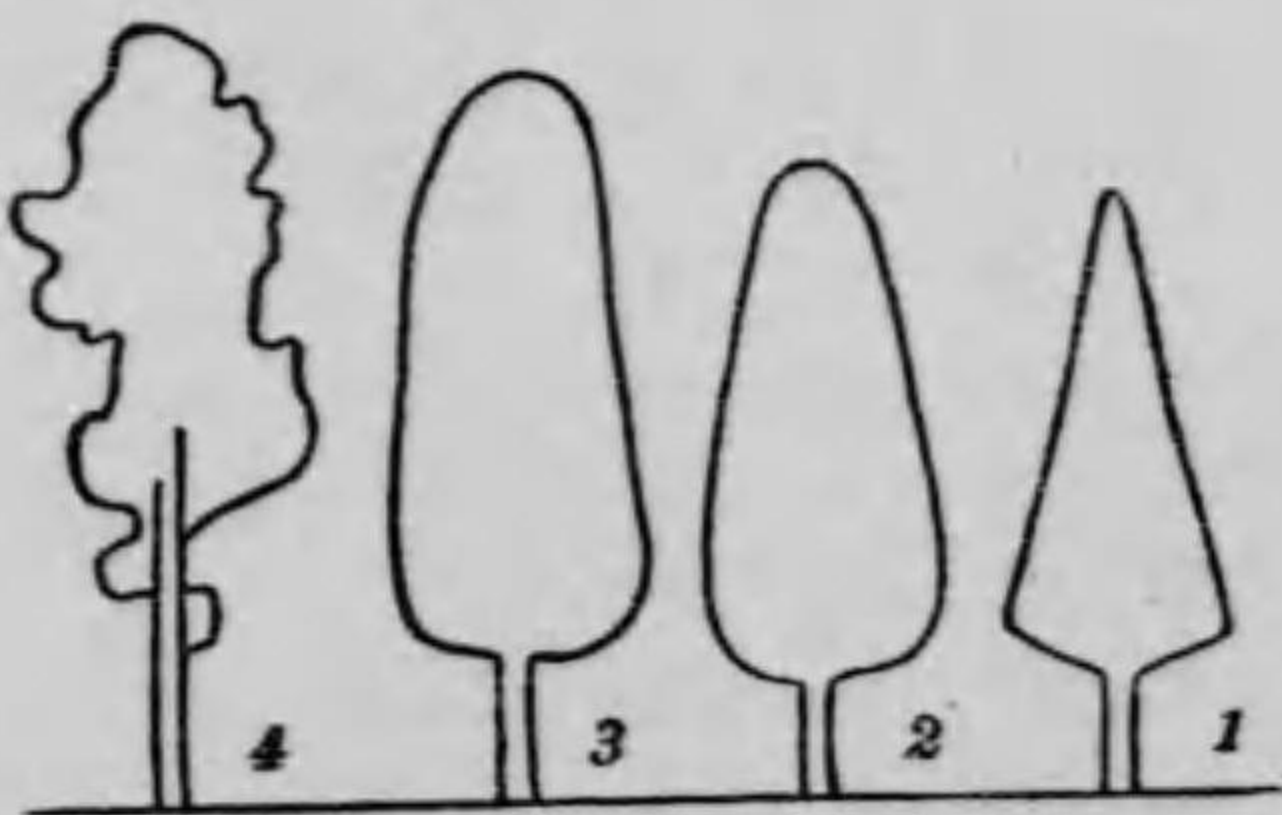
形式美が強張せられ變化よりも統一性が甚だしい。色彩の鮮かさと軽い變化とに乏しく暗鬱に傾く。此針葉樹常性の例外をなすものは形に於ていてふくろまつ、いちる等色に於てはからまつ、いてふなぎ等である。樹種相互の差別は全形の鋭鈍、外圍線の如何、色彩の濃否、傳説類の有無等のものである。

(一) すぎ杉

すぎは我國到る處に存し人の目に觸るゝ事最も多い樹木である。南屋久島から函館迄、居宅に山林に都市に村落に此木を見ざるはない位である。従つて人心に印象を與へ風景に影響を及ぼす事決して少くはない。遠く望むも其形其色は何人と雖紛ふ事はない。然らば如何なる特性を帯び如何なる美的價値を有して居るか、今之を見やうとする。

(い) 形態　すぎの形は針葉樹の最も體型的なものである。主軸は老年に至るも樹冠中に紛失する事はない。枝の伸長力は主軸に及ばざるが故に全形は常に長圓錐形に近い(第六十五圖1)。幼少の内は尖圓錐形をとるも三十四五年を経れば既に其尖端圓味を帯び全形は次第に穩和な相を呈して來る(同圖2)。之は頂上の生長鈍りて

第六十五圖
すぎの外圍線



其周りの枝が追付くからである。多く吾々の眼に觸るゝのは此形である。幼時の颯爽たる形は新植の山林でなければ見られない。密林の木は下枝落ちて樹冠は甚しく上部に附著するが其形はやはり年齢の老少を示して居る。遙に老年に達せるものは全く圓筒形に近くなつて來る(同圖3)。我國舊家の庭宅附近によくすぎの此形を見る。更に老年となれば樹冠中處々に缺潰を生じ釣合を失ひ畸形を呈し醜くなる(同圖4)。社寺の境内等にはよく此例を見る。まつの大樹は肉太の曲線を描いて却て趣ある釣合を保つがすぎの老大樹は徒に破損缺潰を加ふのみで均勢は次第に失はれて行く。變化は増すが統一なく亂雜になるだけである。かくの如きは天然記念物としては良好であらうが美的の價値は乏しいものである。

中年以前のすぎの鋭いピラミットの形をとるのに就て見ると其長大なる垂直線としての感じよりもむしろ兩方の稜に沿ふて上る視線が急勾配を走り上る様

な感じをさせる。是は眼筋の運動と頭部の仰向けの運動とによりて緊張を感じるのが主要原因である。そして遠くから此形を見れば距離の爲に小さくなり之を仰ぐ



第六十六圖
杉の外圍線の運動

事なく緊張を生じない代りに其尖った形が錐の様に空をさして居る趣を覺える。それで若いすぎの林は線を多數に繰返して其感を強める。

中年以後のものになれば此鋭尖の状態を失つて
穩和圓滿になるが是は全體の形としての安定圓滑と云ふ爲よりも其外圍線の効果に基くものと言はねばならぬ。此線は前者の如く強く兩側より迫り來つて鋭く衝撃するの状をなす事なく緩かな曲線を傳はつて移りゆく眼の運動は著しい滯又は故障を受ける事なく進行し安易な快い活動の感がある。是は適當の近さの距離に立ちて仰ぐ時に得らるゝ感じであるが極遠い距離をとつて全く風景中の一要素として眺めらるゝ時には太い鈍い垂直の線として風景の平板になるのを破り穩な變化を與へる。而して其の落付いた迫らない線の繰返しによつてなだらかなしんみりとした情調を惹起すものである。此情調はすぎの木を外にしては求



すきの全形

第六十七圖



第六十八圖 すぎの林の大観

める事が出来ない。もみまつびのき夫
夫特色はあるが我國內地にあつて最
も普く特色付けるものは此すぎであ
ると言ふ事が出来る。特に田舎に於て
平野、山間の村落に此こんもりとした
穩な姿を見る事が多い。茲に掲げた寫
眞第六十八圖の如きはすぎの木が主
となつた山林の景觀であつてすぎの
木は稍、老けて居るが尙懐しく床しい
趣を漲して居る。

此が稍や老ゆれば樹冠に些少の欠
缺を生じても尙形の崩るゝ事なく變
化を加ふるに止るものは最も美的の
價值のあるものである。遠く離れては

樹冠内の小さき空間の空の色を見せて單調一様を破り、近づけば其縁を辿るに方向の曲折變轉を與へて厭倦を生ぜざらしむる。實に眼が此縁邊を廻るや芝生柔き丘に上り又はなだらかな谷に下り知らずの内に頂を越る様に興はさめず樂はつきす靜に快を味はい得るの感がある。すぎの中年及稍老年以後の形と外圍線とは實に靜穩平息の表徴とも言ふ事が出来る。しかし極めて老衰し形を保たないものはすぎの特徴として何等見るべき所がない(第六十九圖)



第六十九圖
すぎの老樹
の外圍線

更に近づいて其幹の形と分枝の有様とを見るに以上の趣の尙一層確めらるゝを知る。すぎの幹の素生よく直立して居る事は何人も知るであらうが、其偏りなく眞直に伸び上り樹冠の中に進み入る有様は觀るものをして爽快を感せしむる。垂直線が爽快の感を惹き活動の中の安定を感せしむる事は既に説いたが、すぎの木は此働きを完全に備へ尙且つ統一直線の望む能はざる風格を有して居る。定規で引いた直線に何の趣もないが、人の手で描いた直線に言ひ知れぬ爽さがあるとは畫家

コトル氏も言つて居るが、すぎの幹は恰も此事を完全に裏書して居る。其滞りなく縦に引かれた直線の清々しさは如何に熟練の畫工と雖も作り出す事が出来まいと思はれる。實に爽なる直線の内に美はしき曲線の限りなき艶麗を加味したものと云ふ事が出来る。此趣は適當な林業的の取扱を受けたものに特更によく現はるるを見る。其眞直に通つた樹皮の縦裂は此趣をして一段の光彩あらしむるものである。挿入した寫眞第七十圖は函館



第八章 樹木の美的價值

附近のものであつて成熟期に達したすぎの幹の爽麗の美を十分に發揮して居るのを見る。

すぎの枝は他樹種のに比して餘り多くない。特に正しい林業的の取扱を受けたものに然うである。そして多くの細い枝を始めから拋物線狀の曲線を描いて出して居る。勿論輪生である。此曲線がすぎの林に優しさを加ふる事一層である。又其附け根に於ても甚しい筋肉の怒張を示さないにも拘はらず著しく視線の方向の激變を誘ふ事なくよく優しさを保ち得るのは此枝の曲線の美はしい幹と枝との太さの比が甚しく異なるによるのである。其根の張りも瘤狀に膨らむ事なく軽いナイル氏線の裾を引く丈である。

すぎの形は何處迄も優麗であり正純である。成熟期を過る甚しいものに到つては其枝が太く時々折損し其幹も往々にして内部腐朽して大なる洞穴を作る事がある。かくの如きは素よりすぎとしての特徴は失はれて居る。併し其非常に大きい物質量と長大の時間は吾々を幽玄な冥想に誘ふものである。老大樹の趣は此處に存するのである。

(ろ) 色彩と光度　すぎは陽樹である。幼時に於て庇蔭を好まざるに拘らず其幼い枝も日蔭を欲するものゝ如く葉を濃かに繁らして光線を遮る。或は光線を十分に經濟的に利用せんが爲に細葉を密布するのかも知れぬ。何れにしても外に向つては反射量の少く内に對しては透入する光がない。實に黒い樹冠下に立つては暗鬱の境を見るのである。一葉一葉を採つて見れば純粹な濃緑であるけれども樹冠となり風景に對しての効果は黒又は暗色がすぎの色を代表して居る。勿論周囲の光多き空又は雲と軽く薄い潤葉の樹冠との對照の結果もあるであらうが、光を遮るの作用強く光度の極めて少いのはすぎの木の特色として認めない譯には行かぬのである。

暗色又は黒色によりて起る感覺と是に應ずる感情の如何は既に論じ盡したる如く、何處迄も眞摯である。一步進んで神秘である。吾々は此感をすぎの林でよく味ふ事が出来る。殊に其中に含む濕氣と香氣とは此感を誘ふ事大なるものである。此が直立の姿、量の長時間の長久と相俟つて神秘幽玄の感を深からしむるは改めて言ふ迄もない。萬葉集の一歌人が

彌彦のおのれ神さび青雲の柳曳く日すら小雨そぼふる。
と歌つて居るのは幽邃な森林が有して居つた其社を拜して體驗した率直な思想に違ない余は數年前其所に參詣したが伐採と火災の爲めにすぎは残り少なになり鋭尖の幼林に接するに過ぎなかつたが爲め古の神々しさは唯想像した丈に止つた又有名な

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなきに涙こぼるゝ

の歌のある伊勢の大廟に參つた人は其千古斧を入れざるすぎの老樹の繁り合ひて光を洩さぬものあるに氣付くであらう英吉利の人はかしはを稱え、獨逸の人はタンネ(白檜)を讚するが吾古しへの人はすぎを讚美する事決して尠くはなかつた和魂を祭れる三輪の神の歌はれたと云ふ

吾が庵は三輪の山もと戀しくばとぶらひ來ませ杉立てるかど

の如きは唯古事記の語り草と言つて仕舞へば夫れ迄であるけれども吾々の眺むるすぎの木に懐しい聯想の彩を與へ神々しさを惹起さしむるの効は顯である。何れにしてもすぎの樹冠の色は決して鮮かに賑かなものではなく極めて暗陰

眞摯、幽玄なものである事は疑はれない之は主に中年以後のものに就て言つて居るのであるが幼年のものも其景色の鮮かな綠なるに拘らず樹冠としては矢張り黒く林内は暗い吉野の林の如きも間伐せざる者は眞の暗夜と思はるゝ位である。杉の葉の色は冬になれば稍、赤褐色を呈して暖調を帯びるが北方積雪の存する地方では雪の白さと照應して其暗さ黒さを改めない。

此樹林内に入れば幹の色が目につくが樹皮は赤褐色の少しく黒味を帯びた色となつて温かな感じを與ふるものである。此色は樹冠の暗鬱と形態の優しく率直なのを調和して全體として一層快い感を得せしむる。

さればすぎの木は率直眞摯の美を充分に發揮し且つ其中は爽麗を加味するものである。全形及周圍線も亦此趣がある。此種の美は感覺にのみ訴ふる色彩の華美と異り、着實眞摯、崇高、幽玄、神秘の趣ありハルトマンをして言はしむれば高等なる階級の美である。しかも峻嚴の嫌なく穩和と曖昧とを交へ清々しさと優しさを加味して居る。すぎの美的價值は此單純なるが如くして複雑に率直なる如くして典雅なる高級の美に屬するのである。其形式から言へば均勢統一を守る所に價值

がある。

さくらの花は實に大和心の表徴である。まつは義節の表顯である。そして一方に

第七十一圖 すぎ林とさくらの木



斯の如きすぎの木の美が全土に行き互つて風景を支配して居る。吾々は祝福された國にあるを光榮と思はねばならぬ。

(ハ)他の樹との關係 吉野ではすぎの林に必ずひのきを混じて植る。それは勿論萬一の危害を慮つての保護上の手段であるが、爲に又美觀上著しい効果のあるのを吾等は見た。ひのきの林は頗る尖銳の樹冠を列ぬるものである。すぎの林は黒きに過ぎ易い樹冠を以て蔽ふものである。此兩者をある比を以て混植するのは其缺點を打消し合つて完璧たらしむるのである。唯すぎの林の美を十分に保ち又其色をして基調たらしめ様とするには

ひのきの分量を出来る丈減局しなければならぬ。此點は大に注意すべき事と思ふ。さはらを用うるに至つては尙更である。もみやたうひとの混淆林は見ない。造林の上から行はれ難い事と思はれる。尙吉野では霞の奥はいざ知らず見ゆる限りはさくらなるべき山が甚しくすぎと對照されて居るのを見る事が出来る。しかし其爲にさくらの美觀を殺ぐのでは決してない。色彩のみならず形態に於ても對照と言ふ事が著しく美觀を増加するものなる事は喋々するに及ばぬ。すぎの暗鬱の中に隱密に含まるゝ暖さと優しさとはさくらの隣するに於ては今や現實の存在によつて強く映えて來る。暗緑と淡紅と、直狀と婉曲と相互に強め合つて愈々妍を競ふものである。第七十一圖は神田川上水井之頭の池であるが其濃密に過ぐる池邊のすぎ、さくらの優艶な姿を點じたのは絶好の適例と言ふ事が出来る。東京府でさくらを増植し公園としたのは適宜の處置と認めらるゝ。之等はすぎを主としての談であるがさくらの方でも決して損をしては居ない。其淡きに過る印象は強いものではなく永いものでもない。他の對照應援に埃つ餘地は十分に有する。

札幌の圓山神社にはさくらの林があるが其背景にすぎ、ひのき、さはらの混淆林

がある爲に著しく美觀を添て居る。又孤樹として生ずるさくらにとりては尙更である。しかしさくらの木の間に基盤目の様に又小塊狀にすぎを入込ませるのは決して賞すべき事ではない。是は美の破壊である。其理由はさくらの條下に述べる。又さくらは花時數日と開芽の前後の外は美的價値の極少い木である。特に夏の繁み冬枯の時に然りてうる。さくらのみを植樹するの弊は茲に存する。此期間よく美觀を失墜せしむるなきを期せば必ずや常綠樹特にすぎの如きを植て置く必要を生ずるのである。

(に) 以上すぎの美的價値を纏めて考へて見ればすぎの木は一般林業上の利益の外に風景造成に對して緊要なものであり。山林、邸宅、都市、村落、公園、私園に植て極めて良果を齎すものである。特に社寺の境内にては其崇嚴を保つ爲めに缺くべからざるものである。またひのき、さはらと混植しさくらと對照して植るときは其利益甚だ大きい。唯北方の地是が造林不可能な所に對しては用うるを得ざるは勿論である。かゝる所には又別な樹種の適するものがある。

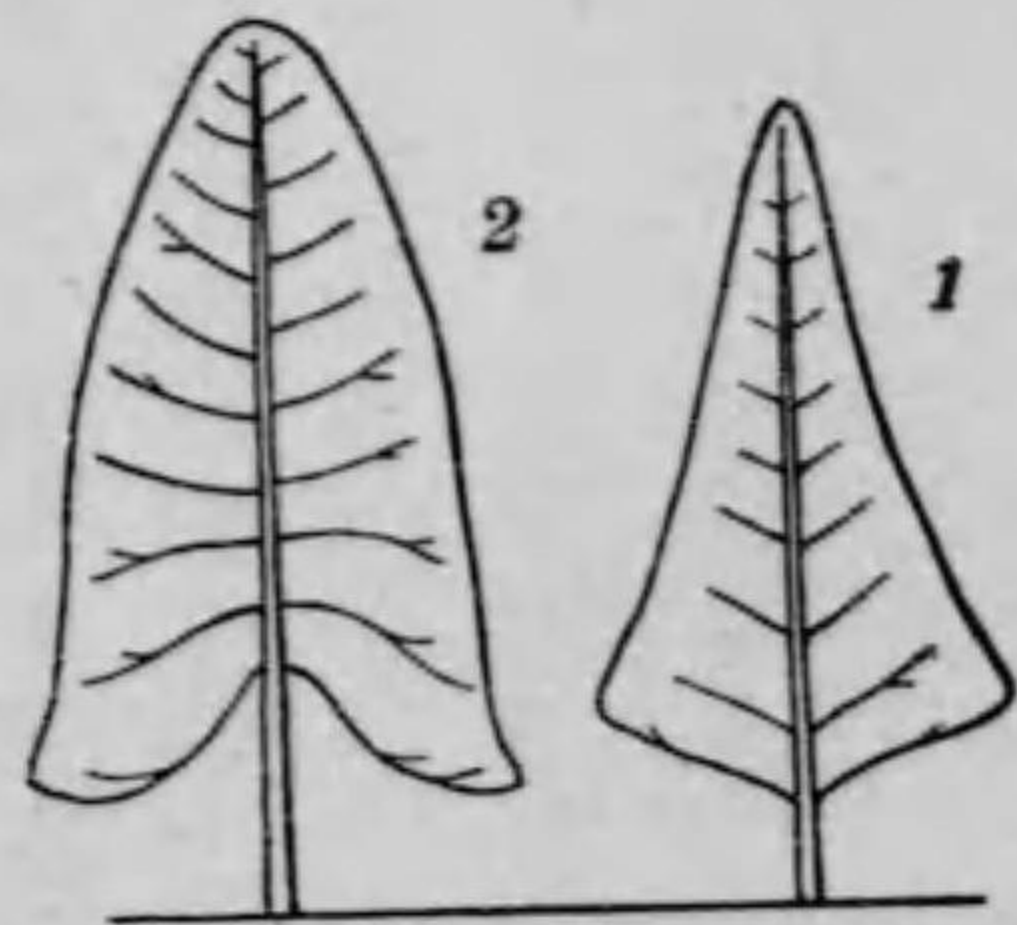
(二) ひのき、扁柏、檜とさはらはら花柏、榎

ひのきはすぎに次で多く造林せらるゝ木であつて極廣く知れ互つて居るものである。さはらはひのきに近似し同屬である。

(い) 形態 ひのきはすぎに比して一層尖銳なピラミッドの形をする。幼時に於てのみならず老年になつても改めない。葉は鱗狀をなして新條に着くのみなるが故に其樹冠はすぎの様にまとまつて蒼然とする事はない。併し小枝は甚だ密であるから針葉樹としては濃密な樹冠を構成するが其外圍線は極疎らに見える。そして老年となるに従つて是が甚しくなる。形態かくの如きが故に幼時は勿論中年以後

と雖も極鋭く力強い勢力の感じを與へすぎの様に優しく穏和な所がない。すぎと混植された場合には特に此趣が著しい。

ひのきの幹は極く眞直である。筋肉の様な細い條が膨らんで通つて居り樹皮は是に沿ふてさける一體にすぎに比して頗る堅緻の趣が多く優美な曲線を暗示する直



第七十二圖
ひのき壯老樹の構成圖
1、壯樹
2、老樹

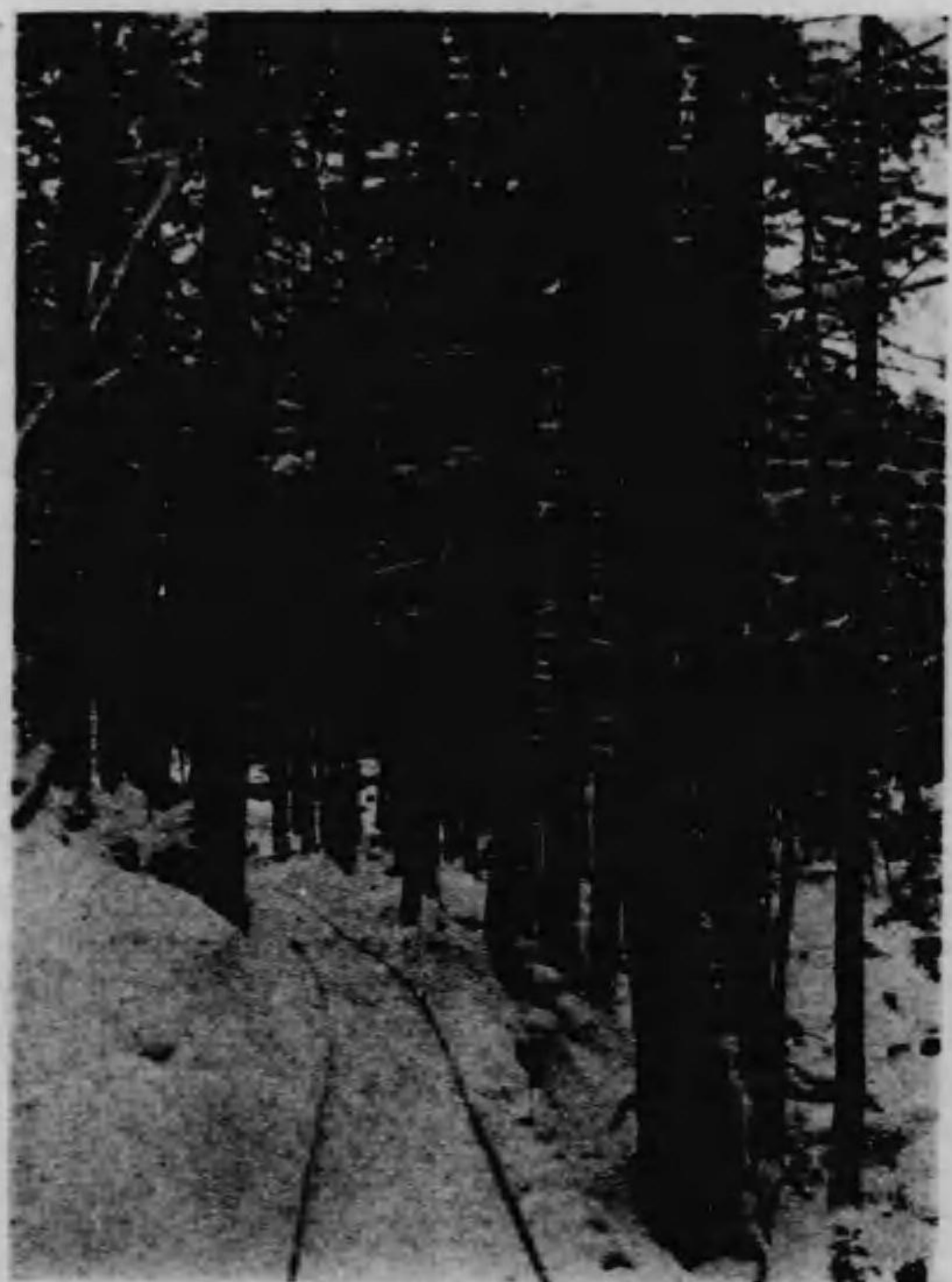
線が見られない。さればすぎのすらりとした女性的なのに対してひのきはゴツゴツした男性的の感がある事は争はれない。すぎに慈母の懐しみがあればひのきは嚴父の氣質がある。又ひのきはすぎに比べて大きな枝を分ち且つ廣い角度をなす。是がまた樹冠を疎にし底の廣い圓錐形をとらしむる。但しかなりの老年となれば枝は自然水平になり又は垂下し幾分か鈍い形の圓錐又は拋物線體となる。是はひとりひのきに限つた事ではない。併しすぎの様な圓筒形になる事は出来ない。

(ろ) 光度と色彩。ひのきの樹冠は細い枝が密集し其林は極めて暗いものである。其幹の色もすぎに比して遙に黒く硬い筋肉と共に引しまつた有様を呈する。中年以後のものは其赤味が勝ち皮が剝落するが其形は益々硬くしくなつて來るとどまつ、えぞまつの様な雄大な所はないが落付きと引しまつた所に趣があり、葉を洩れて來る光線が斑點を描く等は仲々に興味を惹くものである。第七十三圖は木曾御料林一部のひのきの純林であるが其暗く濃い樹幹に綠葉を洩れて射入する陽光の状態をば十分に認める事が出来る。

ひのきの葉は濃綠色であるけれどもすぎの如き黒味を帯ばない。故に其キザキ

ザな綠線とともに軽く量重な趣はない併し一種の落付きと引しまつた風格とがある。やはり幹が通直にして

第七十三圖 ひのきの林 (木曾)



よく主位性を保ち兩側の枝條が均勢相稱を完うする賜であらう。又四季を通じて變化なく常に高尚な色彩を保つが爲である。

ひのきの材は甚だ貴重なものとして用ゐらるゝが其風景に及ぼす影響も貴族的であつてすぎの平民的なの

さにはらはひのきに似て居つて僅かの差は樹冠の形其尖頭の尙ほ鋭い有様と葉の色の一層軽く且白味を帯ぶる事にある。枝の出方や樹皮縦裂の模様も些少の差

第七十四圖 さはらの樹形



三〇四
はあるが一々説明するよりも寫真版が更によく物語るであらう。

其樹冠の色のひのきに比して稍や濃さの少いのは葉の形の鋭三角形なものと其裏が甚だ白い爲と思はれる併し其森林に於てはひのきに劣らぬ暗陰を呈して居る。次頁に示す寫真第七十五圖の如きは適量の間伐を施した

後なるにも拘らず猶頗る深い暗黒を示して居る。

是等感覺要素の仍て起す情趣は要するにひのきに次ぐものであると思へば大差はない。

第七十五圖 さはらの林 (札幌)

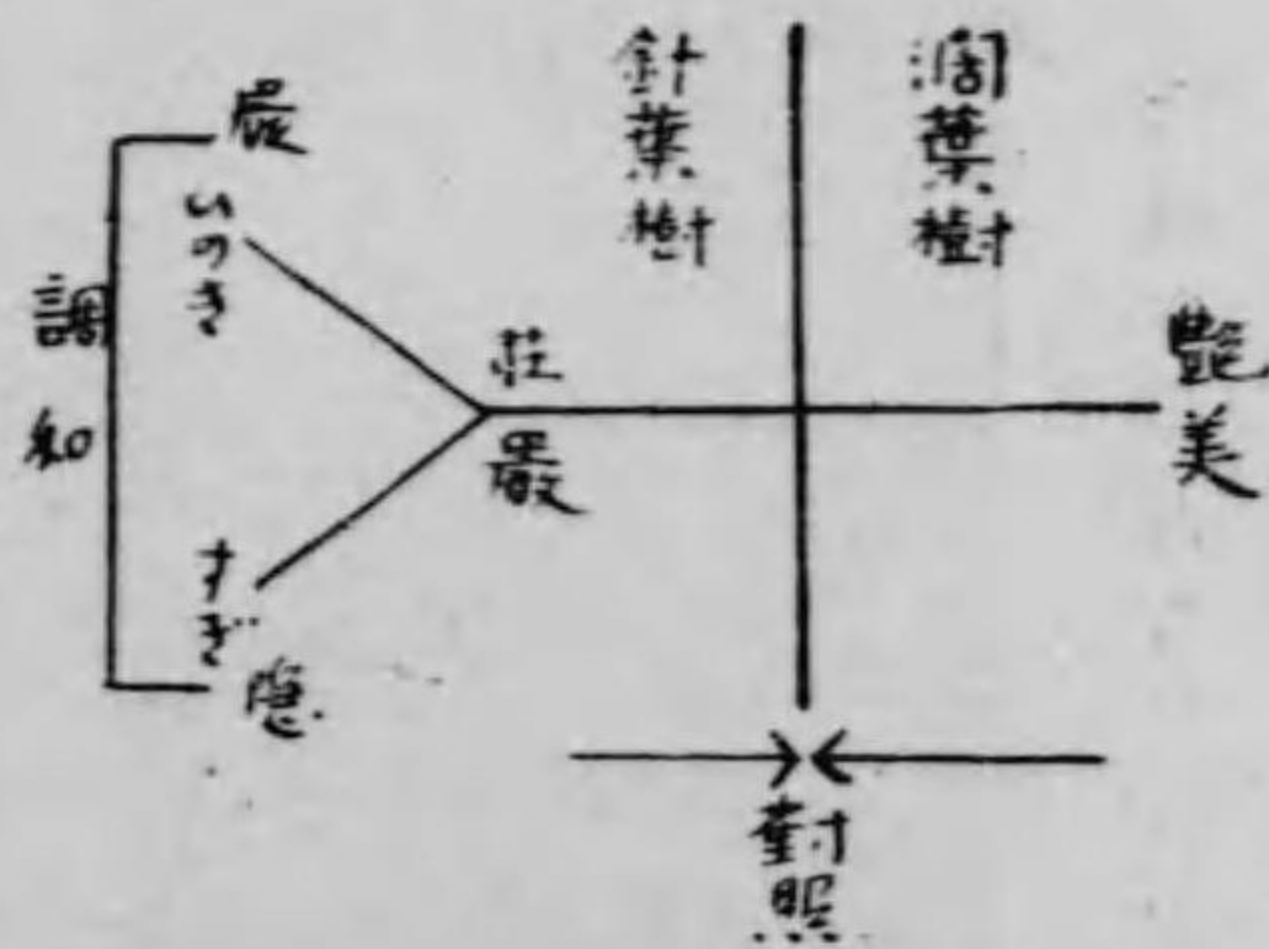


三〇五
(は) 其他の關係。ひのきさはら共に陰樹であつて幼時に庇陰を好むのみならず、長大木の林となるもよく鬱閉を保ち暗陰を作る。其直狀頑強な幹と枝、鋭尖強力な樹冠は幼壯老年を通じて峻嚴を保つのである。暗鬱峻嚴の趣は此樹種の主要なる美的の價值となつてすぎると同じ方向でありながら違つた向に復分れる。

力強さがあるけれどもすぎの如きゆとりが少い。されば此兩者を混する事は吉野で行つてゐる如く林業上有益な許りでなく美觀上も極めて有効な事である。特に社寺林の神嚴を保つ爲には緊要であらう。而して此際の混淆は均一に一本一本毎

第七十六圖

混交樹種の美的配置



あらう。

(三) ひば、あすなる羅漢柏

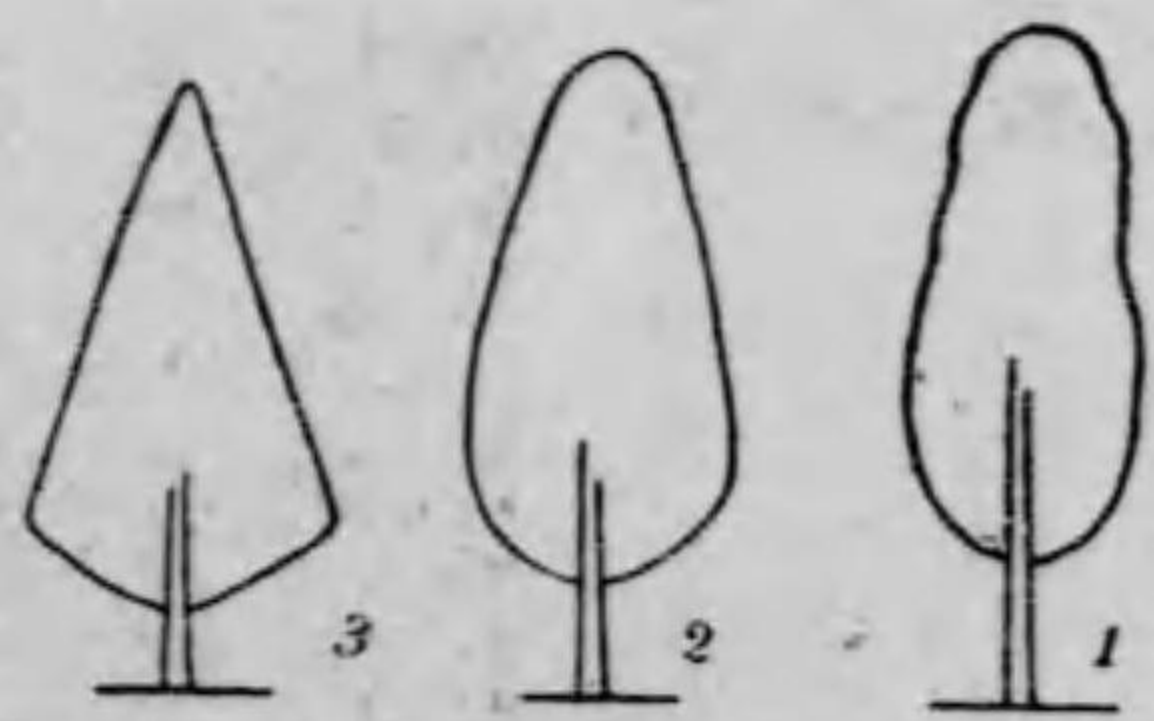
前にすぎとひのきとは同一方向の性質の更に分れたものであつて之を調和すれば甚だ美はしき者となると言つたが此兩者を一株の木に融合した趣を呈する

(Stammweise) 混するが精々小集團狀に混植すべきである。然らざれば兩者の融和又は調和を計る事が出來ずして對照によつて益々兩者の特性を極端に發揮せしむるであらう。是に反して闊葉樹特にさくらもみぢと混する場合には均一散布又は小集團狀にするよりはむしろ大きな集團をなさしむるか或は全く相對照せしめなければならぬ。針闊兩樹の特性は到底調和し得るものでない。むしろ相對照せしめて美を發揮せしむるを旨とせなければならぬ。此の關係は第七十六圖に示す事が出來る。尙ほ是等の關係は後章應用之部に詳述するで



第七十七圖 ひのきの樹形 (森青)

ものはひばである。此木は主に本州北部の寒地に生じて居つて青森官林内のものゝ如きは巨樹聳立して日本の三大美林の一をなして居る。(i) 形態。幼時は勿論ピラミッドの形を呈するも既に中年に至れば尖端鈍りて圓頭となり。老年のすぎに似て少しく底幅の廣き者となる。此概形を描けば第七十八圖に示す如きものとなり。丁度すぎとひのきの間になる。此形に就て考へて見るにひのきの形の底廣く安定にして落付ある性質とすぎの穩和なる趣とを採り併せたものであつて安定



第七十八圖

すぎ、ひのき、ひ

ばの外圍線

1. すぎ

2. ひば

3. ひのき

ぎの等分混合林の趣を表現し得ない事は明白である。ひはの形は魯鈍に近い併し特長がない譯でもない。其落付ある穩和な形がある外に其外圍線の美は寧ろすぎに優るとも劣らない。是は説明する迄もなくすぎの節に述べた美的性質をすぎよりは更に完全に備へて居ると言へば十分である。

ひはの分枝はすぎひのきよりはさはらに近くさはらよりも更に角度が小さく枝は細い。此はほぶらの枝の状態と同じく決して美的なものとは言へない。然しひ

はの幹は美的價值が少くはない。其真直長大の材をなして樹形に主位性を與へる事、枝を輪生しつゝ整形の階段状をなす事、樹皮の龜裂正しく縦に列び其色が既記三者に遙に優りて赤く暖調を帯びて居る事、根の張りの部分は特に優美な曲線を

第七十九圖 ひばの根張り

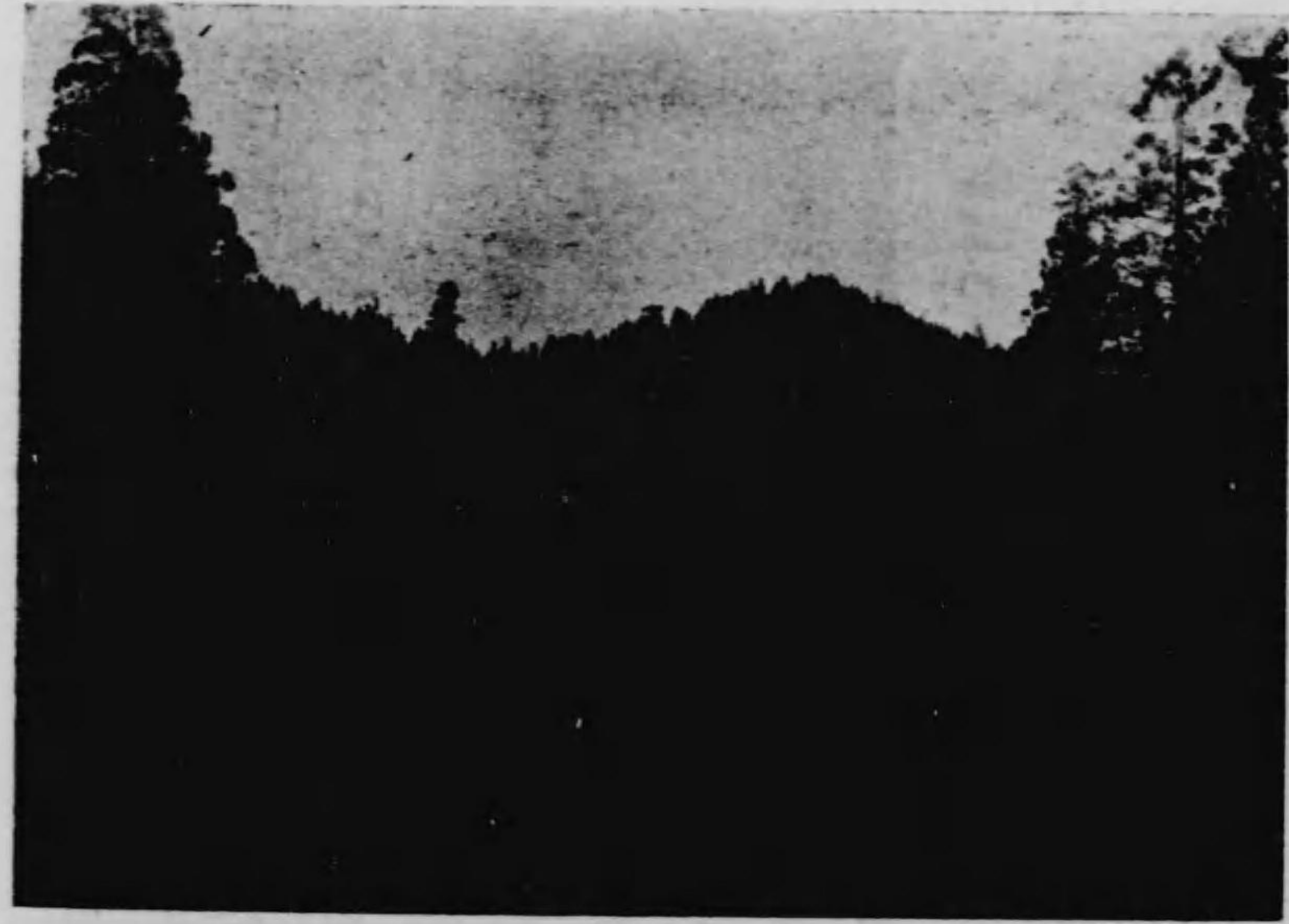


描く事等が其主要な原因である。實際ひはの幹は其大きさを増すに従つて美はしく立派になつて來る。青森の津輕半島の脊梁をなす山林には千古斧を入れざる美林がある。其頂の部分には驚くべき巨大の幹が濛濛として雲中に昇り其赤色暖調の膚に薄絹か綾の様に斷雲が纏ひつき又飛び行く。吾等北海道の人跡稀なる原生林の巨幹に慣れたる眼も此林に入つては嘆美の聲を發せずには居れないのである。ひはの木は其外形にあらすして其中に入つた時に味はれる。而して此林の美を破る事最大なるはあすなるのひじきである。此は到る處枝上に醜惡巨大の塊狀附加物となりて樹林の調和統一を破壊する事恰



林 純 の ほ ひ

第 八 十 圖



第 八 章 樹 木 の 美 的 價 値

(青森大森) 大 觀 の 林 ぼ ひ 第 八 十 一 圖

も人體顔面に生せる癌腫の如きものである。ひは樹幹の壯美を保たんとすれば之が豫防驅除に十分の注意を拂はなければならぬ。第八十圖は青森小泊官林のひは林であるがまだ其幹の壯美を十分に發揮する大きに達して居ないけれども幾分か味ふ事は出来る。第八十一圖は山又山に渉るひはの林でその繰り返さるゝ樹形の美が見られる。

(ろ) 色彩及光度。ひはの葉は既記三樹種に比して一層大きく厚い。そして鈍い緑色を呈して居り下面の雪白部も極小さい。加之小枝は密生

し且つすぎの如く塊状をなして集簇するが爲に光線を遮る事甚しく壯齡の林の如きは非常に暗いものである。此木は強い陰性の木であつて濃密な鬱閉を保ち暗黒と言つてもよい位である。かくの如き林は幽玄崇嚴の感を興さしむるものであるが其幹の形の優美又は壯麗なる事と膚色の暖調なものは無氣味になり易い暗黒をして一種懐しいものとする。是れひはの林の美の著しい特徴であらう。

ひはの葉が鈍綠色であり光線を反射する事少き爲に其林の外観も亦頗る黒いものである。しかし外観の黒調は内部に入れるものゝ如き尊嚴の感は少いものである。

(は)其他 　ひはの樹形幹葉の有様かく二三樹種の中間にあるが故に日和見の如く取なした話がある。俗辨説の諸木の中に名なき樹一本あり。此の樹のいふやうすぎよりまつは優れりと云へば、餘の木ともいふやうしかいふそこは何ぞと問へば我はひのきの木にあすならうといへりとかの如きは是である。しかしひはは何處迄も兩三樹種の折衷のみで終るものでなく其獨特の美がある。事前に述べた通りである。殊に樹幹と濃密な林内とに於て之を見る。

(四)あかまつ 赤松とくろまつ 黒松

まつはすぎよりも一層廣く殆んど日本全體に行亘つて生じて居る。海岸から内陸まで到る處人の目に觸るゝが爲に最もよく知られて居つて全常綠針葉樹の代表者として認められ我國にてまつと言へば針葉樹を意味する事が多い。従つて其美性の如きもよく了解せられて歌に詩に句に吟詠せられ俗謡にもよく歌はれて人情風俗を婉曲に表はす時の材料に用ゐらるゝを常とする。

老にける渚の松のふか緑しづめる影をよそにやは見る 源 順

是等の場合には勿論あかまつとくろまつとを混じ寧ろ區別せずに使はれて居るが兩者の間には少しく性質の差がある。今あかまつを主として述べる。

(イ)形態 一まつの形は幼時全く針葉樹として典型的な圓錐形を呈する。枝は幹上一定の距離を措て輪生し其長さは年々定れる生長をする爲に其の構成する圓錐たるや恰も算術級數よりなる縦座標を廻轉して得たるものゝ如くなる。併し此規則正しい形は永く保続する事が出来ない。種々の原因の爲に枝の陥缺を生じ不均を來し幹は又之が均衡を保たんと努むるものゝ如く曲狀の姿をとる。樹の全形

は爲に非常に變化に富み雅致あるものとなる。中年以上の自由に育つた木は大抵

第八十二圖 あかまつの並木



此形をとる。老年となるに従つて此趣を加ふるがすぎのものゝ如く不快を交ゆる事はない。東海道の五十三次の如きはかゝるまつの立ち並んだ街道の様である。日本の風景の多くはかゝるものを飾らぬはなく名木の内まつの如く數多いものはない。千代田城の濠に沿ふて植られたまつの如き芝増上寺の境

内のものゝ如き今に於て一層著しく美趣を貯へて居る様に思はれる。

かゝる危くかゝつた様な釣合ダウンスと言ふものは直狀の枝の兩側に於けるものより



（景遠山手岩）望遠のつまかいあ 第三十八圖

も比較の出来ない程雅致に富み情趣の満ちて居る事は東西畫家の等しく主張する所である併しそれ迄もなく此景趣に親しんで居る我國人心の琴線には夙に共鳴し來つて居つたのである。日本武尊が人に擬らへ唐崎のまつの讃美者が絶えぬのも全國無數のまつの並木の存するのも是が表顯であり殿上人の牛車も殿の行列も此間から見えがくれした。

まつの樹冠の形には之と纏つた特殊のものがない其特色とする所は變化極りなく小蓋狀の葉の集りが巧妙に點々と排列せられて居るにありと言はなければならぬ。又優美な曲線美をなすは幹許りでなく

其枝に於ても見らるゝ輪狀に出た枝は今や一方に偏り長い艶麗な曲線を描き乍ら横に伸び行き所々に葉簇を載せる。そして他の針葉樹の如く小さな角で岐るゝ事はない其先方枝端に近づけば屈折した形をなして如何にも雄々しく見ゆる。又伊太利のストーンパインの如く整形の傘狀をなすものは少い。

まつは適應性の強い樹種であつて如何なる砂地、岩石地をも厭はない。奇岩削立する所に根を張り枝葉を翳して居るのは多くある。又非常に美趣に富むものである。紹述の如雲如蓋、據陰崖、鬱々森々蒼玉枝、何辨秦封與夏社、歲寒不改後凋姿、と詠じたのは此種のまつであらう。

併し是等は林木としてのまつではないか、然らざれば森林として極めて拙劣な取扱を受けた場合のものである。所謂孤松と言はるゝものゝ型である。

林木としてのまつは些少の曲狀は爲すものゝ全體として長い直狀の幹を作る勿論其樹冠は上部につく。是は良林ならずとも少しく密生した林には見らるゝものである。しかしまつは強い陽樹である、其林内は暗鬱となる事はない。細い長い二葉の間からは大空の光が疎に入つて來て赤い黄いまつの膚を照して居る。寂蓮が



第八十四圖 あかまつ林

「月は猶もらぬ木の間も住吉の松をつくして秋風ぞふく」と歌つた如きは少しく無理がある様に思はれる。尤もくろまつはあかまつに比して幾分蔭は密であるが、家隆朝臣の「霞立つ末の松山ほのく」と浪に離るゝ横雲の空なども同じである。まつは細くて動搖し易い爲に之を渡る風の調べは甚だ快いものであつて、松風の音は常に歌よみの対象となつて居る。但し松風はあかまつの林にあらずんば良い響を發しない。

あかまつの幹と枝と葉とはかく趣あるものであるが、幹其ものゝ表面も亦決して劣らない雅致を有する。即ち樹皮の龜裂の古雅であつて變化があり色彩の明く暖い事は餘り外の樹種に見られない所である。

(ろ)色彩。あかまつの葉の緑りは又美はしき緑色の表徴とされて居る。其純粹の光滑のある緑色と軽い葉の調

子とは何時も快感を興ふる理由を有して居る。特に白雲青空と映え又其幹の黄褐又は赤褐の色と對照して人の美的感情を高むるのである。くろまつの葉は少しく黒味を帯び且つ形も大きく重い。其幹の色も黒すんで居つてあかまつ程の映がなけれども多く海岸に生じ白砂と映じ海波と對し澄んだ空に隣り又は斷崖絶壁にかゝりて色彩形態の對照上に有利な位置を占め以て美的價值を増して居る。何れのまつも男性的な快潤の色と力強い筋肉根張とを示すものであるが男性的な趣はくろまつに於て一層多い。

まつの緑色は實際に於て我國針葉樹中の王であつて他の企て及ばざる所である。ザリツシユ氏は樹種の美的價值を述べて彼國のまつを第一位に置いて居るが吾國に輸入されて東邦のまつと對照せられると其むくつけさが非常に目立つて醜い黒すんだ幹とゴツテリとした重苦しい葉の集り方と如何に最負目に見ても立派なものと言ふ事が出来ない。

(は)他樹種との關係。我國のまつがかく美はしい緑色を持つて居る爲に濶葉樹と配合すれば其美性は更に高まるを見る例へばもみぢの如き凡ての針葉樹と配し



(田津縣城宮) 林然天交混ぎぬく、つまかあ 圖五十八第

て良いものであるが特にまつとは絶好
對照をなすものである。まは瀾葉樹の
一層薄く軟い綠葉に對しては黒ずんで
濃く見ゆるものであるが秋の紅葉の際
には錦を緑の絹糸で縫つた様に美はし
く映える。又くぬぎの如き落葉瀾葉樹と
は特によく調和するものである。兩者共
に陽樹ではあるが其幹の形に於て似た
所がありくぬぎの落葉にならうとする
葉冠をあかまつが補ふ。またくぬぎが灰
色であぢきないのをあかまつの暖かな
色が和げる。あかまつの暗くなり易いの
をくぬぎの白い幹で活氣を付ける。特に
朝夕の光線がバツトさす時には非常に

賑な面白い感じを與へる。是は一種の快であつて此幹たるや純然たる針葉樹でも
またくぬぎ林でも得る事が出来ないものである。秋の頃まつの梢を渡る風に下を
かけ廻るくぬぎの落葉。または是に雨のふりそゞぐ音共に棄て難い趣がある。他の針
葉樹とあかまつと混淆する事は造林上の要件が之を許さぬだらうし美觀上決し
て策の得たものであるまいと思ふ。

さくらと混する事も亦同様である。

附(一)やうまつ 五葉松

我國には外にごえふまつとてふせんまつとがある。またはひまつもある。何れも
五葉である。五葉のまつは針葉の綠色軟く幹枝も又軟く艶麗な曲線を描き何處迄
も女性的である。森林としても孤樹としても二葉松程の價値多いものでもなく又
人の眼に觸るゝ事も至つて少い。但しはひまつ丈は全國高山に生じ富士を除く。偃
松帯と名けらるゝ程一の特別な森林景觀を作つて居るものであつて美觀上決し
て等閑に附する能はざるものである。

(五) はひまつ

あかまつはかなりの峻崖地にも生ずるがはひまつには及び相にもない。本州中部にては六七千尺の高さに生じて居るが之等は樺太に於ては平地に存して居る。其名の如く幹は直立する事なく蜿蜒として匍匐し黒すんだ枝は密に組合つて濃緑の五葉群と共に地面岩石を隙間なく蔽て居り遠く望めば筆に薄墨を以て含ませて描いた様に見える。しかし是に近よつて見れば純緑の毛氈を敷た如く柔く美はしい。高山の濁りない碧空又白雲と相映じて一段の純美を加へる。強烈なる焼岩の反射は是が爲に蔽はれまた和げられて高山の景色を懐しいものにする。此の緑美はしき影に天から降つた様な雷鳥が悠然と座つて思ひなげに人を眺める。

はひまつは美性は形としてよりも一團としての色彩に於て之を表顯するものである。特に秋季みやまな、かまど、たかねな、かまどの眞紅が之に填綴する時には其色美は最もよく高められる。我國諸高山の頂上附近が是等植物の彩色によつて快美を増加せらるゝ所決して少くはない。

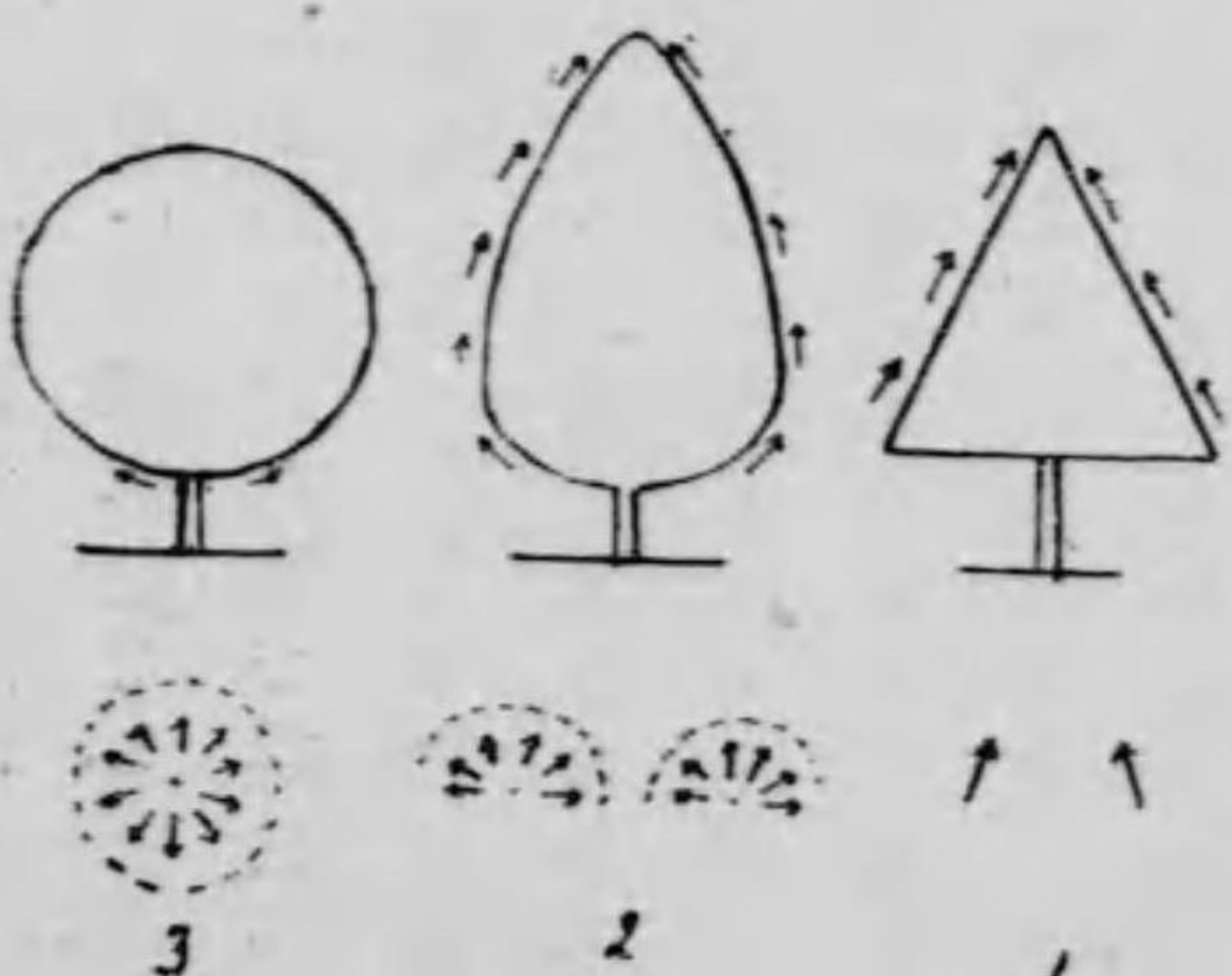
(六) からまつ 落葉松とぐひまつ 千島落葉松

緑色の純美に於てははひまつは到底からまつに及ぶべくもない。實にか

らまつ属は我國針葉樹中唯一の落葉樹とも言ひ得べく年々更新せらるゝ。緑色は常に鮮美を持し、加ふるに樹幹枝條の暖色と其樹形の整正なることによりて益々美性を高める。針葉樹中かくの如き彩色形状の美麗温雅なものはい。

(ウ) 形態 からまつは樹の幼時は最も典型的な圓錐形をとり二十四五年位上長生育の減退する迄は鋭い尖端の樹冠を形成するが之を過ぐれば漸次圓味を帯びて廣い圓錐形となる。此頃にて形としての美は極致に達する。かの圓錐形、圓筒形は其圍線が直線で眼は一方的運動をなし樹が餘程の高大とならざれば單純に擦過し了らんとし、其間に格別の味はなく趣もない。其ホドグラフを取れば依然として單一直線に過ぎない。かくの如きは單純無味の最たるものであつて厭倦の感を生ずるものも亦止むを得ない。又最も圓滿なりと稱せらるゝ圓形にありては變化はあれども常に等一反復の變化であつて厭倦を招く事直線と等しい。而して其のホドグラフは依然圓に終る。されば此無變化と齊一反復との間に位し單調に流れず變化ありて反復凡庸に失せず刻々に變化しつゝ、快き曲折を経て頂に達し相稱變化統一の美を具備するもの此種の圍線に於て之を見る事が出来る。其形急削せる

第八十六圖 樹木外圍線の比較



ものは痛切向上の感を生ずるが大圓に近づきて變化あり統一あり豊なる膨みを有するものは此圓味を帯びた廣圓錐形に於て存するものである。からまつの外形の美は茲に存するものである。其幹の主位性は高年に至る迄保たれ相稱の形も久しく續くが其材質の堅緻にして脆い爲に幹又は枝が往々にして挫折せられて屹屈した有様を呈する事がある。吾々の視覚は側邊周圍の狀勢によりて著しい影響を受ける事は生理學者も心理學者も認むる所である。されば枝振も頗る注目に値するものである。からまつの形態の整正を作るものは勿論幹の單一通直な事と枝が規則正しく輸出する事が基となるのである。そしてすぎひはと異なる所は枝が亦眞直に水平方向に射出せらるゝ事である。此枝の幹と直角に出づる事が樹形を正しく保つとともに近よつて見た時に剛い感じを與へる。又枝の先の方は眞直な様で僅の軽く力強い彎曲を示し又下垂する事も

ある。此工合は丁度すぎの幹の如く變化なきが如くして變化あり、單調なる如くして變遷あり、剛直にしてしかも温なる彎曲をなすが故に此曲線を辿つて見る時は吾々の眼が恰も滑なる河面を上つて行く様な快き進行を覺ゆるのである。此種の枝振の長所は本邦高山に生せる老齡のからまつに於てよく見る所である。またぐひまつに於ては一層よく是が現はれて居る。幹の龜裂も細かくして堅緻である。根の張りは著しくない。

からまつは内地諸高山に生じ富士のものゝ如きは強風の爲に幹が屈曲してはひまつ狀をなして居る。また近時諸方に造林せられ特に信州地方に多く之を見らるゝが年齡の幼いと密植せらるゝもの多き爲に天然のものゝ如く剛直の趣がない。其枝は柔き曲線をなし先端長く伸びて弱々しく見える。

(ろ) 色彩光度 春四五月頃に目さむる許り鮮緑の葉をつける美しさは到底他の針葉樹、潤葉樹の企及し得るものでない。緑色の快適安息を與へる事は既に説いたがからまつの緑色は實に其の眞髓を表し生活喜悅の感情を發顯して餘蘊がない。此緑色は決して一つの調色に止る事なく初めの黄を帯びた緑色から漸次純粹の

緑に近づき夏の終りには黒い程の濃さに達する。之を過ぐれば漸次に褪めて秋には美はしき黄葉となる。かくの如き色調の活動を呈するもの(濶葉樹に似たるいてふを除き)針葉樹中に匹敵するもの殆んどないのである。此葉冠の美はしきは整正剛直の枝上を飾り幹枝の赤味を帯びた色と對照して一層の色美を表顯する。から



第八十七圖 杉のつまらひ

まつの幹は初め黄褐色であるが後赤褐色となり暗褐色となり老年には細鱗處々に剝落して赤褐色を現はす。又枝の色は多く赤褐色もしくは黄褐色であつて之等の色が其葉冠の緑色とよく對照して美觀を呈するは既に色彩の節に説いた所である。また此幹枝の彩色は落葉後と雖も

美はしく特に冬季白雨と照應する時に一般の美を増すものである。

からまつは陽樹である。其樹冠は光線を洩す事かなり多い而してすぎやきはらの林の如く暗くはないけれども決して白光が散入してガラリとした有様を呈するものではない。洩れ来る光線は悉く鮮緑の葉に彩られて柔き緑光となりて林内に滿つる。爲に其空氣には綠色生活の氣が搖動して居る様に覺える。尤も中年以後の疎開した林に於てはかゝる趣は味ふ事が出来ない。からまつの林には鬱閉を保つ事が甚だ重要であると言はなければならぬ。

(ハ)其他の關係。ぐひまつは千島色丹島と其附近及び樺太に限り天生するものであるが前記からまつの美性を著しくよく現はして居る。其形は一層廣くむしろ心臟形をなして其豊さと膨らみとを示し幹の節間短かくして枝は眞直に出で屈狀の構造と濃い黒紫色は剛直の趣を強め全然黄色を含まざる綠色は堅緻の色相を呈する。冬季落葉たる北方の地に鐵林を植た様に聳立する。此樹種は生長が良くないけれども其景觀は引しまつたものであつて美觀上輕視する事の出来ぬものである。



第 八 十 八 図 ぐ ひ ま つ の 松

歐洲のからまつは優美と言ふ點に於ては吾國のものに比し一頭地をぬいて居る。其小枝の長いやさしい彎曲と先端の垂下と其色の淡い黄色と秋末の黄葉とは其重なる原因と見られる。

からまつは他樹種の何れとも配合してよく調和もし對照もするものである。

(七) えぞまつ 蝦夷松とあかえぞ

まつ 赤蝦夷松

えぞまつはとまつと共に北海道森林の大部分を構成するものであつてまつすぎと異り尖銳の銚を以て天に冲するの状をなし恰もキヨルナードームの有様をなすものである。

(w) 形態 樹形は長大なるが故に全形より言へば一の太い垂直線である。此性質より見れば第一編に於て述べたる垂直線の美觀即ち注意力の安定、嚴肅痛快の感を惹起するを知る。今茲に線と言つたのは勿論數學的の線即長さありて幅なきもの、謂ではない。只長さに比して幅が小なれば足ることは言ふ迄もない。天鹽演習林で吾等がなした實地調査によれば多數平均上樹冠の高さに對する直径の比は三分の一より六分の五の間にあるを知る。而して上向するに従つて緩なる減少をなし其變化は極少量であつて常數と見る事を得、直線に近いとも言はるゝがしか

第 八 十 九 圖 えぞまつの樹型



し樹形として吾々の眼に映する所を標準として見れば上部に行くに従つて幾何級數的の減少を示し樹冠の形は圓錐切斷の線を以て圍まれて居

るを見る。えぞまつの樹形は探究せらるゝ事なくして往々圓錐形として承認せられて居る。けれども法正の發育をなせるものは其概形卵狀圓形(ovate)に相當する事は第八十九圖のえぞまつ樹寫眞の枝端を連ねて樹冠の外形を作つて見れば明になるであらう。眼が此線に沿ふて滑動する結果得らるゝ美學者の所謂觸感の如何は絮説する迄もなからうが元來卵狀圓形の形は最も調和よきものゝ一であつて温健滑脱の感あるも未だ痛快崇嚴の感に及ぶ事がない。若し他の影響がないとすればえぞまつの樹形を觀照するに當り吾々の心内に起る感情は圓滑柔軟に過ぎず。て壯大崇高の尊さを生ずるに由ないであらう。然れども吾々の感情は幸にも一般に敏感であつて周圍の影響によりて左右せらるゝ事屢々述べた所である。テツンア氏は同一直徑の圓が内接外接せらるゝ三角形又は正方形によりて其面積に著しき差異のある事を圖解して居るのは此が説明に適するものである。

えぞまつの樹冠はすぎひのきの如く密集せる状態をなさざるが爲に其圍線は滑でない。大枝小條の間多くの空隙を有し適度に樹冠曲線の軟化を矯正する。故にかの小枝上向簇生して葉束狀を呈するほぶら又はしふれすと異りて頗る變化に

富み雅致多き姿態を呈するのである。是れ蓋しワード氏が *Esthetical* の樹木と然らざるものとを分けた原因であらう。

さてえぞまつの枝振りを眺めると其法正なるものは分枝整然として左右より均勢を保ち一の冗枝なく又不足する者がない。其一絲亂れざる様子は儀禮襟を正しうせしむる禮裝せる士人の風がある。えぞまつの枝は殆んど水平に發する。然し第五章に述べたる如き苦痛の感を與ふる事なきは何の故であらう。余等は其原因を次の三點に歸したいと思ふ。

第一、吾々の眼が之を觸動するには中軸を上りて左右に赴く事なく寧ろ總體的に外周を辿る。

第二、えぞまつの分枝は人工的の建築特に日本のものゝ柱の組合せや又人工的道路の交叉點の如く些少の丸味もない直角や又は銳角を以て交らない。即ち枝は當初例令直角に出づるとも生長して漸く其質量目方を増加し下垂すると共に漸く其筋肉を増加して例へば力士の重い物體を支へた様の形態となる。是によりて幹と枝との接合部は著しく丸味を附加せらるゝ。

第三下部より上部に赴くに從ひ枝の質量遞減するが故に其下垂の程度も減退し頂部に於ては殆んど直角となるか若くは銳角となる是が爲に變化は益益趣を帯び來りて全體に於て小變化統一等美の形式に於て缺くる所がない。

えぞまつの幹及び根本に於ても潤葉樹の如く其筋肉甚しき怒張を示す事がない。是れ樹幹直立してよく主位性を保ち分枝整然としてよく均勢して居つて力量の偏倚なくかの



第九十圖 老齡のえぞまつ

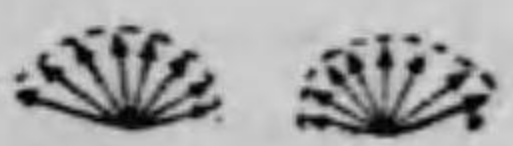
潤葉樹の根本より分岐して何れが主何れが從區別判明せざるものと異なるが爲であらう。故に筋肉は極めて端正であつて些の偏美も見事がないのである。

第九十一圖 えぞまつ老樹幹



五尺に向つて走り、茲に同形を視察せんが爲に左右の境界線に沿ふて上向する。而して始めは急激に外方に向ふもやがて歸來して漸く内方に傾き些少の變化をなし、罅隙に遊歩しつゝ、極めて快かりし散策を終へて頂上に達し中軸の梢端に於て左右合一する。出立點より茲に至る迄左右常に均勢を保つが故に之れを中軸に投射すれば全く同時に同一場所に並列する。今速さを常に同一としてホドグラフの

概畧を示せば(a)圖の如く左右全く相稱にして恰も中央に鏡を置きたる際の實物と像との關係をなす。是れ即ち視覺上の相稱である。此快き散策をなす事は例へて



第九十二圖

えぞまつ

外圍線

見れば春の日に庭園を散歩する如きものであつて丘あり泉あり桃李綻び黄鳥啼く下陰の道を迂曲して辿り山を廻り橋を渡り興盡きざるに日傾き人

悉く會するの類である。此間眼は常に樂まされて墻外の俗氣竟に襲ふ事がない。かくの如き眼筋の快き散策は恰も指を以て形よき圖形を探ると異なる事なく美學者はこれを眼の觸感 (Augentastensinn) と稱するは既に述べた通りである。

えぞまつは實に心地よき眼の觸感を構成するものであつて此點に於て下部のみ廣がりて上部急削する、ひのき、さはらや獨逸のフキヒテの企て及ばざる所である。加之分枝の整正質量の大色彩の典雅及び年齢の長久は此美を助けて益々完璧たらしめる。

(ろ)色彩と光度。人はよくえぞまつ樹冠の色を青又は黒と言ふ、併しえぞまつの色はかく單純ではない。えぞまつ樹冠の基色をなすものは言ふ迄もなく緑である。けれども緑の如く種別多くして分類困難なるはない。業に回折スペクトルに於ても緑黄より青緑に至る迄全色列の千分の二百を占めて居る。況んや是に加ふるに諸色の色相の殆んど無限なるに於ておや、陽光に浴しつゝあるえぞまつは青緑より紺青に及んで居る(スペクトルに合せればE線よりF線迄)。遠く之を望めば空氣の色を加へて紫青色を呈するに至る。其陰に當る部分は赤を帯びた青色に見ゆる事がある。眞は往々實在と混同せらるゝが實在は眞の一部であるけれども眞の全部が實在ではない。色彩の感覺に於ても亦然りて補色及び色彩三和音の法則は眞ではあるが宇宙間如何なる色彩にも太陽スペクトルの全部を含むものではない。只吾々人類の完全を求むる性質は此緑色の場合にも穩密の間に微量乍ら全色環を動かし特に光度少く色作用弱い日陰から之等全色を微發する。此理は眞であるけれども之等餘色は實在するのではない。

天然に存するえぞまつの緑色は都人士の想像する如く又都會附近にあるもの

の如く甚しき暗色を呈する事はないけれども潤葉樹は勿論他の松柏科植物(すぎを除く)に比して黒味勝なるは争ふ事が出来ない。其表出する感情はフェルベル教授も言つた様に眞面目である。其色彩は穩然として周圍に温情を興ふる謙讓の想がある。雪と對照したえぞまつは其形及び色に於て實に光輝に満ちて居る。暗色を増した緑色は純白の雪を戴きて下垂し寒風に慄へて唯一の飾を落せる落葉樹の内において眞摯の暗緑を持する。色彩の同一と是が否定とは兩様相對照して一幅の畫圖を構成する(第二十三圖參照)。

樹皮及び其裂け方に就ては言ふべき事がないけれども整形平等なる龜裂と沈靜崇高なる色調とは此樹種の特色を發揮するに十分なるものと言ひ得るのである。

(は)量及時間の關係　えぞまつの形色上の美は述べたが尙量と時との問題を殘して居る。えぞまつに就て第一に聯想せらるゝは其高大なる英姿である。蟲々として天を摩する颯爽の姿は着實眞摯なる色調とともに著しい壯觀を呈する。吾等はよく其高さを測定した事がある。高きものは二十二間に達し平均十六間の樹林甚

だ多く幹徑三尺以上の林は決して珍らしくない。えぞまつは崇高壯大の感を生せしむる力がある。而して量の膨大なるのみならず其内部に潛在するエネルギーと上方に向つて止む事のない伸長力とは益々此感を強からしむるものである。詩人が「高き御柱建つる木は己が作りし深緑の雲の中にも上り行く」(Meixner, Der Wald und seine Bedeutung)と歌つたのも理である。

吾等は曩に垂直線は痛快壯嚴の感を惹起す基であると云ひ又其整然たる枝條を伸へて天に冲するの壯觀は實に吾々をして物質中の偉大を嘆せしむる。且つ其年齢は數世紀に亘り尙其生長を續け幾千の緑子を其下に集ふ。吾々は形の大精力の大及時間の永劫を悉く此のえぞまつに見る事が出来る。且つ其力は動的ならず些も害惡作用を含まず。崇美の要件は完全に備へて缺くる所がない。

(に)えぞまつ林　えぞまつ林は數多えぞまつ群團であつて各樹下枝の量を減じて力枝は上方に存する。此が密林に入れば惡棘の熊笹も影を潛め蔓莖も形を沒する。光度は少く暗色は其度を強め幹は微赤く空氣は冷である。日光は星の如く針葉の間より洩れて其緑子に接吻する。此林内に於ては壯嚴なる寺院殿堂に入れ



第九十三圖 大觀の林つまぞえ

るが如く見上る許りの巨柱は朦々と
して針葉雲霧の間に昇上し人をして
其威靈に感じ神々しさに首垂るゝを
禁せざらしむる。ロツスメツスラー氏
は樹林を建築に準へて幹と枝振とは
主要部分に當り葉芽果實を着けて樹
冠は其裝飾に當ると言つた實にえぞ
まつ林は壯大神嚴なる建築であつ
て其の莊麗高大なる柱石と端嚴神聖
なる裝飾とは神の御業としか思はれ
ないのである。

第九十三圖は天鹽演習林幌加事業
區のえぞまつ林の遠望であつて其風
格の莊麗偉大なる樹梢曲線の典雅優

美なる。其濃淡漸層の變化の美に富める。觀る者をして飽くを忘れしむる處がある。
人造の縮緬や天鷲絨や之に對しては何の顔色があらう。

(ほ)美的價値の總覽 以上四項に亘つて諸方面よりえぞまつ之美を分析研究し
た。しかしえぞまつ之美はかくの如く個々別々に表顯するものではない。全く統一
されたる全體として現はれるのである。其太く高くして剛健なる垂直線や滑にし
てしかも變化に富める全形や大枝小條の蔭付きたる擴りや巨大なる體軀、晝尙暗
き密林、老幼小團欒せる種族美や其多種多様な外部の迫害に抗戰して幾千年
其地位を保ち來れる偉力悉く渾然として觀者の眼前に來る。されば人心に及ぼす
感化の絶大なる之に如くもの少く無智のアイヌも彼等の所謂良木の集團たる此
森林に入りて此木を禮拜し平穩安息勝利多獵を祈願したと言ふ。

Wieder wachsen dunkle Fichten,

Leise klagt die Quelle dort,

Hier, das ist der rechte Ort

Für schmerzliches Verzichten,

とニコラウス、レナウが歌ひまた

Über allen Gipfeln ist Ruh
In allen Wipfeln spürest du
Kaum einen Hauch;
Die Vögellein schweigen im Walde.
Warte nur, balde
Ruhest du auch!

とゲーテが感興に満ちて歌ひ出でたのも屬を同じうする此フキヒテの林であるがえぞまつに於て更に適切なるを覺える。

要するにえぞまつ之美は自然美、森林美中最も高尚なる莊大神嚴の美であつて寧ろ精神的宗教的領域を摩せんとするものあるを覺える。

(ハ)他の樹種との關係。えぞまつは曩にも言つた如く其色穩然たる暗色であつて周圍に溫情を與へるの性質あるが爲に何れの樹種ともよく調和するものである。其形の力強くしてしかも典雅なるはよく濶葉樹の平板にならんとする景觀に刺戟を與へ引立たしむる。特にいたや、かへで類との混淆は最も絢爛の配色を呈するものである。其混淆の法も規則的ならざる限り散布集團ともに良好の結果を得



第八章 樹木の美的價值

第九十四圖 天鹽演習林の一部であるが是にはいたや、かへで、かつら、か

る第九十四圖は天鹽演習林の一部であるが是にはいたや、かへで、かつら、かんは、な、かまどの類が極自然的にえぞまつと混生して居るが其形態色彩共に興趣多き有様を呈して居る。

此美點を有し北海全道を飾つて居つたえぞまつ林も今や急速に減少しつつあつて其原因は勿論斧と火とである。吾々の子孫の代には最早此天巧の盛觀を見るに由なく僅かにからまつ、どいつたうひ位が異國の調和しない姿をして生へて居り、えぞまつは處處伐り残されたものゝみが悄然と立つて居る事となるであらうか惜しみ

ても餘りある事である。

Ein Fichtenbaum steht einsam

Im Norden auf kahler Höhe

Ihn schließt, mit weisser Decke

Umhüllen ihn Eis und Schnee.

Er träumt von einer Palme

Die fern im Morgenland

Einsam und schweigend trauert

Auf brennender Felsenwand.

と歌つた一もとのどいつたうひの姿も餘事と思へないのである。

此詩は三浦白水氏がよく譯してあるから引用する。

北のさびしき禿山に

眠来れば雪こほり

松は夢みの道遠き

ひとり淋しく言葉なく

ひとり立ちけり一つ松

上をおほひぬ真白くぞ。

南のもゆる岩の上

立てる悲しき椰子の木を。

北海道北半部には普通のえぞまつ(くろえぞ)と雜つてあかえぞまつが生じて居

る。是は名の如く樹皮が一層赤く其枝は短大であつて葉も短く太い。そして歐洲のもの、如く葉の断面が矩形を呈する。其色もえぞまつ程濃緑ではない。さればあかえぞまつの林は暖調を帯びた色彩が流動して居り堅重な趣がある。低地には此の大樹の純林が多くあつた。巨大な圓柱がそろつて直立し上にはえぞまつより短かく厚い針葉を密に付けた樹冠によりて被蓋を形成して居る有様は實に莊觀である。恐らくは他に比すべき樹林はなからう。然し是も斧と火によつて最早吾々の容易に見得る地方には存することが無くなつた。

我國本土のたうひはえぞまつと大した美觀上の差異がないから別に書かない。

(八)とゞまつ 椴松

とゞまつはえぞまつと並んで北海道の重要樹種であつて其量はむしろ後者を凌駕して居る。

(イ)形態 全形の卵狀橢圓に近い事はえぞまつと異なる所がないけれども多くは其樹梢更に尖銳であつて爲にピラミッド形に近いけれども其基部は維然として卵狀橢圓の面影を存して居る。されば視線の之を觸動するに當りては其始め緩か

であつて快き曲線の階調を味ひ半を上る頃より少しく急斜をなし漸次速度を増加して進行し其が速度は愈々大になり頂點に達する時は最も甚だしく勢強く天に冲するの相を呈する。故に其基部重堅の礎に立ちて偉大なる勢力と止むなき努力とを以てエーテルの中を錐進するの状は痛快壯烈であつて單一直線の如き夢想も猶及ばぬ所である。さればとゞまつにはえぞまつの如き莊重偉大の感が少いけれども彼に見ざる一の特徴、痛切壯快なるものあるを見る。フォンザリツシュ氏は彼國のたんねとふいひて即ちどいつたうひの關係はぶうへとあいへの如しと言つて居る。ぶうへは優美艶麗の趣ありあいへは豪壯なものである。さすればたんねは優美艶麗のものを言ふ意である。此たんねは我國のしらべとゞまつと極近いものである。然しとゞまつの形はかく優艶の趣がない。此のとゞまつの曲線は始め緩かで快く後に急速直行して鋭尖する。されば其特徴は莊重と激越と靜穩と活動との調和にある。此美は、すぎにもひのきにもひはにもまつにも味ひ得ないものである。えぞまつの樹冠は其分枝と圍線の罅隙とを以て軟化を防いだけれどもとゞまつに至りては此援助を求めずして已に爽快である。軟化の趣は見出し得ないの

である。是れ即ち曲線の大半を直線にて置換したのに基かなければならぬ。其上全形は幅に比して高さが頗る高い。老大なるとゞまつは上長生育止り其側枝を伸長して従つて頂端丸味を帯ぶること勿論であるけれども未だえぞまつの如く甚しきはない。此とゞまつの形は一種獨特なものである。とゞまつの樹冠の形狀の美なる事かくの如きに加へて分枝の有様の美はしき事も決して見逃し得ない。其整然たることえぞまつに優るとも劣るものではない。

第九十五圖 とゞまつの樹形

幼い枝は幹と鋭角をなして出て恰も上伸力と重力とのレゾルタントを表はして居る。けれども中年以後のものは質量増加の爲か次第に水平に近づき其小條と共に底廣き端舟の如き形をなし、之等が樹幹を廻りて輪生するによりて其狀洋傘を

覆して日光を受容るゝ様である。Mas hat in die Luft hinein greifenの句はよく枝の容姿を現はして居る。太き枝は老年に至れば遂に下垂するけれどもえぞまつの如く甚しい事はない。

さて吾々が此態を觀照するに當りかの中年の枝の曲線の進行による運動感覺と是に伴起する心内の快感及び美的情操如何は今言ふ迄もなく體驗するによりて明にせらるゝが下方老木の枝の重々しき垂下より中年の者の美はしい曲線を經て上部少壯な枝條の元氣潑瀾たる有様に至る漸變の美は外形の觸動に由れる變化と相共に助けてとゞまつの特色たる曲直兩線の階和沈靜爽快の融合を完うするものと言ふ事が出来る。此秩序整然たる變化あり加ふるに之を統ぶる主軸直幹の巨柱を以てするが故に形に於てとゞまつの美を發揮するに何の不足するものもない。實にとゞまつの幹の如く通直なるものも多くない。

しかもえぞまつの幹は膨大粗笨に傾き錐形をとり易きに比しとゞまつは完滿圓筒の形を持し法正なる年輪の構成をなす。其形の通直なる其色の瀟洒たる例うべきものが少ない。樹冠の婉麗爽快分枝の階和整正樹幹の完滿瀟洒とゞまつ形態

の美は觀る者をして飽く事を忘れしむるであらう。此の木を觀れば苦痛も懊惱も去りて端正爽快の感を起すに至るのである。次に色彩の美は又決して見逃すことは出来ない。

(ろ)色彩。とゞまつの葉の鮮綠なるは何人も之を知つて居る。綠調飽和の度に於てしこたんまつに近く光輝潑瀾たるに於ては彼に優つて居る。只彼が如き柔さを有して居ない。實にとゞまつの綠色は針葉樹中最も純美なるものゝ一にして北海道の山野基色の大半は是によつて支配せられて居る。しかし市内や路傍にあるものは塵埃に蔽はれて生氣なく黒ずんで見える。春季此中から黃綠の新芽の生ずるのは非常に不調和に見えるものである。此新綠は天然の針葉樹林中にあつては燦然として光輝を放つものである。色彩漸層の美に就ては夙に述べたが下方の濃綠は上方に向ふに従つて漸次鮮明の度を加へ梢端新開の芽は鮮美の黃綠を呈し濃き碧空の色と對照して益々鮮明となる。碧空は新綠によりて益々藍碧を加へる。空が下方に向つて次第に黃色を交へて薄らぐや樹葉は之によつて益々濃く空は愈淡い。縁邊對比は補色を喚起し空は莖を呼ぶ葉は黃を招く。其度は各上下に漸變

する。かくして對色たる赤及び橙も穩密の間に喚起せられて茲に全色環は生動し全一に歸せんとする。眞に美はしい天の配色である。夕方になり、一日の業果て、太陽はやをら身を屈め射棄られた矢を地上から拾ひ集め再び黄金の簾の裡に納める。頃にとゞまつは橙黄の空に暗青緑の衣をつけて峙つを見る。

とゞまつの林は之に近づき接するとき葉の裏の美はしき白線は彌が上にも優美を加へ遠く眺むる時は轟々たる樹冠の白線は樹冠の葉縁と相映じて雅麗例ふるに物が無い之に近づいて見たる時其瀟洒清白の肌は特種の皮膚の構成と相埃つて針葉樹中稀に見るの美觀を呈する。約そ針葉樹の中とゞまつの如く美はしい肌を示すものはない。瀟洒たる白青の樹皮は滑澤優美なる内自ら男性的の龜裂を示して居る。蓋し樹皮の横裂する針葉樹は甚だ稀である。此横縞は動もすれば細長纖弱に見えんとするとゞまつの幹に天賦美麗の横線を以て其大きさを與ふるものであつて觀るものに瀟洒爽麗の感を與ふるとともに沈靜不動の念を生せしむるのである。實に此樹皮はとゞまつの樹幹によりて起る注意力の安定に確固たる基礎を與へて垂直線を見る疲勞をして生ずるに由なからしむる。又とゞまつの皮膚

第九十六回 とゞまつの樹幹



の色を飾る種々の苔類は美觀上決して見逃す事が出来ない。或は紅に或は茶褐に、青白瀟洒絹布上に高尚典雅の模様を配したる様である。實にラスキンの言ふ通りとゞまつに於てもその一平方寸内に對して如何なる注意を以てするもよく之が微妙精巧の美境を盡す事が出来まい。天の對境を吾人に示すや常に此種の美と眞諦とを以てする。遠く眺むれば齊一瀟洒の美、近く望めば爽快不動の美而して近接して見れば纖細靈妙の美何處の地か之を賞するの適否があらう。實に是れ天巧と人爲との岐るゝ處と言ふ事が出来る。更に深く入つて其材の色澤を檢し構造を鏡下に擴大するに其美麗愈々多きを覺ゆる。

(は)量及び時間の關係。とゞまつの高大なるものは高さ十六間直徑三尺に餘るものがある。量の大なるはえぞまつに及ばない。されども他樹種に劣るものではない。是に伴ふて起る清操の如何は前既に盡したから今更に贅言するの要を見ない。加ふるにえぞまつに優る強力の形態は向上生育の偉大なエネルギーを思はしめ、其水平上向の枝振と整正輪狀の分枝とは強烈にしてしかも秩序あり確實な根據の上に立てる。誤りなき努力を見るの感あらしむる。其年齢の高大なる事はえぞまつに比して甚しく劣つては居ない。初夏の豊かな花實と秋末無數の飛種とは其蕃殖擴張の隆盛なるを示し春光に浴する幼樹の鶻々乎として上長するのは繁榮の表徴とも見える。

要するに吾等は形の大精力の大及び時間の永劫を此とゞまつに於ても亦認め、事が出来る。實に害作用を含まず。絶大に過ぎず。崇美の要素は缺くる所がない。而してえぞまつに見ざる優美の素因が加味せられて居る。

(に)とゞまつの林。單一とゞまつの美は説いたが其集團たるとゞまつ林には更に優つた美觀がある。光線の不足は其樹冠をして暗緑ならしめ外部の反映せる樹

幹はほの暗く和げられて蘇苔は悦んで其肌に接吻する。樹脂に富める空氣の香は一種の清々しき感を起さしめる。

第九十七圖 とゞまつの林



えぞまつ林内に於ける沈鬱の感は何處か賑はざるものがある。其暗緑の木蔭から開放地に出づれば晴々しい外脱の境に達せる思がある。とゞまつの林に於ても壯美の要素たる、私の被壓は其初め免るゝ能はざるも之と同感するの時、我は向上し偉大なるの思を起し浮世の騷擾塵埃は全く念頭を去り此林

を出でたる後は靈氣の洗禮を受けて光明に浴した様に清淨爽快の感は復昔日のものではない。

とゞまつ林中に生ずる下草には美麗なるものが多い。つはめおもとは鮮緑な厚い葉の間から純白の細い花瓣を開き、ひめいちげは早春緑草の間に點じふくじゆさうは路傍に全盛を配しなにはづゆすりはは常緑の葉を連ねな、かまどは秋末眞紅の絨をかける。

やまげらみやまかけすは陽春樹幹を廻りかくこうは初夏深緑の葉蔭に啼く、ふくろの枝に止りとらふねづみの實を玩ぶのを見る事が出来る。うさぎは純白の毬の轉ぶが如く去りきつねは美はしき毛皮を見せて樹影に潛み入る。是等は悉くとゞまつ林に入るものが常に興味を以て見る處のものである。

とゞまつはまたえぞまつに混じて其暗鬱を和げ錯雜柔軟のいたやならに交りては之に刺激を與へ覺醒せしめる。秋末満山黄に染る時其間に點綴しては深緑の絲もて錦の衣を縫ひ綴るにも似る。北海道に於ては到る處此種の美觀に接する事が出来る。

(四) 美的價值の總覽 以上四項から見るととゞまつの美は莊重堅實の相あるとともに優勢な不屈不撓の精力があり。沈鬱と瀟洒とは快き階調をなし單調なるが如くして著しく變化に富む。特に何れの樹種と混するもよく之と調和し之を刺戟して變化を與ふる點はとゞまつの美點として決して忘るべからざる所である。人間の精神上に及ぼす効果の偉大なるは決してえぞまつに劣るものではない。

第九十八圖 もみの若木



我國本土の深山を飾つて居るしらべはとゞまつとよく似て居つて前に述べたとゞまつの美は此樹種に於てもよく適合するものである。

もみはとゞまつ

と同じ属であるけれども其樹冠の形と色とはえぞまつに近い。只樹皮は彼の如く赤黒くなく淡黄灰色を呈し鱗片も更に小さい。甚だ巨大の幹となり莊大の趣がある。之は舊家の邸内によく見らるゝ所である。森林としての美觀もえぞまつに準ずるものである。

(九) こめつが米梅

こめつがは本土中部の諸高山に生じてすぎひのきの類と異り非常に堅實精緻な有様を呈する。後者の人の目に慣れ極めて家庭的なるに反し峻邁高雅であつて仙骨稜々たるの風格がある。是れ其生育地の風土氣候によつて然るものであらうが人の感覺即ち美の材料としては主に其形態にありと言はなければならぬ。

其幹は直立して直角に枝を出し時には固い筋肉隆起して振れて居る事がある。膨軟等と言ふ事は少しもない。樹皮の表面も堅い細い鱗片をなし赤味が、つた褐色を呈する。是亦堅緻の趣を助けるものである。此幹は仲々に巨大となり莊重の觀を呈するものが多い。枝條は太く堅くして水平に勢強く伸び行く。これが僅かの曲狀は眞直なものよりも更に力強く見える。小枝と葉とは其先に密生して深緑を呈



第九十九圖

樹老のゐちい

し樹冠を形作る。かくして構成せらるゝ樹冠の形は先端の鈍い砲彈の形を呈する。しかし細かき葉の鐵針の如き有様と深く濃い緑色とは著しく堅緻の趣を表はすものである。此色が強く光を照り反す幹と對して益々堅く見ゆるのである。

かくの如き高雅堅緻の風格あるこめつかがよく十間の高さに達し二尺以上の直径を示し長いさるをがせを枝より垂れて高山上澄み切つた碧空に聳ゆる時に其美的價値は愈々高めらるゝのである。

つがは是に酷似して居るけれども其葉は更に大きく扁く樹も大きくなりこめつがに比して稍穩かである。是も高山に於てよく特徴を表はして居る。

之等の林内はすぎひのき程ではないけれども著しく暗く葉間を洩るゝ光線は極少い。故に此の内に入れば森嚴の氣身に迫るを覺ゆるのである。

(十) いちろ、あら、ぎ一位

いちろも亦堅緻の趣ある木であるがつが類と異りて直幹主位性を保つよりもむしろ横枝が一層太くなつて横の著しく張つた樹形をとるものゝ方が多い。本州中部及び四國の山中に點生するが今最も多く見らるゝ北海道の天然のいちろに

就て觀察して見やう。

(i) 形態 雅致ある事まつ以上である。是までに述べた松柏科樹木は主として高く聳ゆる直幹があり枝葉是につきて樹冠を作り割合に單純な圓錐形、卵狀橢圓形をとつたがかくの如きものはいちるにあつては偶々高燥肥沃の林地に生じたものに見るに過ぎない。多くは主軸の生長數丈にして止り側枝開展して稍扁平の樹冠を呈する。けれどもストインバインの如く單調の曲線を以て圍まるゝ傘狀をなす事はない。其外圍線は強大屹屈の折線より成り或は高く或は低きものあり到底一律を以て論じがたい。一塊の巨巖地中より湧出した様なものがあり力士が大石を昂持せる如きものがある。又巨態の蹲居せる如く武夫の端座せる如きがある。

第百圖
いちゐの外圍線



第五章に於て形の横に擴張したものは沈着不動の感と與ふる事を説いたがいちるには之に加へて圍線

の強力屈曲を以てして居て崇重の感を生せしむるに足る。第百圖は野幌國有林内にあつたいちゐの圍線を書いてみたものである。之を辿れば幾回となく屈折上向して廣き頂に達する。一體眼筋運動の激變は危懼不安の感を生ずるものであるけれども此の場合は突如下降する如き事なく漸次段階を経て上昇し行くが故に豫期の境亂せらるゝことなく努力しつゝ向上發展し行くが如きものである。されば此激變の痛切壯快の感をこそ惹起せ危懼不安の念を混すること毫もない恰も高山を攀ちて四望豁達の頂に達すると同じである。

第百一圖

いちゐの枝振



更に枝振は此感を高むるに力あるものであつて水平に近く岐れた太枝は剛直の態を持しつゝ下方に彎曲して其上端が再び上向するものが少い。されば樹態は愈々沈靜に益々壯重を加へるのである。吾々が枝振を眺める時眼が此曲線を辿るによりて起る快感は沈着崇巖を加味せらるゝこと著しく轉た襟を正しうせしむるものがある。而して小枝のよく密生

して樹幹を包み主幹は自ら作れる葉蔭より隠見して其美はしき肌を示し特に人の注目を惹かんとするものゝ様である。

實にいちゐの肌の如く美はしきもの針葉樹中の珍とすべきものである。其滑かにして稍軽い龜裂を示し全體を支配せる暖き紅褐の色はよく深緑の葉色と對照し其滑澤なる肌合は剛健なる樹形壯重なる分枝と相埃て對比と曰はんよりは寧ろ調和均勢を保つに似て居る。形態の美性は他の針葉樹は論ずる迄もなく一位屬中にも其比少い。

針葉樹の研究家ウキルソン氏は日本のは世界の同屬の者の中で最も優良な形質を有する種であると云ふて居た。眞に英國のユーツリーや



第二百二圖 いちゐの幹

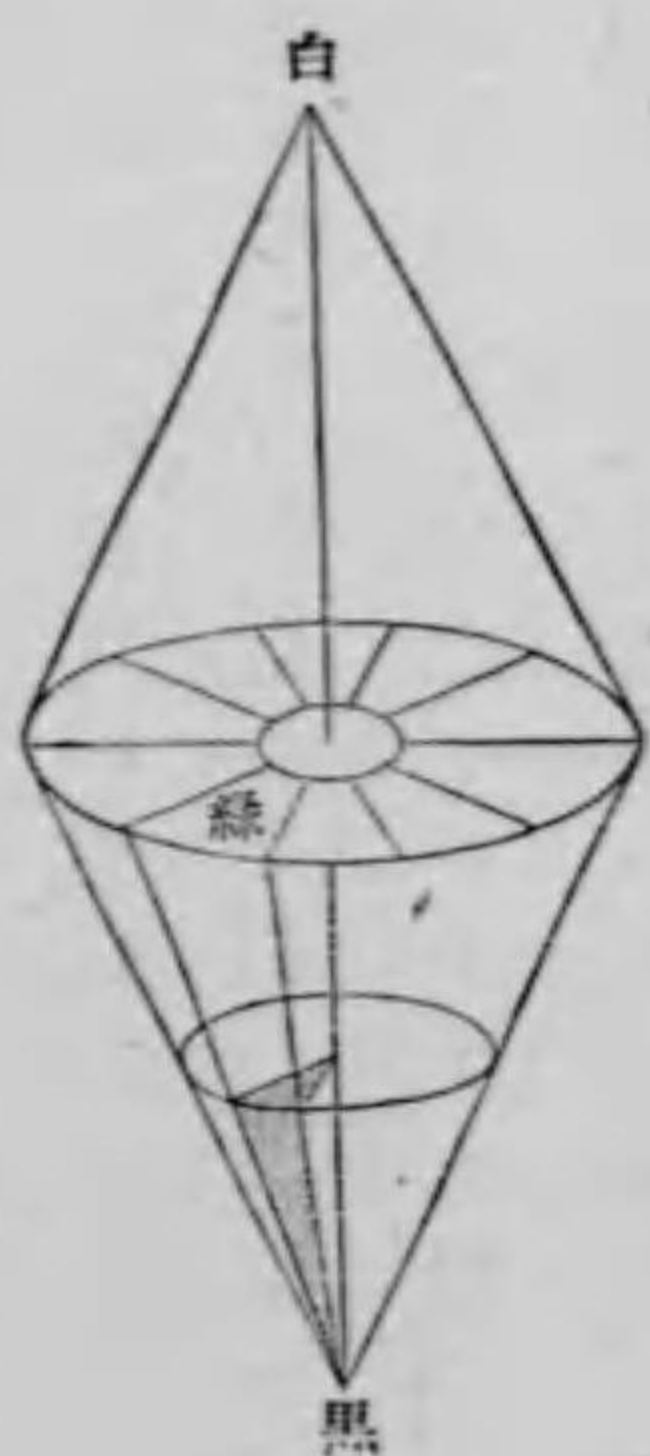
獨逸のアイベに優る事多い。いちゐの筋肉は著しい隆起を示す事がない。其隆起は寧ろ端正通直なるを覺ゆるがまたこめつがの如く強き振旋を示す事もある。

しかしかの人々の珍奇とする畸形は腐朽又は老衰せる樹木に於て見るのみである。いちゐにありては畸形に傾く筋肉の怒張を示す事は壯健法正の樹木に於ては決してない。之はいちゐがかの潤葉樹種又は本土のあかまつの如く樹幹傾斜して生長する事がなく特種の怒張を求むる事ないのであらう。是がまたいちゐの美的長所である。

(ろ)色彩 いちゐの葉の濃緑なることは人よく之を知る。かくの如き特殊の葉色は珍らしい。深き暗緑は寧ろ黒色と調合せる濃緑とも言ふべく堅緻にて光澤あり暗鬱なるが如くしてしかも快き濃緑は言ひ表はすに都合のよい詞がない。蓋し冷暖凹凸の色は之を説く事容易い。堅緻潤澤なるものに至つては吾々の受くる感情は述ぶるに難いのである。緑色が調和平穩生命の微色たる事と黒色が崇重沈思眞面目の色なる事は既に詳述した。いちゐは此兩者を極めて完全に調和したものと云ふ事が出来る。吾々は之に對して深刻崇重の感を生ずると共に動きなき眞理と

生命とを享受するの感なきを得ないからまつ鮮緑は愛すべく秋季の紅葉は賞

第百三圖 いちゐの色相上の位置



すべきものがある。けれどもいちゐの深緑は之を畏敬尊崇の念を生ずるのである。吾々は此濃緑を分析する事は出来やう。しかし此色相より受くる全感情は此分析によりて知る事は出来ない。葉間に珠玉を連ぬる其實又空の色と對照せる美は例ふる語

がない程である。

(は) 其他の關係。いちゐは好んで隠濕の地に生ずる。密林の内絡澤の邊に静座して動かす春風の誘ふなく烈風害するものがない。時々雨雪日光の垂直に落ち來つて樹冠の所々に光輝を與へ興味を添へる丈である。其暗黒静寂に感じて百鳥も黙し小川も聲を潛める様である。西行の「またれつる入相の鐘のおとすなり明日もやあらばきかんとすらん」と歌つた趣はかゝる邊に於て一しほであらう。いちゐの特色を發揮する所は隠濕静寂の谷間にある。吾々は此地にありてよく美的價値を認

め得る。

往々にして庭園高燥の地、何等木蔭の之を蔽ふものもなき所に立てるいちゐを見る事がある。是即ち人手によりて移植されたものでいちゐが乾燥不適の地にありて強烈の日光に遭ひ過度の水分蒸發を強ひられて氣息奄々たるには何等の美的状態を見出すことが出来ない。

いちゐの枝條を切り込みて圓形や傘狀を作り單調相稱の美を作らんとするは以ての外と言ふべきである。

いちゐは其生長極めて遅い。強大材となるには幾多の年月を経なければならぬ。故に大きさの上にては他樹に優る事は難いが年齢に於ては著しく高いものが多い。釧路國厚岸のさかさおんこおんこはいちゐと(同じ)は五百年を経過して居ると云ふ事であるが、かゝるものは珍らしくない。かくして甚しく堅緻不朽なる爲に古來飛驒山中のいちゐは王笏の材となり一位の稱を忝にした。

かくの如き性質あるが故にいちゐは東西共に神話を藏し尊崇の的となつて居るものがある。ウォーズワースはボローデルの兄弟四株のいちゐを彼が深い

神秘の調を以て歌ふて居る。北海道には前掲のさかさおんこに神話的の由來がある。アイヌはいちるを良木として尊崇禮拜する。

さればいちるは天然紀念物としては最も重要なものの一である。三好博士は紀念物として保存すべき價值ある樹木部類の要目をあげて。

- 一、土地の風致上密接の關係あるもの。
- 二、郷土の歴史に關係あるもの又は記録的口碑的に由緒あるもの。
- 三、紀念として種植せしもの。

四、學術上珍奇なるもの又は完全なる標本と認めたるもの。

五、美觀上卓絶せるもの。

(但し以上には一樹及び森林を含むて居る)

の五項として居るがいちるの特性を是に照合して見るも保存すべき價值のある事は明に知らるゝのである。

要するにいちるの美性は極めて高尚複雑であつて幼稚なる齊形、相稱、比例の如き形式にて律し難く調和對比の如き單純なる配合を以て論ずる事が出来ない事

は明である。いちるの極致は端嚴神秘莊重にして思索的であり眞摯にして典雅である。之を觀照するに當りては諸種の聯想や記憶回想が湧出生起し渾然として融合する。

〇(二) いてふ 銀杏

いてふは我國人家附近に多く見られ巨大の樹木をなすものが珍らしくない。併し林木として天然に生じたるものはない。此樹は唯日本支那に限りて生存する古い地質時代の遺物である。歐米人は奇異の眼を見張りあらゆる害敵に犯されざるが爲めに市街並木として最も適當なものと認めて居る。あの落葉する廣い楔形の葉を持った木が針葉樹の類であるのは如何にも奇妙に思はるゝ。

いてふの形態はその幹が潤葉樹の如く大枝を分つ事多きにかゝわらずよく直立上向して樹冠をして高く聳えしむる。其全形は直線を以て圍まれて大きな角形をする。老大木に於てもよく形を崩さず堂々たる姿勢を示して居る。枝は上下四方に多く出で、冬季に於てもこんもりとして居る。特に此季節に於ては其特性がよく現はれる。大小多數の枝は悉く北方になびき其方向と曲線の工合とは著しく統一



せられて居る

三六二

いてふの美性は此統一のある
こんもりとした堂々たる英姿に
あるが其幹の非常な大きさに達し
て直立し根の張り枝の岐るゝ所
の筋肉の逞しき形は其雄々しさ
の主な要素をなして居る。時によ
ると太く重々しい乳を垂れて奇
異の觀を呈する(第二十四圖)

い綠色を呈するなど何れも雄大の趣を助けて居るが秋季に葉は黃金色に變じ全
く特種の美麗な景觀を表はすものである。葉は扇形をなし前方中央に缺込があり
中肋なく細い平行脈を有する。長いよれた葉柄をつけ吹き拂ふ風に飛び散る。拭ふ

幹の色は淡い黃褐色で古いも
のは黒褐色になり其葉は夏時鈍

が如く晴れた秋の碧空に黃金色の片々が光眩く飄るのも快く鼠色の空に銀線の
如き雨の降る日に純黄色の葉の綴られて來るのも懐しい情趣がある。之等はいて
ふの美性の特に著しい所である。是に加はるに故事傳説のはてしなき聯想は巨大
の幹蒼鬱とした繁みとともに豊富なる美的價值を作るものである。

いてふは行道樹としては缺點のないものであつて近時日本のみならず歐米に
於ても盛に植付られて居る。人によつては其果の汁の醜く不快なのを以て排せん
とするが市街並木として不適當な大きさに達する迄結實する事はない。又天然紀念
物として保存すべきものも頗る多いのは勿論である。森林としても其美的價值少
くないであらうが未だ實行されたのを見た事がない。

(三) たけの類竹

たけは東洋の特産物である。其景觀も亦東洋特有なものである。單子葉植物で林
業的經營の出來るものはたけの外にない。竹林の美は古來我國人の深く同感する
所であつて詩歌や俚謠となつて現はれ紋章として用ゐられまつむめとともに節
操繁榮を顯はす三幅對となつて居る。是たけには特種の美性があるからである。

たけには孟宗、淡竹、苦竹、女竹、鳳凰竹、刺竹等其種類頗る多く其外には是と近いさゝの類もあるが今は一般に涉つてたけの類の美性を見やう。

たけは非常な速さで生長し一年内に極度に達する。眞直に上へ上へと伸びるが甚しく弾力あつて細い枝と葉とをつけては其重みの爲にあちらこちらと彎曲する。其形は滯のない筆法で描かれた様に優しく底強い曲線を作る。桿節は等しき距離を置いて存し太さ何處より減するが判らずに頂上迄行く。枝は節から交生し幹に比して非常に細い。そして束になつた様に小さな角度をなして小枝を分ち先端に細長の葉をつける。此枝も亦強くしなやかなる爲に美はしき曲線をなして垂れ下り一束をなした枝葉を叢着する。

たけの幹枝はかくしなやかであるが珣素を含む事多く材質は仲々に堅く其表面は堅徴にして光輝ある緑色を呈し光線を反射して居る。葉も亦同様である。

たけは丈高く細長き形をなすも密生する性あるが故に其林は殆んど人の入るを許さぬものがあるけれども其林内は決して暗蔭を作る事がない。是其光輝ある表面と全林を支配する少しも黒味を含まぬ緑色とが細葉の間を洩るゝ光を緑色

に染めて賑はして居るからである。古人も之を讚して、吳竹は色もかわらで水がきの久しき世より緑なるらんと云つて居る。

第一百五圖 竹の林



優しい弾力ある姿態と此

美はしい一體の緑色とは竹林の美觀を作る要素である。さればたけの林の美は微吹く風に揺れてざわめき霏々と降る霖雨にも滋々の聲を立てゝ一層深き趣を加へられる。特に冬夜音も立てず降りつもる雪に竟に堪へずして折るゝ響は雪の夜の静寂

に特殊の興を添へる。又たけに雪の積つた有様は晝眺めても美はしい。夢かよふ道さへ絶えぬ吳竹のふしみの里の雪の下をれと有家朝臣が詠んだのは此景色であ

る。又月明なる夜婆娑なる蔭影が窓近く繁るのは特殊の竹林の美である。古人が、まど近きいさゝむら竹風吹けば秋に驚く夏の夜の夢とよみ、窓近き竹の葉すさむ風の音にいとゞみじかきうたゝねの夢と歌ふた如きは又美趣ならざるはない。

竹林は極めて短かき輪伐期にて更新し得て個人の林業として頗る行はれ易く利が多いものであるのみならず外の樹種他の國にて味ひ難い美趣に富むが故に其栽培は奨励する價値があり特に其美趣を味ふ事を勧めしめたならば人心の向上の上にも甚だ効果が多い事であらう。

第三節 潤葉樹種

潤葉樹種は針葉樹種に比して種類も遙かに多く其美性も頗る雜多である。其形態に於て其色彩に至て其變化に於て其大小年齢に於て多趣多様なるは到底針葉樹の比でない。針葉樹の林から此處に入れば恰も端嚴崇重な殿堂を出で、綺羅眼を奪ふ社交界に入つた様である。之を説き盡す事の出来ないのは勿論主なるものだけに就ても詳しく述べる事すら至難事である。されば林樹としての重だつたも

の、美的價値を極めて概畧に見て行くに止まる。

(一) くぬぎ櫟とこなら櫟

共に温帯に普通な樹木であつて矮林の美を代表するものである。似寄つた點が多いから兩種一所に述べる。

第百六圖 くぬぎ



第八章 樹木の美的價値

落葉かし類を通じた特性は次節に於て説くであらうが此兩種は其特性の一部を保有し一部を變化したものである。かし類は豪壯堅實の相を有するがくぬぎ、こならは優美な親しみ易い趣を呈する。それは主に形から来る。老年のものは縦裂せる樹皮を有する肥大せる幹と屈

折した枝とを具へ嚴めしく見える。但し之はくぬぎ、こならに限つた事でない。一般にくぬぎは生長が極急速なるが爲めに細いすらりとした幹を具へる。特に矮林のものは其旺んな萌芽と生長との爲に一層しなやかな曲線をする。之はなら、かしの類の幼い時に普通なものであるがくぬぎに於ては最もよく現はれる。又此幹の處々間を置いて出る枝も同じく優しい曲線を描いて居て細長い葉を其先に付ける。

くぬぎの葉は此屬中最も細長なるものゝ一で少しく反曲しつゝ、大きな鋸齒で縁とる。

形のみならず色彩も懐しき趣があつて早春灰褐色の幹は日に照らされて灰白色に見え新條は褐色が、つて柔い毛を被り是につく葉も毛にて包まれる。生長せる葉の表面は深緑の色を存するが其裏面は灰綠色を呈するが故に葉簇は光輝ある緑色の反射をするとともに僅かの風に揺ぐ時は附近に銀緑の色波をたゞよはせ、其間から緑色の長い花序を垂れる。かくてくぬぎ林の夏の色調は優しく愛らしいものである。秋季に至れば葉は乾燥して黄褐色に變じ碧空に映え又寒風に慄へ

る。やがては吹きまくる風にもぎとられてザバ／＼と木の間を走り廻り翻騰として舞ひ上る。秋末其林の内を歩めば足下には枯葉がザハめきまつはる。灰色の幹褐色の枝には尙茶褐色の葉が振れ捲いて附着し吹き廻されて居て一種の情調が満ちて居る。みぞれふる朝、木枯すさぶ夕更に興を添へる。此葉は冬季を越して翌年までついて居る。かしの葉も又永く梢に止つて居るがくぬぎ程の趣がない。

くぬぎは矮林又は中林としてもよく又陽樹同志の混淆林としてもよい感じを與へる。あかまつとの混淆林については曩に記した事がある。こならともよく調和する。

こならは一層白い粗い樹皮と細かい葉とを有し葉色も表面裏面ともにくぬぎの趣の更に強いものがある。特に早春に銀白の嫩芽ふくらむのは快い感じを與へる。大體に於てくぬぎに似て其以上のものと言へるが懐しきは左程でない。

此兩樹種の老木は著しく男性的になり屹屈の狀を呈し其特有の趣が失せる。しかしかくの如きは凡ての樹種にあるものであつて殊にかし類に於て取立てゝ言ふ迄もなからうと思ふ。

あべまきも亦くぬぎの類の美性を有する。

(二) みづならとおほなら

此種類は前節のものよりも寒地に偏して生ずる。そして優しさと懐しみとは少

第百七圖 みづならの樹形



く却て壯美に傾いて居る。みづならの完全に大きく育ち上つたものはドームの形をする。此形は豊かな圓滿な崇重の相を表はすものである。此形はどろのきの老樹にも見る事が出来るけれどもみづならのものは彼に優つて美麗である。是は其葉の形がすでに大きく厚く枝の先端にては莖生する。かくして厚い密な集團を作り濃密の團塊累々として重疊する樹冠を作る。この堂々たる樹冠のドームを廻る曲線

は力強い巨浪の岩角に打寄せる様に雄渾の趣があり怒濤澎湃たる大洋を見るの感がある。

第百八圖 みづならの枝振



である。

此全形の豊圓團線の雄渾に加へて枝振は又頗る強大である。枝は大きな角度を以て分れる隆々の筋肉を張りつゝ屈曲し較短大の小枝を岐ち相交錯して網状をなして居る。かくの如きは最も強力な豪壯の觀を呈するものであつて濶葉樹中是に匹敵するものは少い。かしたともに落葉かし類の特色の一面を遺憾なく現はしたもので

みづならの樹皮には又此以上の特性が漲つて居る。中世紀の才子佳人に醜惡として恐怖せられたならの樹皮の龜裂と色彩も今の開化發達した人々にはよく美的同感せられては其偉大堅

第百九圖 みづならの幹



實壯烈の美は具に味はるゝに足る。其深刻なる縦裂に少許の横裂を加へ鱗片に厚層をなし其灰褐の色に暗黒の溝を交へ頑強な深刻な感じを起さしめる。根の張り筋肉の隆起喋々する迄もなから

う 樹皮の色がかく暗い褐灰色を呈するに樹梢亦深緑濃厚の色を呈しよく量重の情

調を完ふせしめて居る。枝條は灰白色であるけれども全體の主調に大きな變化を與へる事がない。

此樹新春の頃には黄緑の芽を開いて軟い調子を漲らす。夏時は黒き迄濃い緑を示し其量重な樹冠は少しの風には動搖する事なく男性の調色がある。又秋季には特殊の黄色をなして全山を賑はすの壯觀は他の樹種には容易に及び難い所がある。其黄葉は少しく褐色に傾き楓樹のものゝ如く鮮美ではないけれども其面積の大きいと運動の重々しいのとはよく人の注目を惹くものである。これが風に從つて舞ふの状は楓葉の小旋廻と對照して益々大きな波動を著しくする。

みづならの木は形や色の雄壯豊圓に加へて其大さは頗る偉大となり年齢も著しく高く三四百年を越ゆるもの決して珍らしくはない。しかし其幼時はくぬぎの如き優しきがある。

おほならは特徴に就て或は同一種だと云ふ議論がある程みづならに酷似して居る。實や葉に植物學上多少の區別點はあつても其趣には何の差別もない。

(三) かしは櫟

かじははみづならに似て更に剛健な相を呈する。其枝振の特種な事は何人も先づ眼につく所である。

其樹形はかのマーシャル、ワード氏の言ふかじは型の好標本である。此形は圓滿な宏潤の感を人の心に起さしめる事前に云ふた通りである。

其樹冠はみづならのものより一層大きな團塊より成る。従つて之を圍む線は巨浪の湧き上る様に見え雄大の感に打たる。其太い側枝は幹から直角に出で力を罩めた屈曲隆起をなして外方に向ひ上部の枝は稍上方に向つて屈線状をなし



第百十圖 カシハの樹形

て伸長する。枝端亦極めて太く全體を通じて豪壯の氣が溢れて居る。主幹は強大で

あつて筋肉隆起し且つ太い枝を交互に兩側に伸して上昇し樹冠の半に至りて一

第百十一圖 カシハの枝振



般に巨大の分岐をなして何れが主軸たるかを判別し難きに至らしめる。けれども其分枝の法と枝の勾曲と肉付とには前述の特徴漲つて居るが故に決して亂雜に陥る事なくよく統一性を保つて居る。

樹皮はならよりは更に大きい。そして厚い龜裂をなすも其色は彼よりも淡く軟味を帯びて美はしい。其筋肉や根の張り

に就てはよく類似して居て多く言ふの要はない。

かじはの葉は厚く大きくて廣い卵圓形をなして居る。其長さ實に七寸に餘り幅

四五寸に及んで居り、縁邊は大きな波状をなして居る。何れも其景觀をして雄大ならしむるに足るものである。葉の形の特殊の穩かな大きな形と波状の縁とは

第一百十二圖 かしはの樹皮



又往々種々の表徴に用ひらるゝ事がある。而して其色も亦特殊な有様を呈するものである。かしはの葉は其上面に深緑の色を湛え、下面は淺綠色を帯び、短かい剛毛が疎生して居る。葉柄短かきが故に風に動く事は少い。此濃緑の色彩は夏時に於て最も深く、殆んど黒きが

て剛健雄大の感を強める。

此形態色彩の感情に預つて力あるものは包有する蓄積量と經過せる年齢との高大なることである。かしはは高さに於てならに及ばない。併し太さに於ては常に彼を凌ぐものがある。されば全形の壯重豪健なると此主軸の太く逞しきとは相伴ひて重堅強大の感を増加するものである。其年齢に於ても數百年に亘りしかも其生長を繼續して尙形を損せないのは量と時間とに於て崇高の感を起さしむるに十分なものがある。

此樹の海風強き砂土の地にあるものは矮小の形をとり、益々頑強に抵抗して屈折せざる有様は人意を強うし、其耐忍力に同感せしむる。もしまつを力士に譬ふるならば、かしはは實に甲冑をまとふた武士とも言ふべきである。されば歐洲人はよく其崇美を認めて之を賞揚し、英國の如き其國の表徴とする事、我國のまつと同じである。又古代に於ては希臘羅馬の人は是を以てフオイス神に祀り、ゲルマン人はドナールとして祭り、今尙力及強さの表徴として居る。

Ja, dich nennt man mit Recht

Des Waldes Königin Eiche,

Unter den Bäumen ist

Herrlicher keiner als du!

と歌つたのも此意味からであらう。

かじはの黄葉は褐色を含む事多くて左のみ美はしくないが永く梢端に止つて吹風に煽られて居る様も雄々しいものである。

かくの如きかじはも其幼時に於ては愛らしく幹のすらりとした容姿は優しく見える。特に矮林に於ては此趣が多い。其冬芽の開くのと嫩葉の數葉一所より萌出づるを見るのは又愛らしいものであり。古人も小兒の手に似て美はしいと言つて居る。このてかじはとは蓋し是よりの稱であつて今の云ふ側柏の意ではない。

ふたかたに我氏神をいのるかなこのてかじはのひらてたゝきて(相模集)の如きは此例である。又葉の表裏色異なるを惡意に解して

なら山の兒手柏のふたおもてにもかくにもねぢけ人のとも(萬葉集)と歌つたものもあるけれども是はむしろ個人的偏見ではあるまいか。

兎に角此木は全國に亘りて廣く存し其全蓄積量も決して些少ではない。特に其特色は前述の如く目立つて居るものであるから風景を支配するの效果は仲々に多きいものである。利用方面も益々多く特に單寧材料として最有利なるものなれば是が植栽は大に推奨すべきものであらう。剝皮林として矮林を仕立て又中林として用薪材を供し他樹種と混淆して利用の價を高め且つ其雅致を加ふる事は決して些少ではない。

(四) くり栗

殼斗科植物には喬大を致すものが多い。くりも其一つである。

くりの木の中年迄の優しさは丁度くぬぎ、こならに髣髴たるものがある。其は幼時は勿論圓錐に近き形をとる事勿論なれども法正に生長せるものは廣い倒卵形に近き樹冠となる。併し此木は風折の害にかゝり易く完全圓滿の樹冠を保つものは少いが猶特種の美的價值を有して居る。かく巨大に達したものはやはり豪壯の氣が溢れて居る。幹は多くの太枝を分ちて樹冠中に消失するけれどもくりの木は能く頂部に至る迄明かに主軸を進行する事が出来る。分枝の角度は狭小であつて